リリネギカルま！

大政奉還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリネギカルま！

【Ｎコード】
Ｎ４５７５Ｖ

【作者名】
大政奉還

【あらすじ】

魔法先生ネギま×魔法少女リリカルなのは　のクロスＳＳです。

ご意見やご感想等ございましたら、お気軽にどうぞ。

［注］お手柔らかにお願いします。　あまり手厳しいと、創作意欲

が吹き飛びます。

また、更新は不定期になると思います。

Ｅｐｉｓｏｄｅ？　序章

何処かの世界、何処かの大陸の紛争地域・・・・・

空が、焼けていた。

家屋が、倒壊していた。

木々が、薙ぎ倒されていた。

人々が・・・・・燃え、撃たれ、潰れていた。

多くの血が流れ、響き渡る嘆きの声はとどまることを知らない。

そんな、地上に再現された地獄のような場所で、ローブを羽織った赤毛の青年が走っていた。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！　吹け（フレット）一陣の風（ウネ・ウエンテ）」

―　風花・風塵乱舞！

フランス・サルタテイオ・プルウエレア

強烈な旋風が、地獄の炎を吹き飛ばし、道を切り開く。

青年が辿り着いた場所には、瓦礫に埋もれる幼い少女がいた。

少女を瓦礫から助け出し、抱き起こす。

「う・・・」

「もう大丈夫。　すぐに治療するから」

額から血を流す少女に手をかざし、青年は『治癒（クーラ）』と呟いた。

優しい光が少女を包み込み、ボロボロの体を少しずつ治癒させていく。

「ア・・・アリガトウ・・・・・立派な魔法使い（マギステル・マギ）・・・・・ネギ」

息も絶え絶えにかすれる声で言った少女は、安堵したのか気を失った。

★
★
★

穏やかな雨が降る・・・

何もかも呑み込もうとした、地獄の炎は少しずつ沈静化していき、
煙りに隠されていた破壊の爪跡が、その姿をあらわす。

「・・・・・」

そんな光景を赤毛の青年はぼんやりと眺めていた。

「・・・・また、間に合わなかった・・・か」

血を吐くような声で、赤毛の青年、ネギ・スプリングフィールドは
そう呟き、踵を返した。

ここはまだ外縁部。

街の中心部をめざし、ネギは走り出した。

★
★★

『また失敗・・・　やはり、プロジェクトFではここが限界ね・・・・・』

それが、わたしが目を覚まして久しぶりに・・・初めて?・・・聞いた、お母さんの声だった。

お母さんの背中が見える。

わたしは大きなガラスの筒の中で、生暖かい透明な液体に漬かって体を丸めていた。

なんだか、とっても眠い。

ふと横を見ると、幾つも幾つも、大きなガラスの筒が並んでいる。

その中には、金髪をした・・・・・わたしにすごく良く似た女の子

が、わたしと同じように丸くなって、死んだように眠っている。

・・・すこし、こわい。

『もう、この施設は破棄ね。　必ずあなたを生き返らせてみせるわ、アリシア。　・・・・・たとえ私がどうなろうとも』

・・・え？　わたしはここに居るのに・・・・・

そんなことを微睡みながら思っていると、お母さんがテーブルの台座に近付いて行った。

そして、置いてある、黄色い宝石が埋め込まれた指輪を手にとって、すぐに元に戻す。

『この程度のロストロギアじゃ、次元断層どころか、虚数空間に小さな孔を開けるだけで精一杯ね・・・・・　フェイトに探させ・・・・・』

そこまで聞いて、わたしは眠気に身を委ねた。

第一章　英雄神話

空から伸びた巨大な腕が、街を潰す。

もはや、兵士も市民も関係ない。

すべての者が叫び、逃げ惑い、為す術もなく蹂躙されていく。

「僕は・・・・・」

虚ろな瞳でそんな光景を見つめ、ネギはそれだけ呟いた。

その後に言葉が続かない。

なぜ、こんな紛争地域に魔族の王が・・・・・？

自分を狙った？

どうすればよかった？

なにが出来た？

今となってはすべて手遅れ、無意味な問いがぐるぐると頭をめぐっていた。

・・・・どうせこんなものだ。

心の奥に燻る闇が、囁いた。

そんなこと、ネギは嫌と言うほどわかりきっていた。

世界は優しくない。

平穏は驚くほどあっさりと崩れてしまう。

どれ程大切なものでも、溢れるときは残酷なまで容易に溢れ落ちる。

一人の人間がどれだけ努力したところで、なにも変わらない。

世界は、悲劇に満ちていた。

・・・十八年前・・・十一年前もそうだった。

結局、自分はなにも変えられないのだろうか。

だけど・・・これは酷すぎる。

どこからか、笑い声が聞こえる。

その笑い声が、自分の口から発せられているのだと、少し遅れてネギは気づいた。

「は・・はは・・・ハハハハハ」

笑わなければ狂ってしまいそうだった。

ふいに、魔族の王がネギ目掛けて巨大な拳を振り下ろす。

ネギは反射的に、『断罪の剣』を腕に纏わせ、一閃した。

魔王の腕が切り裂かれ、地面を揺るがす轟音と共に、背後に落ちた。

「・・・・・」

百メートルを超える巨躯。

よくなるファンタジーゲームのラスボスにそっくりなその姿に、かつての仲間、自分を支え、励ましてくれた少女なら必ず突っ込みを入れるんだろうな、と思い、ネギは凄惨な笑みを浮かべる。

・・・もう、何もわからなかった。

―　杖よ

メア・ウイルガ

あれは倒すべき敵。

ネギは背後に杖を浮遊させ、魔族の王目掛けて飛翔した。

★★★

かつて、戦争があった。

大きな大きな戦争があった。

後の歴史家が『新旧世界大戦』と名付けたその戦争は、核兵器や超大規模戦略魔法が使用され、罪のない多くの人々を消し去りながら、五年もの期間に渡り継続された。

その間、七十億の地球人口は瞬く間に三分の一以下にまで激減してしまう。

泥沼の様相をていした戦争は、黄昏の姫御子を人柱とした地球異界への世界創造により、その翌年、終結を迎えたのだった。

『あの戦争から二十年・上巻』

著・朝倉和美／２０３１年／上巻・５５頁

★
★★

「グオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

天を揺るがす咆哮と同時に、魔族の王は幾百幾千のドス黒い魔力で編まれた槍を、飛翔し、高速で接近するネギ目掛けて雨あられと浴びせかけた。

霞む速度で迫る、一本一本が二メートル近い槍の弾幕に、ネギがとった行動は迎撃だった。

右手を前に突きだし・・・・・

―　右腕解放・魔法の射手・雷の千一矢！

デクストラー・エーミッサ・サギカ・マギカ・コンウェルゲンティア・フルグラーリス

雷を宿した千にもおよぶ魔力弾を解放した。

せめぎあう槍と矢。

しかし、圧倒的な大きさの違いに、魔法の射手の弾幕を数十の槍が突き抜けていく。

冷静に軌道を見切り、紙一重で回避する。

その合間にも、ネギは呟くように詠唱していた。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル　契約に従い我に従え、高殿の王（ト・シュンボライオン・ディアコネートー・モイ・バシレウ・ウーラニオーメーン）来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆（エピゲーテートー・アイタルース・ケラウネ・ホス・ティテーナス・フライレイン）百重千重と重なりて、走れよ稲妻（ヘカトンタテス・カイ・キーリアキス・アストラプサトー）」

―　千の雷!!!

キーリプル・アストラペー

唱えたのは超広範囲雷撃殲滅魔法。

ネギはその魔法を放つことなく、球体状にし・・・・・

―　固定

スタグネット

握り潰し、自分の肉体へと取り込んだ。

―　掌握

コンプレクシオー

次の瞬間、ネギは雷と化した。

―　術式兵装・雷天大壮

プロ・アルマティオーネ・ヘー・アストラペー・ヒューペル・ウーラヌー・メガ・デュナメネー

「!?」

ネギの変化に気づいたのか、魔王は八本・・・ネギに切り裂かれ、七本となった腕を天へと掲げた。

それぞれに膨大な魔力が集中したそれを振り下ろそうと・・・・・

「させないよ」

「ガッ・・・！？」

したところで、五百メートルの距離を刹那のうちに詰めたネギが、顔を殴り中断させた。

巨躯がのけ反る。

が、それだけだ。

直ぐ様、腕による横薙ぎがネギを襲う。

霞む速度で薙ぎ払われた腕。

大気が激震した。

音速を遥かに凌駕した大質量の生み出す衝撃波が、天を裂き、地を砕く。

完全に回避した筈のネギの額がわずかに裂け、鮮血が頬を伝う。

それを拭ったネギの顔には鬼も逃げ出すような凄惨な笑みが浮かんでいた。

―　魔杖雷鉾槍！

ハレバルダ・フルゴーリス

自分の背後に浮遊させていた杖を握り、雷の魔力刃を纏わせる。

そして再び、ネギは間合いを詰めた。

★★★

ネギと魔王の戦いは周辺一帯を焦土と化しながら、三時間に渡り続いた。

・・・僕はいったい何をしているのだろう。

そんな疑問がネギの頭に浮かんでいた。

守るべき街は蹂躙され、生き残ったわずかな人々はどこかへ逃げた。

・・・・・それで？

それだけだ。

守りたかった街は、見る影もなく消え去り、瓦礫の山と化している。

・・・・こんな不条理な世界のために、彼女は・・・・・・アスナさんは・・・・・・

そんなことを考えている間にも、ネギは条件反射的に戦い続ける。

巨大な腕を切り裂き、雷撃の槍を突き刺し、攻撃を回避し、殴り付ける。

腕から生み出される衝撃波と、魔力の槍による弾幕がネギの体に無数の傷をつけ、少なくない鮮血が流れ出る。

どれだけ雷撃に焼かれ、切り裂かれても、すぐに回復し、反撃する魔王。

終わりの見えない永遠のダンス。

しかし、ついに拮抗は傾いた。

幾度目かの攻防で、ネギは槍の回避に失敗した。

体勢が崩れる。

「っ！」

「グオオオオオ！！」

―　障壁最大

バリエース・マーキシム

唸りをあげて迫る腕に、咄嗟に障壁を最大にするが、圧倒的な質量差に受け止めきれない。

ネギの体は塵のごとく吹き飛ばされた。

地面を砕き、街の外縁部付近まで、約二キロは吹き飛ばされたネギは地に埋もれるようにようやく止まる。

「ごっ・・・ふ・・」

虚ろな瞳で魔王を見つめる。

額の傷から流れ出た鮮血が、涙のように頬を伝う。

・・・なぜ、こんなに傷つき、自分は戦っているのだろう。

戦う理由が思い出せなかった。

立派な魔法使い（マギステル・マギ）だから?

・・・・本当に?

もっと昔に・・・

そう、誰かと、何かを、、、、・・・・・・

「・・・・・?」

誰かが頬に伝う血を拭った。

「ネギサン、大丈夫?」

瓦礫から助け出した、少女だった。

「き・・・み、は・・」

その少女はネギの前に立つと、転がっていた鉄パイプを手に握り、
遥か彼方の魔王に向けて構えた。

「ダ、大丈夫!　ワタシガ、ネギサンヲ・・・」

カタカタと膝を震わせ、掠れた声で少女が呟く。

前を見据えた、その姿が、誰かに重なった・・・

『ネギ・・・・・』

頭の奥がズキンと痛んだ。

「・・・守ルカラ！」

少女が叫ぶ。

『ネギ、あんたは・・・・・』

遥か彼方から飛来する、魔力の槍。

絶対的な死を前に、少女は鉄パイプを構えて・・・・・

「ヤアアアア！」

・・・走り出した。

『・・・あんたが大切に思うモノのために、闘って』

頭の奥で光が走った。

★
★
★

『大切な・・・って、僕はいつもそのつもりですよ』

『ううん、違うわ。　あんたは周りを気にしすぎ！　仲間のこととか、世界のこととか、そんなことばっかり考えてるでしょ』

『え・・・あ・・』

『ふふ、バレバレよ。　・・・・こんな戦争、私が終わらせてみせるからさ。　約束して、あんたは自分が大切に思うモノのために闘うって』

『・・・・わかりました。　でも、アスナさん。　この戦争を止めるのは、僕達、ですよ。　アスナさん一人が戦う訳じゃないんですからね』

『・・・・そうね。　それじゃあ、約束だからね？　・・・・・・
バイバイ』

これが、アスナさんとの最期の会話だった。

彼女は・・・最期まで笑っていた・・・・・・

★
★
★

ネギは瞬時に少女の前へ移動した。

「ア・・・」

目を見開く少女。

「ありがとう」

そんな少女に、穏やかな表情でネギはそう、一言だけ呟き、彼方の魔王に向けて左手を突き出す。

―　左腕解放・雷の暴風！
シニストラー・エーミッタム・ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス

旋風を纏った雷の砲撃が、槍を蹴散らし、魔王の腹部へ直撃した。

轟き渡る爆音。

次の瞬間、ネギは魔王の頭上へ移動していた。

「おおおおおっ」

―　解放
エーミッタム

「！！」

わずかに遅れて、気づいた魔王が目にしたものは、全長二十メートルに達する巨大な雷の槍だった。

―　雷神槍・巨神ころし

ディオス・ロンケーイ・ティタノクトノン

「ガアアアアアアアアアアアア！！！」

音の壁を突破し、魔王の顔面目掛けて直進する『巨神ころし』と、
魔王が咄嗟に口から放った砲撃（ブレス）が真っ向からぶつかり合い・・・・・・

「おおおおおおっ！」

・・・槍が突き抜けた。

そのまま、口から串刺しにするように突き刺さる。

「・・・外部からの攻撃には耐えられても、内部からならどうだ？」

「！」

―　解放・雷神槍！！！

エーミッテンス・ディオス・ロンケーイ

「おぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！」

――千雷招来

キーリプレーン・アストラペーン・プロドゥカム

瞬間、魔王の肉体を内部から滅ぼさんが如く、幾百幾千の雷撃が解放された。

目を開けていられない程の閃光と、落雷の何十倍何百倍もの轟音が、周囲に響き渡る。

しかし・・・・・

「・・・クク・・ク・・・・・・クカカカカ・・」

「・・・？」

幾千幾万の打撃雷撃斬撃をその身に受け、内部から雷に焼かれても尚、魔の王は滅びなかった。

身体中から煙をあげ、消滅寸前ではあるものの、未だに現界を続け

ている。

ネギがとどめの一撃を放とうとした。

その時、魔王の口から轟くような言葉が発せられた。

「魔二堕チタ身デ我ヲ倒スカ？　凄マジイナ・・・・・」

そのことに驚きかけたネギだったが、それとは別に何かを感じていた。

マズイ。

脳裏を走る、そんな言葉。

ネギの様子に気づいたのか、魔王は嘲りの声を大気にこだまさせる。

「クク・・・気ヅイタカ？　我ハ魔ノ王。　タダデハ消エヌ」

ピシリ、と魔王の体に亀裂が走り、そこから光がもれだした。

まるで今にも破裂寸前の風船か、爆発寸前の爆弾のようだ。

いや、事実、爆弾だ。

残存する魔力、そして現界に必要な魔力すら暴走させた魔王は、そ

の身を巨大な爆弾へと変えつつあった。

その威力、この周辺十数キロを吹き飛ばして尚、余りある。

そのことに思い至ったネギは、大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。

逃げることは出来る。

しかし、その場合、ネギに約束を思い出させてくれた少女や、この街から避難した生存者は勿論のこと、範囲内の大勢の人々が、消え去ることになる。

「・・・・・ふう」

意外にも、ネギの結論はすぐに出た。

逃げるなど論外。

ならば・・・・・

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル　・・・百重千重と重なりて、走れよ稲妻（ヘカトンタキス・カイ・キーリキス・アストラプサトー）」

「ヌ？」

「・・・・・正面から、受けて立つ」

地面に降り立ったネギの周囲が、膨大な魔力の圧力だけでひび割れ、砕けていく。

一瞬にも永遠にも感じられるにらみ合いの末・・・・・

「ヤッテミロ、小僧ッ！！！」

「おぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおああああああああああああああああああああああああああああああーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！」

魔王の魔力を暴走させた自爆と、ネギの超広範囲雷撃殲滅魔法がぶつかり合う。

破壊の魔力が半円状に広がっていき、その周囲を幾百幾千の稲妻が押し止めようとせめぎあう。

怒濤の圧力に、意識を根こそぎ吹き飛ばされそうになるのを、ネギは喉が張り裂けんばかりの気合いの声で耐えた。

「ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああッッッッッッッッッッッッッッ
ッッッッッッッッッッッ！！！！！」

魔力が削られていく。

生来からの膨大な魔力量に加え、闇の魔法（マギア・エレベア）の侵食により、人外の域まで達した、ネギの魔力があっという間に底をつき始める。

「あああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああっっっっっっっっっっっっっっ
つつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ
つつつつツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ！！
！！！！！！！！！！！！！」

一秒が、一時間にも一日にも一年にも・・・一生にも・・・・・気が遠くなるほど永く感じた。

★★★

ネギは、いつの間にか何もない真っ暗な空間に立っていた。

・・・・もう、無理なのかな。

そう諦めかけたとき、心の何処かが、まだだ、と叫んだ。

ここで諦めたら、十一年前と何も変わらない。

だが、ネギがどれだけ気を振り絞ろうとも、体が鉛になってしまったように重く、動いてくれない。

魔王の自爆はあまりにも強大だった。

霞んでいく視界。

倒れようとする体。

それでもネギは諦めない。

僕はアスナさんに誓ったんだ。

大切に思うモノのために、全力で闘うって。

まだやれる。

僕の限界はこんなところじゃない。

いや、喩え限界だったとしても、それがどうした。

限界なんて、そんなのハードルのひとつでしかない！

その先へ！

体がどうなろうが知らない。

僕は・・・・・諦めない！

そのとき・・・・・・

「！！！」

突然、真っ暗な空間にぼんやりと光る腕が現れた。

優しい光を放つその腕は、膝をつくネギへ手を差し伸べる。

・・・ア・・スナ・・・さん？

倒れかけていたネギはその手を取って立ち上がった。

『大丈夫！』

たった一言。

そんな声が聞こえた気がした。

★★★

ネギが目を開けると、自分の稲妻が破壊の魔力をわずかに押し返していた。

視界はすでに白一色に染まり、天を突き破るような轟音がネギの鼓膜を叩きつづける。

・・・・あと少し！

身体中から鮮血が吹き出すのも構わず、渾身の力を込めて、ネギは叫んだ。

「あああっっっっっっっっ！！！！！！」

半円状に広がっていた破壊の魔力が、空へと方向を転換する。
光の奔流が柱となって雲海を吹き飛ばし、天空へと突き抜けていく。
・・・・約束、守りましたよ。
そう思いながらネギは光の奔流に呑まれ、意識を失った。
最期の瞬間、ネギは笑っていた。

★
★
★

・・・・以降、地球側にも魔法国側にも属さず、大戦の終結だけを目的に暗躍した組織、『白き翼』のリーダー、英雄、ネギ・スプリングフィールドの足跡は途絶える。
公式記録では２０２１年に死亡。
彼は本当に消えてしまったのか、それとも何処かで・・・・

『英雄の軌跡～ネギ・スプリングフィールド～』

著・綾瀬夕映／２０３５年／１０７頁

第二章　合縁奇縁

夜空に浮かぶ巨大な月が、深い森を空から照らす。

普段ならありがたいことなのだが、この時のフィーにとっては、全くもってありがたくなかった。

「はっ・・はっ・・はっ・・・・・・」

出来るだけ音を立てないように、木々の隙間を走り抜ける。

・・・・・はやく逃げないと。

そんな言葉だけが、フィーの頭をぐるぐる回る。

目的へ向けて、まさか一歩目から躓くとは思わなかった。

汗ではりつく簡素な白いシャツの上で、紐で首に掛けられた指輪が揺れる。

街まではまだ遠い。

「はっ・・はっ・・はっ・・も・・走れ・ない」

十歳にも満たない、七、八歳程の少女の体では、もう限界だった。

フィーは足を止め、暴れる心臓をなんとか静めようと、荒々しく息をする。

腰まで伸びた金色の髪はボサボサに乱れ、白いシャツにはところどころ泥で汚れている。

「なん・・・で・・こんなところに・・・」

フィーがそう呟いたところで、ふいに背後から緑色の魔力弾が襲いかかってきた。

避ける間もなく、背中に直撃し・・・・・

「きゃっ！？」

吹き飛ばされ、ゴロゴロと地を転がった。

非殺傷設定だったようで、体に傷こそないが、抉られたような痛みが走る。

歯を食い縛って、フィーは泣くのを堪えた。

立ち並ぶ木々の奥から、二人の男が歩み出てくる。

「おいおい、あんまり商品に傷をつけるなよ。　せっかくの上玉なんだからよ」

「わりぃわりぃ。　必死に逃げる背中が、あ～んまり可愛いもんだからよ。　ちょっと意地悪したくなっちまった」

そんな会話がフィーの耳に入ってきた。

自分のことを商品呼ばわりしている時点で、完璧にまともな仕事をしている人間じゃない。

なんとか逃げようとするのだが、今まで逃げてきた疲労と、魔力弾の一撃で体が言うことをきいてくれない。

「う・・くっ・・・」

・・・・どうしよう!?

誰か助けて・・・って、こんな森の中じゃ誰もいないよね。

絶望しそうになる心を奮い立たせて、フィーは男達を睨み付けた。

「・・・・ん?　なんだよその目は?」

「よしとけって」

「うるせえ！　今のうちから調教しとくんだよ！」

男が一人近づいてくると、フィーの腹部に蹴りを入れた。

「ぐっ・・・・・」

胃が口から飛び出しそうな衝撃と激痛に耐える。

「あ～ん？　まだそんな目をするんか？　おらっ」

体が宙を舞う。

地面に叩き付けられながら、フィーが転がりついたのは、険しい崖だった。

あのまま走り続けても、どちらにせよ捕まったのか、と涙でボヤける視界で思った。

「どうだ？　少しは素直になる気になったか～？」

そんなことを言う男をフィーは再び睨み付ける。
こんなろくでなしに負けたくなかった。
それに、自分はまだ目的を果たしていない。
いや、その一歩目すら踏み出していないのだ。
しかし、そんなフィーの眼差しが気に入らないのか、男は壊れた笑みを浮かべ、どこからともなく杖を取り出し、フィーへ向けてきた。
「へへ・・・へへへハハハ　いーい度胸だ～　お前みたいな小娘が、どんな風に許しをこうのか、楽しみだ～」
杖の先に光が集まり・・・・・男はもうひとりの仲間に肩を掴まれ止められた。
「おい、いい加減にしろ。　崖から落ちたら、商品どころじゃなくなるぞ！」
「うるせえってんだ！　俺の邪魔をすんじゃねえ！」
手を払いのけ、男はフィー目掛けて魔力弾を放ってきた。

しかし、弾はわずかに外れ、数センチ横の地面に直撃した。

ドンッ、と小さな破裂音が響き・・・・・直後、フィーの転がる地面が、小刻みに揺れて・・・・・・

「ああ～！？」

「だから言っただろうが！」

崩れた。

宙へと投げ出されるフィー。

・・・・・死ぬ。

間違いなく死ぬ。

五十メートル以上の高さから真っ逆さまに落ちる。

やだ。

・・・嫌だ！

わたしはまだ、目的も何も果たしてない！

こんなところで死ぬなんて、絶対に嫌だ！

そんな言葉が、頭の中で浮かんでは消え浮かんでは消え・・・・・
けれどもフィーは無情にも落ちていく。

もうダメだ。

目を瞑りかけたその時・・・・・

「・・・え？」

胸元から、まばゆい光を感じた。

フィーが目を向けると、首に掛けた紐に繋がれた指輪が、白く輝いている。

そして・・・・甲高い破裂音と共に、視界が白一色に染められた。

★
★
★

水の底から浮き上がるような、息苦しさを伴う解放感と共に、急速

に意識が覚醒する。

ネギの視界に飛び込んできたのは、自分に迫る地面だった。

・・・・落下してる!?

そのことに気付いたネギは、咄嗟に浮遊術を駆使して浮かび上がる。

赤毛の長髪がふわりと舞った。

・・赤毛の・・・長髪?

おかしい。

自分の髪はこんなに長くないはずだ。

それよりも、自分はどうなったのだろう。

確実に死ぬと思っていたのだが・・・・・ここは死後の世界ではなさそうだ。

とにかく体を確かめてみるのだが・・・

「・・・えええぇえ!?」

おかしいどころか、完全に別人の体だった。

元の肉体と同じなのは、髪の色くらいだ。

それに・・・体の調子もなんだか変だ。

自分の魔力量はこんなに少なかっただろうか？

プールとバケツの水量の差ぐらい違うのだが・・・

そんなことをネギが考えていると、頭上から緑色の魔力弾が襲いかかってきた。

「っと」

狙いがあまいため、少しのけ反るだけで回避する。

軌道を辿り、ネギは崖の上に二人の人影を見つけた。

状況もなにも分からないため、近付いてみるのだが・・・・・すぐさま後悔した。

「あ～？　魔力なんかさっきまで感じなかったんだか～・・・・・・なんだ、お前？」

「ただのガキかと思ってたが・・・こりゃ高値で売れるな」

世界をまわっているうちに、たまに見かけた奴隷商や人買い、人拐

いと同じにおいを二人から感じたのだ。
そう、女と薬、そして血のにおいだ。

「・・・・・ゲスが」

そう呟く。

「おら、さっさとこっちにっっっ!?」

「なっ！　てめっがああっ!!!?」

ネギは、気づくと男二人を殴り飛ばしていた。
溜まっていた恨みをはらすような拳撃に、男達は呆気なく意識を絶たれる。

「・・・・・?」

自分の拳を眺め、ネギは考えた。
確かに不快な気分にさせる二人だったが、それだけで殴り飛ばすほど、自分は短気だっただろうか?

「・・・ん？　なん・・・だか・ね・むく・・・」

突如襲いかかってきた強烈な眠け。

一瞬でも気を抜けば、すぐに寝入ってしまう程のそれに耐え、周囲を探る。

しかし、殴り飛ばした二人以外に気配は感じられない。

どうやらこの眠気は自分の肉体が関係しているようだ。

ネギは巨木の枝に飛び乗って腰掛け、木の幹に寄り掛かって目を閉じたのだった。

★★★

白い。

辺り一面が暖かな白い光を放つ、真っ白な空間に、ポツリと一つだ

け丸いテーブルがあった。
その両端には椅子があり、二人の人影が向かい合うように座っている。
二人のうちの一人、赤毛の青年ネギが、金髪の少女フィーに言った。
「紅茶、飲まないのかい？」
テーブルの上には、湯気を立てる二つのティーカップ。
「え～と・・・、あなたは誰？　ついでにここは何処？　あ、わたしの名前はフィーだよ」
優雅に紅茶を飲む青年に、フィーはカップを手に取りながら尋ねた。
気がつけば此処に居たのである。
・・・まさか、天国！？
と、内心ではドキドキのフィー。
状況がまったく理解出来ていなかった。
「僕はネギ・スプリングフィールド。　ネギでいいよ。　ここが何

処だかは・・・・・」

「何処だかは？」

「わからない」

思わず椅子からずり落ちた。

「ちょっと、わからないってどう言うことっ！？　いきなりティーセットとか取り出したりして、そんなにくつろいでるのにっ」

ガーっ、と吠えるようにフィーは捲し立てた。

「まあまあ落ち着いて。　わからないけど、推測することは出来るよ」

「すいそく？」

小首をかしげるフィーに、ネギは頷き、カップを置いた。

「おそらく、ここは君と僕の精神世界が融合した場所だと思う。

他者と他者の精神が繋がることによる、精神崩壊をどうやって回避しているのかは、正確なところはわからないけど、おそらく、パーソナリティを別個体とすることで、擬似的な二重人格のような、Ｋ★ＫЦУЁＯ‥ＨＥＥД⌠⌠？？√？？？？？┼┼юэыукккноcЮУуЭaвОυτДГσＹＹＭＭＭＭＭ¶ゐ∇∇⊥⊥∝ヶþ†≫⊇⊇⊃※※●◎＆＆＆@@@★¢¢¥≦℃§・・・・・」

ネギの口から流れ出るお経は、フィーには難しすぎて良くわからなかった。

要約すると、わたし、二重人格になっちゃったのかな・・・？？？

「・・・・で、さっきの感覚だと、君の肉体がベースとなってるから、僕よりフィーの方が負担が少ないみたい。　だから、普段は君の人格が表に出ることになると思うよ。　・・・・わかった？」

「ん～・・・まあ・・きっと、おそらく、たぶん」

頭から煙を出すフィーを心配そうに見るネギ。

紅茶で一息いれ、ネギが感心したように口を開いた。

「・・・それにしても、君は凄いね。　自分の中に他人が居るなんて、普通は気持ち悪いと思うんだけど？」

そんな言葉にフィーは目をぱちくりさせた。

心細かったのだ。

あの場所、から初めて外の世界にたった一人で出て・・・・・

「・・・ネギが来てくれなかったら、百パーセント死んでたと思うしね。　そっちは？　気がついたら人の中に居たってわりには、全然動揺してなさそうなんだけど」

「僕かい？　これでも内心はかなり驚いてるんだよ。　でも・・・まあ、君と似たようなものだよ。　正直、死ぬものだと思ってたから」

「ふ～ん。　似た者同士って訳ね。　・・・これからよろしくね、相棒！」

「あ、あいぼう？」

「なによ、ダメ？　これからは同じ体を使う者同士、一蓮托生なんだから仲良くしたほうがいいじゃん」

フィーの言葉にネギは腕を組んで何やら考え始め、頷いた。

「相棒・・・・か。　うん、そうだね。　これからよろしく。
それじゃあ・・・・・・」

ネギが瞳を閉じて、集中すると・・・・・・

「え！？」

十代後半から二十代前半の青年だった姿が、いつの間にか十歳前後の少年の姿に変わっていた。

「こっちの方がいいかな」

「ええええっ？　ネギ・・・だよね？　どうなってるの？」

「これ？　ああ、ここは精神世界なんだから、自分の姿形くらい、多少は変えられるよ。　大人の男が居るより、気を使わなくて済むでしょ」

こうして、精神世界での対話は弾んでいったのだった。

第三章　猪突猛進

「やっと着いた～！」

街を一望できる丘のうえで、赤毛の少女、フィーが叫んだ。

フィーとネギの精神世界での対話から半日。

目が覚めたフィーは、自分の金髪が赤毛に変わっていることに驚きながらも、ようやく森を抜けたのだ。

すると、頭の中にネギの声が響いた。

『そうだね。　っと、まずは服装をなんとかしないとダメだよ』

その言葉に、自分の姿を眺める。

ボロボロの白いシャツに白いパンツ・・・・履き物はサンダルで、その全てが砂や泥に汚れて、みすぼらしいことになっていた。

「う～、よく考えたら、この格好ってかなり恥ずかしいかも・・・・　よっし、あの変態二人組が、くれた、お金でぱぱっと買い物しちゃおっと」

頭のてっぺんから触覚のように飛び出す一房のアホ毛を揺らし、フィーは街に向けて走り出した。

★★★

桃色のジャージの上下。

黒いインナー。

下駄。

髪をまとめるためのゴム紐。

・・・・以上が、ちょうど街で開かれていたフリーマーケットにて、格安でフィーが手に入れた物だった。

『いや・・・、まあフィーがそれでいいなら、別に構わないんだけどね？』

頬をヒクつかせるネギが頭に浮かび、フィーは首を傾げる。

動きやすいのが一番だし、靴はなんか蒸れるから嫌、髪も邪魔にならない程度に後ろで縛っとけば良いじゃん。

フィーは自分の考えにあらためて頷いた。

その格好に女の子らしさの欠片もないことに・・・・・彼女は気づいていなかった・・・というか、気にしてすらいなかった。

「さーてと。　お腹も空いたし、お昼にしよっかな～」

ぐ～、と可愛らしい音が、フィーのお腹から響く。

空腹を自覚すると腹の虫が活発に暴れだし、強烈な空腹感が襲ってきた。

食べ物の匂いに誘われて、フィーは小さな酒場へと駆け込んだ。

★
★
★

扉を開くと、鈴の音が響いた。

ランタンが照らす薄暗い店内では、数人のゴロツキが酒をあおっている。

そんな者達を無視して、フィーはスキンヘッドのオーナーが目の前でグラスを拭くカウンター席に腰掛けた。

「いらっしゃい。　お嬢ちゃん、見かけない顔だな？　・・・注文は？」

怪訝な顔でフィーをジロッと見たオーナーは、首を振るってそう尋ねた。

それにフィーは・・・

「ミルク、大ジョッキで。　あ、あと適当にお腹がふくれるもの頂戴！　グリンピースとピーマン抜きで」

・・・・即答した。

そんな声が聞こえたのか、テーブル席で飲んでいたゴロツキ数人が、ゲラゲラと笑いだす。

オーナーはゴロツキ達に反応せず、直ぐ様ミルクと適当な料理を作り始めた。

作っているのはチャーハンのようだ。

フライパンの上を舞うお米を眺めながら、フィーは心の中でネギに問い掛けた。

『・・・なんか、わたしって後ろの奴等に睨まれてない？』

『睨まれてると言うか、なめられてるね。　まあ、しょうがないよ。普通、酒場にフィーぐらいの女の子は来ないからね。　・・・と言うか、なんで酒場に入ったの？』

『うー、だって一番近かったし・・・・・　からんで来たらお願いね、ネギ』

『わかった。　・・・からまれないのが一番なんだけど・・・・・』

ネギの魂に引かれたのか、元々、魔法資質の無かったフィーの肉体には、リンカーコアが生まれ、活性化していた。

現在のところ、魔力量のランクにしてＡ。

しかし、経験の浅いフィーには、まだまだ使いこなせないのだ。

と、背後からフィーの肩をトントン、と誰かが叩いた。

「よう、嬢ちゃん」

そんな言葉に振り返ると、一文字の傷跡がチャームポイントな、厳つい
ゴロツキの顔のドアップが視界をうめつくした。

「うわわわっ？」

「俺様の部下二人を可愛がってくれたみてぇじゃねえか。　礼をしに来てやったぜ」

達磨と見間違いそうな、筋肉に包まれた裸の上半身。

そこにはよく分からない模様の入れ墨がびっしりと入れられ、下はジーパン。

立派な変態さんだった。

『ここは任せて』

そんな声と同時に、フィーは軽い浮遊感を感じた。

次の瞬間には、肉体の主導権をネギが握っていた。

★★★

「ミルク、大ジョッキで。　あ、あと適当にお腹がふくれるもの頂戴！　グリンピースとピーマン抜きで」

酒場には似合わぬ幼い声。

自分が引退し、店を開いてからこんな事はあっただろうか？

珍しいことがあるもだ、とオーナーはチャーハンを炒めながら思った。

「よう、嬢ちゃん」

ゴロツキの低い声。

・・・ああ、やはり絡まれたか。

自分の店で暴力とは、いい度胸だ。

引退したとはいえ、まだまだ其処らのゴロツキ魔導師に遅れをとるほど落ちぶれちゃいない。

黙らせようと、フライパンを火からどかしてわきに置き、振り返る。

瞬間・・・

「・・・・・・っ！」

・・・・女の子の気配が変わった。

外見的には頭頂部に突き出た、一房の髪が無くなっただけ。

一般人にわかるかどうか・・・・・だが、自分にはわかる。

オーナーは確信をもって、思った。

・・・・・この小さなお客は・・・強い。

「おらっ」

ゴロツキが拳を繰り出す。

魔力で強化されたそれは、カウンター席の一角を粉々に砕いた。

ったく、修理代どうしてくれるんだ？

・・・まあ、いい。

オーナーは目の前で繰り広げられる光景に、思わず身震いした。

丸太のような腕から繰り出されたパンチを、見事としか言えない体捌きで回避し、そのすれ違い様に三、いや四発の拳をゴロツキの鳩尾や脇腹、顎に入れたのだ。

「オーナーさん」

少女がオーナーにあいさつするような気安さで話し掛ける。

続いて崩れ落ちる、ゴロツキの体。

口調が違うのは、戦闘時の癖だろうか？

「修理代はそっちの財布から取ってくださいね」

そう言って、少女はテーブル席から向かってくる、ゴロツキの仲間連中に向かい、歩き出した。

この少女なら、もう使うことはないと仕舞い込んだアレを託してみ

るのも、悪くはない。
そう思った。

★
★
★

「ぷは～　うん、思った通り、ミルクは美味しいな～」

死屍累々とゴロツキがうめく光景を背に、フィーは大ジョッキに並々と注がれたミルクを飲み干していた。

「おお、いい飲みっぷりだ。　・・・しかしお嬢ちゃん、小さいのに強いね。　その腕なら、地下闘技場で荒稼ぎ出来るかも知れないな」

そんなオーナーの言葉にピクッと反応し、動きを止める。

・・・・・お金がない。

自分の目的・・・お母さんを止める、という目的にはお金がたくさん必要だろう。

時空管理局に頼らず、さらに管理局より早くってことなら尚更だ。

・・・・ついでに生活費も・・・・・

荒稼ぎ＝お金いっぱい

そんな方程式が、フィーの頭の中で組み立てられた。

「く・・・くく」

『・・・フィー？』

悪役っぽい笑い声を溢し始めたフィーに、ネギが声をかける。

しかし、そんなことは気にもとめず、フィーはオーナーに詰め寄った。

「その話、詳しく聞かせて！」

これが、後に裏拳闘界にその名を轟かせることになる、『赤毛の小悪魔』の誕生した瞬間だった。

「地下闘技場のことか？　いいぞ。　この街の中心に、大きなビルがあるだろ？　その地下が地下闘技場だ。　なんでもありの魔法戦闘が売りで、殺傷設定もありだ。　勝てば、多額のファイトマネー、負ければ、下手を打てば死。　ハイリスク、ハイリターンでなかなかスリルあふれる場所だよ」

「・・・・わたしでも、試合に出られる？」

「年齢制限は無かった筈だから、多分出られると思うぞ。　・・・ああ、一つだけ参加条件があったな」

「なになに？　もしかして、女は出られません、とか言わないよねっ」

「違う違う、デバイスを所持してないといけないんだよ。　お嬢ちゃん、デバイスは持ってるかい？」

そんなオーナーの言葉に、フィーは首を横に振った。

持ってる・・・というか、触ったことすら無かった。

『フィー、デバイスってなんなの？』

『あれよ。　魔法使いで言う杖でしょ、・・・・・たぶん。　お母さんが持ってたな～、たしか凄く高い筈・・・・・・』

「そんな高価なモノ、持ってないよ」

オーナーは顎をさすりながら目を閉じ、何かを考え込んだ。

しばらくすると、小さく頷き口を開く。

「それなら、いい話があるんだが・・・・・」

★
★
★

元管理局武装魔導師。

それが、俺のここでの肩書きだった。

自分で言うのもなんだが、俺はかなりの実力者であり、ベテランだ。

所属当時の魔導師ランクはＡ。

魔力だけならＡＡクラスの力があった。

な、かなりのもんだろ？

その日も小遣い稼ぎに地下闘技場に出向いてたわけだ。

まあ、滅多なことじゃカードを組んで貰えねぇが、たまにバカな奴がいやがる。

ビビっちまって、カードを組まねえ奴等は論外だが、たまに組む奴等も、雑魚過ぎて相手にならねぇ。

で、その日は運よく試合が組まれたんで、リングに上がると、出てきたのは七、八歳ぐらいの赤毛のガキだ。

はっ？って一瞬思ったな。

ピンクのジャージの上下に下駄、ゴム紐で髪を適当に後ろで縛ってやがった。

素材は良さそうなのに、・・・・って、そんなことはどうでもいい。

主催者にクレームつけてやろうと思ったんだが・・・・捲り上げられた両腕のジャージから覗く、鈍色の手甲に俺は気づいた。

素人じゃ、それで終わりなんだろうが、俺には見覚えがあった。

ありゃ確か、五年ぐらい前に『武神』って通り名で、裏拳闘界に君臨してた奴が愛用してたデバイスにクリソツだってな。

『武神』とは戦ったことはねぇが、その戦いを一度だけ生で見たことがある。

とんでもなく強かったな。

こりゃ、見かけ以上にこのガキは強いかも知れねえな。

そんでもって、試合開始だ。

とりあえず、誘導弾で様子見して、実力を見せてもらおうか・・・・・と、思っていたら・・・・・

「はっ！」

目の前に、ガキが踏み込んで来てやがった。

どんだけ早いんだっての！？

バリアジャケット（以後、ＢＪ）越しなのに、とんでもねえ衝撃が襲ってきて、体がくの字になったな。

気がつきゃ場外の壁に俺は埋まってやがった。

はは・・・・悪い夢でも見てたのか・・・・・？

★★★

『いや～、それにしてもオーナーさん、自分のデバイスのお古を格安で譲ってくれるなんてねっ　ほんと、ラッキーだったよね！』

五十メートル四方のリングの上で、ネギは次の対戦者が名乗り出るのを待ち構えていた。

ジャージの袖で、額に軽く滲む汗を拭う。

・・・・この程度で汗をかくなんて、まだまだ体になれてないな。

魔力も元の肉体と比べ物にならないくらい少ないし・・・・・

そんなことを思いながら、ノリノリのフィーに返す。

『そうだね。　渡る世間は悪魔ばっかりだけど、極稀に優しい人もいるんだよね』

フィーの目的・・・・何処に居るのかわからない母親を『時空管理局』という、次元世界の治安維持組織に捕まる前に、その暴挙を止める・・・・には、かなりの大金が必要になるだろう。

明日の生活費もどうにかしないといけないし・・・

それにネギは、一刻も早く体になれなければいけなかった。

自らの知らない世界、環境。

その中にあって、己の力を十全に発揮できないことはある意味、自殺行為に等しいと、経験が言っていた。

「さあ、本日十二連勝のフィー・T・スプリングフィールド選手！挑戦者はもういないのか～！？」

テンポのいい司会の言葉に、また一人挑戦者がリングへ上がった。

「ガキだからって、手を抜きすぎなんだよ！　俺が手本ってやつをみせてやる！」

十秒後、ネギの連勝記録が十三になった。

★
★
★

夜。

安宿に借りた一室で、フィーはベットに横になり、ぼーっと天井を眺めていた。

思い出すのは、地下闘技場で鬼神のごとき戦いを演じたネギの動き。

・・・・凄かったな～

自分の体が疾風のような速さで動き、対戦相手の悉くを打ち倒したのだ。

これなら、本当にお母さんを止められるかも知れない。

けど・・・・・・

「ふう・・・・・・」

フィーは天井の先、遥か彼方に浮かぶ星の輝きを掴み取るように、手を伸ばした。

・・・・わたしの聞き間違いならいい。

だけど、最後に見た後ろ姿のお母さんは、次元断層を引き起こすようなことを言っていた。

いかに子供のフィーでも、一度次元断層が起これば数えきれない人々や、その世界に住む生き物を巻き込んで、滅びが広がることぐらい知っていた。

なぜ・・・・・？

フィーは瞳を閉じ、自分が逃げてきた研究施設を思い出した。

暗くてよく見えなかったが、並べられたガラスの筒。

そして、その中に死んだように・・・実際、死んでいた・・・浮かぶ、わたし・・・・・いや、アリシアクローン。

いったい、あの優しかったお母さんに何があったと言うのだろう・・・

・・・・わたしが考えないようにしてただけ。

きっと、アリシアが死んでしまったんだ。

だから、お母さんは、周りの被害なんか気にもしないで突き進むつもりなのだろう。

そんなことをしても、アリシアは喜ばないってことは、わかりきってる筈なのに・・・

だから、アリシアの代わりにわたしが止めよう。
お母さんに大罪人なんかになって欲しくないから。

「・・・・・」

『どうかしたの、フィー？』

ネギの声が頭に響く。
それと同時に、フィーは天井に伸ばしていた手をギュッと握り込んだ。

・・・考え込んでも、わたしの頭じゃいい答えなんか出るわけない。
よし、とフィーは頷く。
お母さんはきっと死に物狂いでアリシアを生き返らせようとしているだろう。
それなのに、わたしは一蓮托生の相棒とはいえ、ネギに任せっぱなしでいいの？

・・・・・否。

断じて、否！！！

「ネギっ！」

『な、なに？』

ならば簡単。

フィーは思った。

・・・・身近に強い人が居るのだから教えてもらおう、と。

「わたしに戦い方を教えてっ」

第四章　釜中之魚

あっと思った時には、視界の上下が逆転していた。

渾身の力で放った拳は呆気なく捌かれ、どうやったのか投げ飛ばされたのだ。

軽い浮遊感の後、スパンと体が地面に叩きつけられ、その衝撃に息がつまった。

「うん、今のはなかなか良かったよ」

赤毛の少年、ネギが頬をかきながら言った。

もうこの展開は何度目だろう？

百を越えた辺りから、数えていない。

フィーは背中を擦り、立ち上がりながら思った。

わたしもかなり強くなったと思うのだが、強くなれば成る程、目の前に立つ相棒と自分の差が、天と地ほどはなれていることがわかってしまう。

だが・・・・・

「うがーっ！！！　一発はいれてやるっ」

やられてばかりじゃ性に合わない。

再び疾走したフィーは、カミソリのように鋭い拳をネギに向けて突き出した。

★
★
★

『朝だよー』

「ほえ？」

頭に響くそんな声で、フィーは目を覚ました。

無意識に閉じようとする瞼をこすり、フラフラとベットから起き上がる。

カーテンに手をかけ、バサッと開いた。

「うーーーーんっと。　おはよう、ネギ」

まばゆい太陽の光を浴びて、背筋を伸ばす。

昼には地下闘技場に入り浸り、夜から朝にかけては精神世界にて通常の何十倍も濃いネギとの戦闘訓練。

この街に辿り着いて、あっという間に二週間が過ぎていた。

もう十分な資金も貯まったことだし、そろそろお母さんを本格的に捜し始めよう。

そんなことを眠気の残る頭で、フィーは考えていた。

『おはよう、フィー。　頭がすごいことになってるから、早く治してきた方がいいよ』

「ん～・・・・・って、うひゃーっ」

赤毛の腰まで届く長髪がツンツンと跳びはね、ボサボサに爆発していた。

言われなければ、一年中ジャージの上下で過ごしてしまうほど外見に頓着しないフィーが、思わず声を上げるほどなのだから、そうとうだ。

あわてて洗面所に駆け込み、髪を櫛でとかす。

今日も慌ただしく一日が始まった。

★★★

プロプラに似た大型の回転翼が、勢いよく回転し、重力の戒めを解き放つ。

時空管理局地上本部の新型武装ヘリだ。

その中で揺られる局員達のなかに、一人の大柄な男がいた。

無駄無く鍛え上げられた肉体と、強大な魔力。

地上本部が誇る切り札。

現在の魔導師ランク、S。

一騎当千、英雄と称される、ゼスト隊隊長、ゼスト・グランガイツだ。

そんな彼が自分の部下である隊員達に向けて口を開いた。

「ナカジマが内部に潜り込み攪乱。　その隙を突き、俺とアルピーノが突入する。　各員はラインを敷き、拘束にあたれ」

「「「「了解！」」」」

★
★
★

『さあ、本日もリングを彩るピンクのジャージ、フィー選手！　対するはベテラン拳闘士、大剣使いのレイ選手だー！』

五十メートル四方のリングに立つ赤毛の少女、フィー。

最早、トレードマークに成り始めているピンクジャージに下駄姿が

チャーミング？だ。

そして、十メートル程の距離をおいて対峙する銀髪を短く刈り、黒いタンクトップに同色のズボンという出で立ちの青年。

『それでは試合・・・開始！』

司会の合図と同時に、フィーは突っ込んだ。

・・・先手必勝！

そんなことを思いながら、小細工なしに距離を詰めていく。

十にも満たない少女の体は、魔力に強化され、人間の限界をあっさりと突破する。

ネギがもといた世界で言うところの、瞬動術（クイック・ムーブ）。

精神世界での特訓で、フィーが会得した技術の一つだ。

まだまだ荒削りながら、十メートルの距離をコンマ数秒でゼロにする。

直後、青年の手元が動いた。

「しっ！」

短い呼気と共に、刃渡り百五十センチはある大剣が横薙ぎに振るわれた。

ビュオッ！と風を切る音を体全体で感じ、フィーは思いっきり十メートルはあろう天井に向けて跳躍する。

あんなの受けたら、体が真っ二つになっちゅう！？

そんな言葉が頭を駆け巡る。

実際、この地下闘技場は殺傷設定についての規制が存在しない。

まあ、アームドテバイスの大剣に、魔力ダメージも何もないだろうが・・・

天井に逆さに着地したフィーは強く拳を握りしめ、眼下の青年へ天井を蹴って落下した。

常人なら反応することすら出来ないだろう、頭上という死角からの攻撃に、青年はベテランの勘なのか、しっかりと反応する。

「やあっ」

「はっ！」

落下するフィーに向けて、青年は大剣を掬い上げるように振り上げ

た。

・・・・ヤバッ！？

空中のフィーにとって、回避不能の一撃。

握り込んだ右手とは逆の左手を鋭く伸ばす。

剣閃が轟風と共に、フィーに向かって煌めき・・・・・手甲を滑る。

凄まじい金属音と火花が散り、重い手応えを腕に鈍く残し、赤毛が数本、宙を舞った。

そして・・・・・

「！！！」

「もらったぁぁあっ！」

フィーの拳が青年の顔面に突き刺さった。

くるくるっと回転し、地面に着地。

ほとんど同時に青年は崩れ落ちたのだった。

・・・あぶなかった～

ドキドキと暴れる心臓を落ち着け、フィーはVサイン。

『おおっと～、注目のルーキー。　ピンクジャージのフィー選手が、なんと一撃でベテラン、レイ選手を打ち倒したーっ！！！』

★
★
★

大剣使いとの戦い。

いかに精神世界で通常の何十倍も濃い時間を過ごし、自分が基礎を叩き込んだとは言っても、何も知らなかった素人の少女が上達する速度じゃない。

ハッキリ言って、異常だ。

才能はある。

むしろ天才と言ってもいいだろう。

我流で手甲を使った戦いを既に構築し始めているのだから。

だが・・・・・やはり、この成長速度は異常だ。

他にも、魔力容量が少しずつ増大してきている。

そう・・・まるで、元の自分の肉体に戻ろうとでもしているように・・・・・

十年以上、世界を巡ってきたネギにはそんな違和感がハッキリと感じられてしまう。

「・・・・・・」

元々、フィーは金髪だった。

しかし、今は赤毛。

自分の髪と同じ色だ。

昔、精神は肉体の影響を受ける、と師匠が言っていた。

ならば、肉体も精神（魂）の影響を受けて、なんら不思議ではない。

ネギの肉体は、あの魔族の王に言われた通り、闇の魔法（マギア・エレベア）の侵食により、既に魔の眷族へ堕ち、肉体の成長は十八で止まった。

確証はないが、フィーの肉体も魔の眷族へと近づいていく可能性が高いのではないだろうか・・・

「むー・・・・・」

まあ、なったらなった・・・・・かな？

いや、でも人を辞めるってことは、軽く聞こえて実際にはかなり重い問題だ・・・・・

「・・・・とにかく、闇の魔法は使わないに越したことはないよね」

一週間程前から違和感に気付いたネギは、事前にフィーへ闇の魔法（マギア・エレベア）の事や、その副作用などを説明していた。

言うべきか、言わぬべきか迷ったが、自分とフィーは一蓮托生。

考えた末、教えることを選択したのだった。

★★★

「うりゃーっ」

「ごぶっ！？」

手甲に包まれた裏拳によって、男が一人宙を舞った。

『勝負あり！　フィー選手、瞬殺！　まさしく瞬☆殺です！　本日既に七連勝。　果たして止められる者は現れるのでしょうか～っ』

リングの周囲に張られた流れ弾防止の障壁の外側で、試合を観戦する観客達がざわめき、ヒートアップしていく。

十歳に満たない少女が、並みいる拳闘士を次々となぎ倒していくのだ。

注目度としてはピカイチだろう。

大歓声を浴び、普通の女の子なら萎縮してしまうだろう舞台の上で、フィーは決めポーズをとるほどの余裕を見せていた。

むしろ、心地好さすら感じていた。

『フィー、そろそろ終わりにしたほうがいいよ。　体力的にも魔力的にも、限界が近いでしょ？』

『う～ん・・・・・』

ネギの言葉にフィーは考え込んだ。

今日でこの地下闘技場とはお別れ、明日には捜索に出発する。

殺傷設定ありの違法賭博試合。

下手を打てば死の危険すらある。

出来るだけベストの状態で挑むべきだ。

だけど、もっと歓声を浴びたい。

フィーが出した答えは、あと一試合だけ闘うことだった。

『・・・・はあ、危なかったら、隙を見て僕が表に出るからね』

『さっすが相棒。　わたしにまっかせなさ～いっ』

拳と拳、手甲を打ち合わせ、フィーは気合いを入れた。

と、その時リングに次の・・・フィーの最後の試合相手が上がってきた。

『さあ、次のカードが組まれました！　リングを駆けるピンクのジャージ！　フィー・T・スプリングフィールドーーーーッ！！！』

オオオオっ

『対するは、女に歳を聞くな！　年齢不詳、匿名希望。　美人Aさんーーーっ』

両腕に大きなリボルバー式のナックル。

両足にローラーブーツをはいた、若い女性だった。

白いジャケットに包まれた体が、自然体でたたずむ。

その無形の構えに、フィーは隙らしい隙を見つけることが出来なかった。

・・・・・強い。

ネギの声か、それとも自分の呟きか、フィーにはわからないが、そんな言葉がポツリと頭に浮かんだ。

『それでは試合・・・・・』

下駄がギシッと地面を踏みしめ、フィーの腰がわずかに落ちる。

まるで、短距離走のスタートを待つかのように・・・・・

『開始！！！』

フィーは若い女目掛けて、弾丸のように飛び出した。

よしっ！

上手く瞬動術（クイック・ムーブ）に入れた。

勢いを殺さず、渾身の右回し蹴りを側頭部目掛けて放つ。

「らっ！！！」

「・・・っつ」

だが、女はフィーのカミソリのごとき回し蹴りをスウェーのみで回避した。

空を切る蹴り。

フィーの体が空中で駒のように回転する。

・・・・かかった！

蹴りを回避されたことに、少なからず驚いたフィーだったが、それはコンボへの布石だった。

「なっ！？」

駒のような回転は、空中で体を入れかえたフィーによって、後ろ回し蹴りへと変化した。

若い女は驚きの声を上げながらも、片腕のナックルでガード。

下駄とナックルが、グガンッと鈍い音を立てる。

しかし、コンボはまだ終わらない。

手甲による裏拳が、女の脇腹目掛けて叩き込まれた。

★★★

フィーの対戦相手、美人Aことクイント・ナカジマは手に残る鈍い痺れに、思わず心の中で驚嘆の声をあげた。

・・・・自分の子供、ギンガやスバルより二回りは大きいけど、幼いといって差し支えない年齢にして、この格闘センス・・・スゴいわね。

少女の裏拳を止めた右手の平は、砕けてこそいないが、しばらくは痺れて使い物にならないだろう。

クイントとフィーの距離は二メートル程、まばたき一回のうちに詰められる間合いだ。

違法賭博を潰すために内部に潜入してみれば、なんだか凄い子に出会ってしまった。

今はまだ自分にかなわないだろう。

でも、将来的にはどうだ。

もしかすると、英雄とまで言われた隊長に匹敵する逸材なのではないだろうか・・・・・？

そこまで考えて、クイントは自分が今、目の前に立つ少女との闘いを楽しんでいることに気付いた。

・・・・いけないいけない。

任務を忘れるところだった。

さっさと連勝して、観客を出来るだけ引き付ける。

それが作戦の第一段階。

今ごろ、別動隊が流れ弾防止の障壁に細工をしている最中だろう。

・・・・・いずれにしろ、ここはあんな少女が居るべき場所ではない。

どんな理由でこんな違法な場所で闘っているのか知らないが、自分達のような大人が道を正すしかないだろう。

クイントは目の前の少女、フィーに向き直った。

「・・・あなた、なんでこんな所にいるの？」

★★★

フィーは呼吸を整えながら、相手の隙を探っていた。

・・・完璧に不意を突いた。

思わず頭に浮かぶ、そんな言葉。

フィーの裏拳での一撃は確かに女の隙を突いていた。

しかし、それでも拳は手の平に防がれてしまったのだ。

何かを考えているのか、うつむいているが、自分がどう打ち込んでも、さっきのように避けられ防がれる気がする。

次はどうする・・・・問いへの答えを探していると、女の口から更なる問いが発せられた。

「・・・あなた、なんでこんな所にいるの？」

「え？」

「七、八歳くらいでしょ？　こんな違法な闘技場で闘うなんて、おかしいでしょ？　なにか理由でもあるの？」

囁くような女の言葉は真剣な響きを有していた。

それ故、フィーも少しの間をおき本心を言った。

「・・・とある事情でお金が必要なの」

「・・・・・生活の為に、親に無理矢理・・・・・とか？」

フィーは首を振り、拳を構えた。

「わたしの、わたしによる、わたしだけの目的の為だよ。　だから・・・・・邪魔はさせない」

すでに何試合もこなしているフィーには、体力的にも魔力的にも余裕がない。

長期戦は無理だし、実力差的に不利とみて、一撃に賭けた。

地面すれすれまで体勢を倒してからのアッパー。

注意してないと、一瞬消えたように錯覚するだろう疾風の速度。

しかし・・・・・・

「そっか・・・・・ま、あなたの歳なら軽く済むでしょ」

アッパーはナックルのリボルバー部分の回転に流され、がら空きの腹部に女の膝がめり込んだ。

「ぐっっっ！？」

纏っている透明なＢＪを衝撃が突破してくる。

胃が口から飛び出るような感覚と、宙を舞う浮遊感。

次いで走った全身への衝撃で、自分が場外の壁に叩きつけられたのだと、フィーは気付いた。

「が・・・ふぅ・・」

『勝負あり！　ピンクジャージのフィー選手を沈めたのは、名も知れぬ飛び入り参加、匿名希望の美人Ａさんだーーーーっ！！！』

司会の声と観客の怒号や歓声が飛び交うなか、フィーは何とか自力で立ち上がり、リングの外にお腹をさすりながら歩き出した。

『大丈夫、フィー？』

『うん。　いやー、負けた負けた。　やっぱり上には上がいるもんね。　ネギでわかってはいたけど、手も足もでなかったよ』

確かに今回は負けた。

しかし、死んではいない。

次にやるとき、それでもダメならその次の次・・・・・フィーは学習し、成長していく。

自分はもっと強くなれる。

そう確信し、フィーはネギに言った。

『わたしはもっと強くなる。　大魔導師って呼ばれてたお母さんよりも強く。　・・・・・だから、付き合ってね』

『ふふ、相棒の頼みじゃ仕方ないね。　それじゃあ、修行の内容を一段階上げてみる？』

『うんっ』

大きく頷く。

と、同時に切なそうに小さなお腹がきゅ～と鳴った。

「あうぅぅう・・・」

『そろそろお昼の時間だね。　最後だし、今日はここで食べよっか？』

『ないすあいであっ』

地下闘技場には小さいが、美味しいと評判なレストランがある。

節約の為に利用しなかったのだが、フィーはかなり気になっていたのだ。

腹部に受けた膝蹴りなどなんのその。

フィーは軽い足取りでレストランへ歩を進めた。

★★★

「お待たせ致しました。　『デミグラスソースのオムライス～キノコを添えて～』と『フルーツオレ～アップルとパインの共演』になります。　ご注文の品はお揃いですか？」

「おお～～～！　はい、大丈夫ですっ」

「かしこまりました。　ごゆっくりどうぞ」

二人掛けのテーブルに腰掛けたフィーの前に、湯気を上げるオムライスと、鮮やかな色をしたジュースがよどみなく置かれる。

店員は頭を軽く下げ、厨房へ戻っていった。

・・・ごくりっ

思わずフィーはつばを飲み込む。

ふんわりとした卵の皮の上を濃厚なデミグラスソースがマーブル模様を描く。

・・・・・実に、食欲をそそる。

腹の虫が大合唱を始めたのをフィーは感じた。

「そ、それじゃあ・・・・・・　いっただっきまーすっ」

まずはフルーツジュースから手に取る。

波を思わせる模様が入ったグラスにストローがささり、はやく飲んでくれとせがんでいるように感じられたのだ。

一口、口に含んだ瞬間・・・・・

「っっっ！！！」

頭に稲妻が落ちた。

爽やかな風が口内に充満し、脳内に波打ち際を駆ける自分の姿をフィーは幻視する。

・・・・うまい。

色々と言いたいが、自分ではとても言い尽くせない。

それだけが、口惜しく感じた。

「さーて、それじゃあオムライスを・・・・・」

スプーンを手に取り、崩してしまうのが惜しいほど整ったオムライスにメスを入れる。

中からは湯気と共に、ケチャップライスが顔を覗かせる。

そして、それをあんぐりとフィーは頬張った。

口の中に広がる熱と香りをたっぷりと味わい、柔らかい肉に歯を立てると、溢れるように肉汁が滲み出てくる。

「ほ、ほいふぃ・・・・・」

美味しい、そう呟こうとした瞬間、フィーの動きが止まった。
まるで、フィーの周囲の空間だけ『おわるせかい（コズミケー・カタストロフェー）』、絶対零度、すなわち－２７３．１５度に近い極低温で凍結してしまったかのように、ピクリとも動かない。
・・・・・この、・・・・・・くちのなかに・・・・・ひろがる・・・・・すなみたいな・・・・・しょっかんは・・・・・ぐ・・・・・ぐ・・・・ぐり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・――――――――――――――――――――――――――――――

「ぐりぃぃんんっぴぃぃいいいすぅぅうううっっっっっっッッッッ！！！！！！」

直ぐ様、『フルーツオレ～アップルとパインの共演』を手に取り、口の中のオムライスを胃に押し流す。
冷や汗が、頬を、伝った・・・・

ギシギシと油が切れたロボットのようなギコチナイ動きで、オムライスがのせられた皿に視線を向ける。

ついさっきまでの幸せな空気はそこに存在しなかった。

そう、最高の相棒だと思っていた仲間に裏切られたような・・・・・・

そんな絶望的な気持ちが、フィーの心を埋め尽くす。

「っそうだ！　グリンピースを全部取り出せばっ・・・・・・」

頭の上に電球を光らせ、フィーが青ざめた顔色を元に戻し、スプーンを握りしめる。

しかし・・・

「さーて、・・・・・・っ！！！」

オムライスの中から、グリンピースを掻き出そうとしていた手が、ギシリと止まった。

『フィー・・・・・・　好き嫌いは、よくないよ？』

頭に響く、そんな声。

ブルータス、お前もかっ！！！

って、ブルータスって誰？

「ネギ、あなたが裏切るなんてっ」

有らん限りの精神力を振り絞り、少しずつスプーンを動かそうとするフィー。

しかし、思うように動いてくれない。

・・・・グリンピースを食べるなんて・・・ぜっっっっったぁぁいヤダ！

『くっ・・・　駄目・・・だよ・・　好き嫌いなんかしたら・・・大きくなれない・・・・・・よ！』

譲らないフィー、好き嫌いを克服させようと奮闘するネギ。

結局、グリンピースはフルーツオレで流し込むことになったのださ。

めでたし、めでたし。

じゃない！！！！！！

★★★

多少問題もあったが昼食を終えたフィーは、地下闘技場の出入り口付近のエントランスホールに居た。

・・・・もう帰ろうかな。

足を入り口の扉に向けようとしたとき、ちょうど自分が手も足も出なかった、匿名希望の美人Aさんがリングの上で司会にコメントを求められ、マイクを渡されていた。

何を言うのか聞いてからでもいいか、とフィーが足を止める。

すると、ネギが何かを訝しそうな声で呟いた。

『・・・・なんだろう、建物の外に、人の気配を幾つも感じる』

『・・・え？　どういうこと？』

『わからない・・・けど、用心した方がいいかも知れない』

リングの上の女が、自分の方を見たようにフィーは感じた。

いや、違う。

見たのは・・・・・地下闘技場の出入り口？

『皆さん・・・・・違法賭博、及び危険魔法行使の罪で、現行犯逮捕よ！　抵抗すれば、罪が重くなるからそのつもりでっ』

マイクを投げ捨てた女は、観客席に向けて、砲撃魔法を準備しはじめた。

客達はなんの冗談だとざわめくが、慌てはしない。

何故なら、リングと観客席の間には流れ弾防止の魔法障壁が張ってある筈だからだ。

「はあ！」

青白い魔力光が発せられ、砲撃が放たれた。

それは魔法障壁に阻まれ・・・・・ずに、そのまま素通りし、リングをぐるりと囲う観客席の一角に直撃して、その周囲の観客を気絶

させた。

続いてフィーの背後、つまり出入り口の扉から爆発音と同時に雪崩れ込んでくる、白を基調とした同じ型のＢＪを纏った者達。

頬がヒクつくのを感じた。

『ね、ねえ』

『・・・なに？』

『これって・・・・・ピンチじゃないかな、もしかしてっ！？』

『・・・もしかしなくてもピンチだね！？』

「時空管理局だ。　抵抗せず、大人しく武器を捨てろ」

野太い男の声が、地下闘技場に響き渡った。

第五章　深淵胎動

「時空管理局だ。　抵抗せず、大人しく武器を捨てろ」

まずい。

まずい！

まずい！！

まずい！！！

頭の中でそんな言葉がぐるぐると回り、冷や汗が全身から吹き出るのをフィーは感じた。

出入り口は包囲され、鼠の一匹たりとも逃げ出せそうにない。

このままだと、自分は確実に捕まってしまう。

『フィー、僕に任せて。　少し変わるよ』

『・・・・・オッケー。　頼むわよ、相棒』

重力の戒めから解き放たれるような、ちょっとした浮遊感を感じ、フィーは肉体の主導権をネギへと譲った。

★★★

入れ代わったネギが先ず考えたのは逃げることだった。

戦うなどもってのほか。

人格が入れ代わっても、肉体の疲労は変わらないのだ。

試合の疲れが、多少残っている。

そしてなにより、雪崩れ込んで来た者達の中に居る、槍を携えた男には、今のままではどう足掻いても勝ち目がないようにネギには思えた。

ネギをしてそう思わせる程、槍の男が放つ闘気は凄まじかった。

『どうするの？』

『・・・・フィー、逃げるが勝ちって言葉、知ってる？』

フィーの問いにそう返すのと同時に、ネギは呟くような小声で詠唱を始めた。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル　逆巻け（ウェルタートゥル）春の嵐我らに風の加護を（ノービス・プロテクティオーネム・アエリアーレム）」

―　風花旋風風障壁！！

フランス・バリエース・ウェンティ・ウェルテンティス

ネギの周囲に風が吹き荒れた。

建物の地下であるにも関わらず、突如発生した竜巻は武装局員達から一瞬にせよネギの体を隠したのだ。

そして、ネギの師匠、エヴァンジェリンが得意としていた、影を媒介としたゲートを開く。

行き先は自分達が下宿している安宿の自室。

体が影に沈んでいく。

転移完了まで残り数秒といったところで、旋風が真っ二つに切り裂かれ、槍を構えた男がネギの眼前に飛び込んできた。

「させん！」

野太い声と同時に突き出され、閃光となる槍。

非殺傷設定故、刃が潰された一閃は、致命にならずとも転移をキャンセルし、骨の一、二本は容易に砕く。

「っ！！！」

右肩目掛けて迫るそれを腕を回転させ、紙一重でネギは逸らした。

回避しきれず、赤毛が数本舞う。

中国武術において、敵の攻撃を吸化、或いはベクトルをコントロールする化勁という身法だったが、槍の男がそんなことに一瞬で気づける筈がない。

一瞬にも満たない極僅かな隙。

その隙を見逃さず、ネギは転移魔法を完成させて影の中に沈んでいった。

★★★

素早く周囲に目をやり、作戦の進行具合を確認する。
抵抗した違法魔導師は反撃の隙を与えず、バインドで捕え終えていた。

ナカジマとアルピーノ、そして部下達がよく動いてくれた。
もはや、自分がやることは一つだけだ。

手の中で自分に振るわれることを待つ愛槍が、責めるように震えた気がした。

管理局の支給品で、これといって高ランクの魔導師が用いるようなハイスペックな品ではないが、ずっと使い古して来たシンプルな長槍が・・・・・・

・・・・・なんたる未熟。

ただ一撃、攻撃を逸らされただけで隙をさらすなど、愚の骨頂だ。

「・・・・・・」

フィー・T・スプリングフィールド。

年齢からは想像できない程の格闘センスを秘めた少女・・・・・それが、サーチャーでナカジマとの試合を見ていたゼストの感想だった。

確かに将来性、凄まじい使い手になっている可能性はあるだろう。

だがしかし、今現在の実力では自分の一撃を逸らすなど、かなわなかった筈だ。

それに、あの見慣れぬ風の障壁に影を使った転移魔法。

・・・・そう、まるで別人。

あの一瞬だけ別人と入れ代わったように思える程の変化だった。

それに・・・・あの瞳は七、八歳の子供が出来る瞳ではない。

この世に死があることを知り、悲しみが、絶望があることを知り・・・それでも未来を諦めぬ強き瞳だった。

「隊長、作戦はほぼ終了です。　どうしますか？」

ナカジマの声に頷き、自分の槍（デバイス）から投影されるモニターへ目をやった。

―　追跡可能

転移先の割り出しがちょうど終了した。

「俺はフィー・T・スプリングフィールドの追跡にうつる。　ここは任せたぞ」

「了解です。　・・・・・あの・・・」

言いづらそうに口ごもる彼女が何を言いたいのか、ゼストにはわかっていた。

「心配するな。　怪我などさせんさ」

「・・・お願いしますよ？」

・・・相手がただの少女だったらだが・・・

心の中でそう呟き、ゼストは追跡に向かった。

★★★

「あ・・・危なかった・・・・・・」

影のゲートで安宿の自室に転移したネギは、額に滲む冷や汗を拭いながら、荷物を急いでまとめ始めた。

『えっ、ちょっとネギ、どうしたの？』

「さっきの人達がここを突き止める前に、早く逃げないと。　捕まったら、フィーの目的が遠退いちゃうでしょ？」

幸い、着替えとファイトマネーで貯まった札束くらいしか荷物はなく、リュックサック一つで荷造りは完了した。

『捕まったらって・・・・・わたし達、逃げ切ったんじゃないの？』

首をかしげたフィーの姿が脳裏に浮かぶ。

「転移って言うのは、そんなに万能じゃないんだよ。　どうしても空間に痕跡が残るから、それを辿られたら直ぐにバレちゃうよ」

『えぇ～！？　それじゃあ早く逃げようよ！　レッツゴー』

「わかったわかった」

状況をようやく理解したフィーがネギを促す。

安宿から飛び出し、逃げようとしたところで・・・

「止まれ」

低い、男の声が頭上からかけられた。

「うっ」

『げ・・・・・』

『風花旋風風障壁』を容易に切り裂き、槍の一撃を見舞ってきた男

だった。

「・・・・・っ」

迂闊だった。

宿代を優先して、街外れにあるこの場所を利用していたのが仇となった。

・・・相手は次元世界の保安組織の一員。

周りに一般人が大勢いる街中なら、紛れることで逃走出来たのに・・・・

宿の周囲は木々に囲まれ、人の気配を感じない。

つまり、ネギが逃げるためには目の前に立つ男を倒すしかないということだ。

リュックサックを静かに置き、動きやすいように構える。

「時空管理局地上本部ゼスト隊所属、ゼスト・グランガイツだ。抵抗せず、大人しく投降しろ・・・と、言いたいところだが・・・・・」

鋭い刃を思わせる眼光。

鋼鉄さながらに鍛え上げられた巨躯は、管理局の白を基調としたジャケットとは異なる、灰色のコートを押し上げる。

・・・・・強敵だ。

息を整える。

今の状態で闘って、勝率が低いことはわかりきっていた。

だが、諦めない。

大切なモノのために戦う・・・・・今は相棒の、フィーのために戦うと自分は約束したのだから。

「貴様は諦めまい。　二重人格か、はたまた俺の知らぬ技法か・・・・・どちらにせよ、そんな目をしている者が投降するとは思えんからな」

「・・・・・・」

『・・・・・・ネギ』

『大丈夫。　僕が何とかするよ』

男、ゼストが槍を構え、ネギは手甲に包まれた拳を構える。

ビリビリと圧力を感じる。

ゼストの闘気が空間に満ちていく。

「・・・往くぞ」

呟くようなネギの声。

「・・・来い」

眼前の男に向かい、ネギは疾走した。

★
★
★

男、ゼストの長槍が大気を裂く。

振るう。　振るう。　振るう。

流れるような淀みない動きのまま、勢いを殺さず槍が駆ける。

縦に、横に、薙ぎ、払い、時には突く。

その怒濤の攻撃は、たった一人で繰り出される槍衾を連想させた。

フィーでは三秒もその目の前に立つことは叶わないであろう冴え渡る技巧。

しかし、そんな超越的な技巧を前にネギは・・・

「・・・・・スゴい」

しっかりと対応していた。

両手の手甲で弾き、時には体を反らして回避し、手に纏わせた魔力の刃?でつばぜりあう。

・・・・・悔しい。

精神世界でこうやって見ていることしか出来ない自分に、フィーは拳を握り込んだ。

こんなピンチに自分は何も出来ないなんて・・・

けれど、フィーにはどうすることも出来ない。

表に出たって、数秒でゼストに倒されるだけだ。

と、その時・・・・・・

『ぐあっ・・・・！？』

ネギの視界を映し出していた画面が、ガクンと揺れた。

槍の柄による打撃が、ネギの脇腹を強打し、吹き飛ばされたのだ。

木々を何本もへし折って、ようやく止まったことから、かなりの威力だったことが伺える。

そんな光景を目にしてフィーは、

「・・・・・っ」

ついこの前、ネギから聞かされた業を思い出した。

「・・・・・うん」

覚悟を決めた。

★
★
★

アバラが二、三本折れた。

脇腹から感じる激痛に、ネギはそう自己診断した。

出血を止めて、代謝を遅らせる技術や昔とは比べ物にならないほどの治療魔法の腕前があるため、その事についてはそう心配していない。

しかし、もっと根本的な問題があった。

・・・・勝てない。

元の肉体との魔力量の差、身体的リーチの差、その他諸々が不利に働いている。

しかもそれを差し引いても、眼前の男は強かった。

近接戦の技量は槍と拳の差こそあれ、自分と同格。

しかし魔力において、ネギは桁違いに劣っていた。

今の自分の魔力を十とするなら、相手は確実に百以上はある。

ゼストは槍を使った近距離戦を得意としているようだから、遠距離戦を仕掛けるのが良いのだろうが、今の魔力だと『雷の暴風』数発が限界で『千の雷』など論外。

更に言うと、出力も落ちているため、以前のような大威力はのぞめない。

ネギの頬を汗が伝う。

手詰まりだった。

せめて、闇の魔法（マギア・エレベア）が使えればと思ったネギだったが、頭を振る。

フィーを人から外れたモノにしてどうする、と思ったのだ。

しかしその時、頭の中でフィーの声がこだました。

『・・・・・ネギ、闇の魔法を使って』

『ッ！　フィー！？』

『今のままじゃ、勝てないんでしょ？　わたしでもそれぐらいわかるよ』

そんな言葉に、ネギは歯をくいしばって立ち上がった。

『フィー、闇の魔法は外法の業だ。　前にも言ったでしょ。　僕の精神と部分的に融合している君が、そんなもの使ったら、どうなるかわからないって』

『うん、覚えてる。　それでも・・・・・だよ』

『最悪、君という存在が闇に呑まれることもあり得る。　わかってるの？　それにもし、何事もなく上手く行ったとしても、待っているのは死ぬまで続く孤独だよ？　周りの親しい友が老いていくのに、自分は老いず、精神が死ぬか、他人に殺されるまで続く牢獄・・・・・　それでも、いいの？』

『・・・・心配してくれてありがと。　でも、わたしはお母さんを止められなかったら死んでも死にきれないんだ。　きっと、自分がどれだけの代償を払おうとしてるのか、わたしはわかってないんだと思う・・・・・だけど・・・』

脳裏に浮かぶフィーが、拳を突きだし微笑む。

『正しい選択なんて無い。　選んだ後で、その選択を正しいと思えるようにしていくんだよっ　それにさ、孤独って言ったって、ネギ

が居るでしょ？　・・・・・相棒』

『・・・・・後悔しても、知らないからね』

『望むところよ。　やらないで後悔するより、やって後悔した方がいいもん』

『・・・・わかったよ。　必ず耐えてくれ・・・もう、大切なもの人を失うのはごめんだから・・・・・』

『ネギ・・・・・　大丈夫！　わたしを信じなさいっ』

・・・根拠もなしに信じられるんが、仲間いうんちゃうんかい・・・

かつて共に戦った仲間の言葉。

・・・そう、だったね。

『・・・・・根拠もなく信じられるのが仲間・・・か。　相棒、信じてるよ』

フィーは笑っていた。

瞳を閉じ、精神を集中する。

自然体で佇み、心の奥底に封じ込めた、己の闇を解放する。

「ふぅううう・・・」

ゆっくりと息を吐き出す。

ピンク色のジャージ、そして鈍色の手甲。

ネギの両腕にとぐろを巻いた翼を思わせる紋様が浮かび上がる。

漆黒のオーラに包まれたと錯覚するほど、空気が死んでいく。

―　闇き夜の型

アクトゥス・ノクティス・エレベアエ

闇の魔法における訓練法の一つにして、始まり。

元の肉体ならなんの負荷も感じず、ほとんど常時発動しているような業だったが・・・

「ぐっ・・・」

違和感。

フィーの肉体だからか、それとも違う原因があるのか、ネギにはわからなかった。

ギシギシと体が軋み、心を乱せば暴走を許してしまいそうだった。

「だけど・・・・・」

思わず呟く。

この程度で暴走させていたら、自分は遥か昔に理性の無い化け物に堕ちていただろうと。

ネギは無理矢理にでも、闇を抑え込んだ。

「ふー・・・・・」

魔力が増大していく。

尽きかけていた力が、体を駆け巡る。

ふいに、胸の中心に焼きごてを押し付けられたような灼熱感を感じた。

それが、リンカーコアの急激な成長のせいだと、この時のネギに知るよしもない。

痛みを呑み込み、ネギは油断なく槍を構えるゼストに向かって地を蹴った。

★★★

背筋に寒気が走った。

槍に残る確かな手応えは、アバラを数本砕いたことをゼストに告げている。

しかし、感じる魔力はどうだ。

衰えるどころか、跳ね上がっていく。

・・・・本気になったか。

己の愛槍を見る。

ところどころ刃こぼれし、柄には深い亀裂が走っている。

これは、ネギの『断罪の剣』と打ち合った代償だった。

『断罪の剣（エンシス・エクセクエンス）』はただの魔力刃などでは断じてない。

物質を固体、液体から気体へと無理矢理に相転移させる攻撃呪文。

気体へ相転移させると言うことは、蒸発させてしまうことなので、効果範囲内に極めて大きな破壊をもたらす。

蒸発させるというと、温度が上がると思われがちだが、相転移させられた物質は大量の融解熱、気化熱を吸収するため、周囲の温度は急激に下がる。

つまり、『断罪の剣』とは相転移と極低温の二段構えの攻撃になっており、極めて高い殺傷能力を持つ超高等魔法なのだ。

ゼストのレジストが間に合わなければ、初撃の一合で両断されている可能性すらあった。

槍を握り直す。

瞬間、閃光が走る。

「っ！」

鈍色の手甲に包まれた拳撃が、今までに倍する速度で踏み込んできた少女から繰り出されたのだ。

槍を回転させ、嵐のごとき連打を弾き返す。

そして、わずかな隙をつき、横薙ぎの一撃を振るう。

足元を刈らんと駆けたそれは、

「飛行魔法すら使いこなすか！」

空へと逃れることで回避された。

と、同時に少女が再び何かを呟く。

詠唱による儀式魔法を多用することにゼストは気付いていた。

・・・・させん。

自らも飛行魔法を発動し、ゼストは槍を振りかぶった。

★
★
★

『・・・・もう、大切な人を失うのはごめんだから・・・・・』

初めて会ったときは、暗い感じの妙なお兄さん。

修行を見てもらうようになってからは、どこまでも完璧な頼りになる相棒。

それが、フィーがネギに感じていた印象だった。

・・・でも、その言葉を聞いた時、それは間違いだったんだと気づいた。

もちろん、良い意味で。

支えてあげないと、折れてしまいそうな程、その言葉は弱々しかったのだ。

多分、自分と出会ってから初めてネギが溢した、弱音だった。

『ネギ・・・・・　大丈夫！　わたしを信じなさいっ』

知らず知らずのうちに、そんな言葉を口から溢していた。

・・・そっか、ネギもわたしを頼っててくれたんだ。

自分はお荷物でしかないんじゃないか、フィーは少なからずそう考

えていたのだ。

・・・・・負けない。

これからどんな事が襲ってこようとも、自分は絶対に耐えてみせる。

意気込むと同時、フィーの視界は黒く染まった。

★
★★
★

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル　来たれ雷精風の精雷を纏いて（クム・フルグラティオーネ）吹けよ、南洋の嵐（ウェニアント・スピはヤアネレス・フルグリエンテース フレット・テンペスタース・アウストリーナ）」

―　雷の暴風！

ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス

詠唱を完了し、放出する筈の魔力の塊を手の平に球体状に押し止める。

―　固定

スタグネット

そして、固定した魔力の塊を握り潰すようにして、ネギは肉体へと取り込もうとする。

肉体が軋むのをネギは感じた。

歯を食い縛り、魔力を制御する。

敵に仇なす攻撃魔法をあえて自らの肉体に取り込み、霊体にまでする。

術者の肉体と魂を喰らわせて、それを代償に常人に倍する力を得ようとする狂気の業。

既に、遥か彼方に乗り越えた場所だ。

カルマ・・・・業というものが死によっても失われず、ついて回るものならば、

「ぐううおおおあああああっ」

自分に出来ない筈がない。

善悪の行為は因果の道理によって、後に必ずその結果を生むという。

一度、魔の眷族へと堕ちたこの身は、喩え肉体が変わろうとも人外のままの筈・・・・・・

それに、細かいことは脇において・・・・・・

自分は・・・・・・

今・・・・・・

相棒の願いを叶えるために、力が欲しいんだ！

―　掌握！！！

コンプレクシオー

『雷の暴風』がネギの肉体へ取り込まれた。

―　術式兵装・疾風迅雷

アルマティオーネ・アギリタース・フルミニス

肉体が雷撃を纏ったかの如く、白く輝き、その周囲に気流の護りが吹き荒れる。

「おおおっ！」

そんなネギに対して、ゼストは横薙ぎの一閃を放った。

虚を突いた一撃。

先程までのネギならば、直撃をもらっていてもおかしくない。

しかし・・・・・

「っ！？」

紙一重で回避し、ネギは当然とでもいうかのように、ゼストの懐へ潜り込んだ。

拳が握り込まれる。

『疾風迅雷』により、帯電した拳の連撃がゼストへと振るわれた。

「はあああああっ」

「ぬうっ・・・おおおおおおっ」

★★★

何もかもが呑み込まれてしまいそうな暗黒の空間に、フィーはただ独り立ち尽くしていた。

なにも見えず、なにも聞こえない。

痛くなるような静寂。

まるで、世界にだった独り、取り残されてしまったような気さえしてくる。

「・・・なんなのよ」

思わずフィーは呟いた。

とてつもなく痛かったり、苦しかったりするのかと身構えていたのに、気付けば暗闇に独り。

拍子抜けだった。

「・・・ねえ、ネギ・・・・・・あっ」

喋りかけて、相棒が居ないことに気づいた。

何時も、自分と共に居る筈の姿が何処にも見えない。

・・・・・独りって、こんなに寂しかったんだ。

そんなことをフィーは思った。

お母さんを追い掛け、研究所から飛び出してきてから二週間と少し。

フィーとネギはずっと一緒だったのだ。

だからこそ、『お母さんを止める』と言う、自分の具体性の欠片もない目標に向かって、フィーは歩を進められたのだ。

けれど・・・・・

なにも見通せぬ闇の中で、フィーは今、独りきりだった。

ずっとネギは絶対の相棒として、隣に居てくれたのだ。

「・・・ううん」

首を振る。

・・・・それだけじゃない。

ネギが右も左もわからない、フィーの不安感や孤独感を打ち消して居てくれたのだ。

「・・・・・」

小刻みに震え始めた自分の体をフィーは強く抱き締めた。

そうしないと、今にも崩れてしまいそうだったから。

「・・・やだ・・・・・」

・・・・暗いのは嫌だ。

フィーぐらいの少女なら、暗闇が怖いのは当然だろう。

その豊かな想像力によって、いもしない化け物を闇に幻視してしまうから。

しかし、フィーが怖れたのはそんなことをではなかった。

忘れようと思っていたことを思い出してしまうのだ。

ネギのお陰で考えずに、思い出さずに済んでいた、あの苦しみを・・

・・・

「う・・・うう・・」

フィーの意思に反し、体の震えは止まってくれない。

・・・そう、あの時も・・・

『こんな暗闇だったよね』

「っ！？」

視界を塗り潰す、黒一色の闇が発したように、その言葉は響いた。

「だっ・・・だれっ！？」

『わたし？　わたしはわたし（あなた）だよ』

「・・・・・はあ？」

意味がわからなかった。

首をかしげどういうことか考えているうちに、何処からともなく響くフィーに良く似た声は止まらない。

『あの時も、こんな暗闇だったよね。　暗い暗い、電源が落とされた培養槽のなか。　わたし（あなた）はお母さんに捨てられた』

「・・・・・やめて」

『生暖かかった液体は、みるみるうちに冷たくなって。　ついには息も苦しくなって。　助けてって叫んでも、お母さんは来てくれなかった』

「言わないで・・・」

これ以上聞きたくないと、両手で耳をふさぐ。

けれど、声は頭に直接響いてきた。

『暗くてなにも見えなくて、息がだんだん出来なくなって。　叩いてたガラスが、たまたま脆くなってなかったら、わたし（あなた）は彼処で、あの暗闇で、誰にも知られることもなく・・・・・』

「言うなーっっっっっっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

フィーは思いっきり叫んだ。

喉が潰れないか心配になるほどの大声で。

しかし、声は止まらない。

『ねえ、あなた（わたし）はなんで、お母さんを止めようとしてるの？　わたし（あなた）を見捨てたあの人を』

「そ、それは・・・　あの時は、わたしが生きてるってことに気づいてなかっただけかも知れないし・・・・　それに、わたしがどんな存在だったとしても、お母さんは・・・・・」

『お母さんはお母さん・・・・・　なんてこと、言わないよね？ただ、わたし（あなた）のオリジナルがあの人の子供だったっていうだけなのに。　記憶だって、オリジナルのコピーだよ。　あなた（わたし）は研究所で見た筈だけど・・・・　あのレポートを』

「・・・・・っ」

まさしくその通りだった。

フィーは『プロジェクトF』に関する研究レポートを見付けていたのだ。

『愛情なんて、欠片ももらってない。　ただの作者。　・・・・・まあ、わたし（あなた）を造ったって意味でなら、あの人は母って言っても間違いじゃないけど』

「・・・わたしは・・」

闇から響く声はフィーに問うていた。

なぜ、母を止めようとするのかと。

その問いに、フィーは明確な答えを持ち合わせていなかった。

なぜなら、そう・・・本能的としか言えない、そんな感情によって、フィーは突き動かされていたからだ。

『そう言えば、あなた（わたし）は今、フィーって名乗ってるんだよね？　ダメだよ、お母さん（作者）からつけられた名前（ラベル）を省略したら。　ねえ・・・・・』

フィフティス（五十番目）

第六章　以心伝心

機関銃の連射を思わせる帯電した拳の雨に、ゼストは己が鍛え上げた槍術で真っ向からぶつかっていった。

「ぬっぐおおおっ！」

「はあああああっ！！」

疾風の速さと、迅雷の激しさ。

ネギの動きは、魔導師ランクS、古代ベルカ式の騎士であるゼストをして、反応が遅れる領域に入ってきていた。

槍で捌ききれず、数発の拳を腹や肩、顔にもらう。

しかし・・・・・

「軽いっ！！！」

拳撃をもらいながらも、ゼストは槍を薙ぎ払った。

閃光。

「っ！？」

透明なＢＪを一瞬の抵抗も許さずに切り裂く。

ピンクのジャージが袈裟懸けに裂け、中に着た黒いインナーが顔を覗かせる。

あと一瞬、ネギの反応が遅れていれば、今の一撃で終わっていただろう。

・・・・速いな。

だが、それ故に一撃一撃は軽い。

次で決める。

ゼストは槍を握り直した。

ギシッと軋む感触。

愛槍が悲鳴をあげていることを感じる。

・・・・耐えてくれ。

「フルドライブ」

ポツリと呟いた言葉。

直後、体内を駆け巡る魔力が爆発的に膨れ上がる。

眼前の少女が使っている術が、詳しくはわからないが、ブーストの類いと見て間違いないだろう。

ならば、自分もブーストをかけるまでのこと。

瞬間、ゼストは音の壁を容易に飛び越える、不可視の速度で距離を詰めた。

★★★

・・・ラカンさんとの決勝戦みたいになってきてる。

焦る心をなんとか押し止め、ネギは思った。

あの時も、雷速という超速の拳は気に練り込まれた鎧を突破出来なかった。

今回はそこまでではないが、似たような状況だった。

速度を重視した攻撃では、相手の強力なＢＪを突破して、致命打を与えることは困難。

かといって、威力を重視すると、槍の一閃を回避することが困難になる。

先程から返事がないフィーのことが心配なネギとしては、一刻も早くケリをつけなければいけないのに・・・・・

そんなことを考えていると、

「フルドライブ」

男の魔力が爆発的に跳ね上がった。

山吹色の魔力光がオーラのように全身から発せられている。

・・・やばいっ！？

頭が危険だと警鐘を鳴らすが、肉体が追い付いてこなかった。

「っ・・・・・！！？」

二十メートル以上は離れていたゼストが、刹那の瞬間、目の前で槍を振り下ろしていた。

ネギに出来たのは、常時展開しているＢＪとは別の障壁の出力を全開にすることだけだった。

全力展開した障壁はゼストの一撃の前に、気休め程度の効果しか得られない。

肩口にすさまじい衝撃を受けて、ネギは木々が生い茂る森林に向かって、叩き落とされた。

★★★

フィフティス（五十番目）

その瞬間、フィーは自分の心臓が大きく脈打つのを感じた。

『あれ？　どうしたの？　まさか忘れてた？　・・・・ああ、忘れようとしてたんだ。　それもそうだよね。　もし少しでも愛情が

あるなら、五十番目なんて名前（ラベル）、つけないもんね』

「・・・・・」

なにも言い返せなかった。

『もう、ここで管理局の人に捕まった方が、あなた（わたし）のためだと思うよ。　今ならまだ、罪も軽く済むだろうしさ。　闇の魔法だって、わたし（あなた）がこっちの魂まで侵食されないように抑えてるから、今ならまだ手遅れにならずに済むよ。　あの人（作者）のために、化け物になるなんて割りに合わないでしょ？』

「・・・・・え？」

『だから、今ならまだ手遅れにならずに・・・・・』

「その前よ！　あなた、今なんて言ったの！？」

『？　わたし（あなた）がこっちの魂まで浸食されないように抑えてるって言ったんだよ。　まあ、そのお陰でお兄さんは上手く制御が出来なくて、苦戦してるみたいだけど』

「なっ・・・・・」

ズンッと、世界が揺れた。

『あ、そろそろ決着が着くかな？　よかったね。　これであの人（作者）のために、化け物になるなんてバカな真似をしなくてすむよ』

「・・を・・や・・・て・・・・」

『・・・？　なに？』

「侵食を抑えるのを・・・・・やめて」

『ぷっ・・・　あは、あはは』

フィーの言葉を受け、闇は狂ったように笑い出した。

「なにが可笑しいのっ」

『くくくっ　可笑しいって・・・・わからないの？　初めに言ったでしょ。　わたしはわたし（あなた）だって。　つまり、これはあなた（わたし）の意思でやってることなんだよ？』

「え・・・・・」

『あなた（わたし）がお母さん（作者）を体をはってまで止めようとすることを迷ってるからだよ。　むしろ、わたし（あなた）としては、どうして止めようって気が起きるのかすら疑問なんだけど？　あの人（作者）なんてどうでもいいじゃん。　ここで捕まった方が、幸せになれるよ』

「・・・・・」

『さあ、一緒にお兄さんに、もういいんだよって言いに行こう』

暗い空間に輪郭が浮き上がり、フィーの目の前にフィーソックリの闇が現れた。

握手を求めるように、手を伸ばす。

『さあ』

そんな闇の手のひらを眺めて、うつ向く。

フィーは、手を握った。

同時にポツリと呟く。

「・・・・バカだね、わたし（あなた）」

闇はそんなフィーの言葉をどうとらえたのか、口許に笑みを浮かべた。

が、次の瞬間、

『え？　がっ！？』

フィーにソックリの闇の頬に拳が突き刺さった。

状況が飲み込めず、驚いているらしい闇の頬に、フィーは容赦せず二発、三発と拳を打ち込んでいく。

・・・自分の気持ちも決められないなんて、バカだなわたし。

でも、バカにはバカなりに意地がある。

このまま諦めてたんじゃ、自分を手伝ってくれてる相棒に、顔向け

出来ない。

「わたし（あなた）がどうしてお母さんを助けたいのかなんて、わからないっ！！！」

殴る。

のけ反る闇だが、手を握られているため、離れることが出来ない。

しかし、相手もただ殴られてばかりではない。

『・・・っ！　なんで、あなた（わたし）はわからないの！？　そんな曖昧な理由で、化け物になるなんて、割りに合わないよっ！！！』

アッパーぎみにフィーの顎が殴り上げられる。

脳が揺さぶられ、倒れそうになる体を気合いで立て直す。

「曖昧なんかじゃ・・・・・ないっ！！！」

『どこが・・・・・よっ！！！』

緊張感や、恐怖心を掻き立てる黒一色の空間が、フィーとフィーの闇が殴り合う度に、元の光に包まれた空間へと戻っていく。

「はあ・・・はあ・・あなた（わたし）ならわかるでしょ。　お母さんを止めるって目標がなかったら・・・・・　わたし（あなた）は研究所で生きる目的も見つけられずに死んでたでしょうねっ」

『はっ・・・はっ・・でも・・・今は違うでしょ。　お兄さんと共に生きたい。　あなた（わたし）はそう思ってるはずっ』

息も絶え絶えに膝に手をつく二人。

しかし、握った手は放さない。

「どっちもわたしは諦めない！！！」

『お兄さんも言ってたよね？　親しい友が老いて亡くなる。　それが精神が死ぬまで続くって。　大人になりなよ、五十番目。　この状況で尚、お母さんを追い求めたら、あなた（わたし）は人として死ぬことが出来なくなるんだよっ！？』

ゴキンッと鈍い音を立て、フィーが仰け反った。

「お・・・大人に・・なれとか・・・・わたし（あなた）はまだ・・・・子供だもんっ！！！」

仰け反った状態から、勢いをつけて頭突きを叩き込む。

ズゴッと更に鈍い音が響き、ついに闇が膝をついた。

『バ・・・バカだね、あなた（わたし）。　一時のことしか考えないなんて・・・・・』

「はあ・・・はあ・・・・・ふんっ　やらないで後悔するより、やって後悔する。　それがわたし（あなた）のポリシーでしょ。　そんなことも、わからなかったの？」

『・・・・はあ、わたし（あなた）こんなにバカだったなんてね。　もういい。　好きにすればいいさ。　精々、後悔して泣けばいいんだよっ　そしたら、わたしが思いっきり笑ってやるから』

「そしたら、また殴ってやるわよっ」

そうフィーが言うと、闇は苦笑しながら砂塵のように足元から消えていった。

あとに残ったのは、すっかり元通りになった精神世界に一人たつ、

フィーだけだった。

・・・・・まってなさいよ、相棒っ！

★
★
★

「はあ・・はあ・・はあ・・ぐ・・くっ・・・・・」

木々が薙ぎ倒され、大量の砂煙がたちこめるクレーターの中心で、
ネギは膝をつき、息を荒げていた。

左肩から全身に駆け巡る激痛を脂汗を額に滲ませながらも耐える。

・・・マズイ。

左肩が完全に壊されていた。

それはこの戦いで左腕が使えなくなったことを意味していた。

そして更に・・・・・

「術式兵装が・・・」

完全に『疾風迅雷』が解けていた。

確かに凄まじい一撃だった。

だが、闇の魔法を覚えたてだった昔ならともかく、今のネギなら術式兵装が衝撃で解除されてしまうなんて、それこそ意識を刈り取るレベルでないとあり得ないのだ。

胸の奥底で脈打つ反動。

明らかに運用効率が低下していた。

フィーの肉体に馴染んでいないためか、それとも別の要因か・・・・・理由はともかく、最大の危機に違いない。

この状況を打開する方法をネギの頭脳がフル回転し、求める。

答えは・・・出ない。

「見事だ」

称賛の声が頭上から掛けられた。

見上げると、槍の男、ゼストが空から舞い降りてくるところだった。

・・・もう、無理だ。

理性がそう訴える。

しかし、それでもネギは・・・・・・

「・・・立つか」

息を吐き出し、魔力を練り込む。

小刻みに震える足に渇を入れ、ネギは右腕だけで構えた。

「やめておけ、フィー・T・スプリングフィールド。　すでに限界の筈だ」

男の言葉。

それは、ネギの理性が喚き散らす言葉と同じだった。

諦めろ。

もう無理だ。

不可能。

限界・・・・・それがなんだって言うんだ。

「・・・何が可笑しい？」

「限界？　そんなの・・・・・知ったことか」

怪訝な眼差しで見つめる男に、ネギは不適な笑みを隠そうとしなかった。

限界・・・・・確かに限界だ。

体はボロボロ、魔力はガス欠寸前。

だが、ヒトの強さとは、いつも限界を越えた先にある。

それに、自分は一人じゃない。

根拠もなく信じられる・・・・・いや、信じると決めた相棒が、ネギにはいるのだ。

大丈夫！そう笑って、不確定な先へ進んだ相棒が・・・・・

そんなネギに対し、ゼストはただ一言、

「そうか」

それだけを口にして、静かに槍を構えた。

発せられる闘気が、物理的な圧力すら伴ってネギを押し潰そうと威圧する。

膝を着いてしまいそうだった。

次で決まる。

ただ、それだけを悟った。

時間がゆっくりと流れているようだった。

緊張が徐々に高まっていく。

と、なんの予兆もなく唐突に・・・・・カチリッ・・・・・そんな音が、ネギの頭に木霊した。

不協和音を生み出していた、最後のピースがはまった。

喉に刺さっていた、魚の骨がとれたような、ちょっとした解放感。

『おまたせ、ネギ（相棒）』

『ああ・・・ナイスタイミングだよ、フィー（相棒）』

小さく頷く。

次の瞬間、二人は同時に動いた。

ゼストの体から山吹色の濃密な魔力が溢れ出す。

また、あの超速の一撃が来る。

そう思うや否や、『断罪の剣』での掬い上げるような一閃をネギは振るった。

瞬動（クイック・ムーブ）の『入り』や『抜き』を感じさせない、刹那で放たれたそれ。

空を切る。

ゼストが最小限の動きで体を捌き、回避したのだ。

振り上げきったところで、今度はゼストが強大な魔力を込めた槍を薙いでくる。

狙いはネギの脇腹。

真空の刃すら発生させるそれが迫る。

振り上げた剣を変化させ、その一撃に合わせるように叩き込んだ。

衝撃。

凄まじい圧力が右腕を襲う。

甲高い音が響き渡る。

槍が止まった。

いや、『断罪の剣』が刃の中程まで届く亀裂を入れたことに気づいたゼストが、己の槍に静止をかけたのだ。

デバイスが支給品ではなく、特注品であったならば結果は違っていたかもしれないが、この瞬間ではこれが事実だ。

刃に深い亀裂が入った光景を目の当たりにして、ネギは瞬時に『断罪の剣』を解除。

槍の苦手とする、超至近距離へと踏み込んでいく。

しかし、男は苦手とする筈の距離をまるでものともしない。

渾身の肘打ちにタイミングよく膝蹴りを合わせ、背後に跳ぶことで距離をとる。

両者の距離は歩幅五歩分。

・・・・ここだっ！

地を蹴り、再びネギが懐へ飛び込む。

体の周囲には無詠唱で出現させた九つの魔力弾・・・・・いや、『魔法の射手』。

男と視線が衝突する。

飛び退きながらも、空中で体勢を整えていたゼストは、ずっしりと地に足を抉り込ませ、可視領域を遥かに越えた神速の突きを放つ。

槍の基本にして究極。

ネギの目ですら影を追うことも叶わぬ速度。

どう堪えようとも、これを喰らったら立ち上がることは出来まい。

腕や肩先、起点となる要所だけを視界におさめ、勘と経験を総動員する。

「「っっっ！！！？」」

ネギは、その一閃を、紙一重で、回避した。

真空の刃によって、頬が裂ける。

奇しくも、その位置は元の肉体に戒めとして残していた傷とまったく同じ場所だった。

そして・・・・ネギの手のひらがゼストの鳩尾にそえられた。

―　魔法の射手・戒めの風矢！！！

サギタ・マギカ・アエール・カプトウーラエ

「ぬっ！？」

無詠唱で発動した『戒めの風矢』が、ゼストの四肢を拘束していく。

そう、ネギは倒すことが目的ではなかったのだ。

一時的に足止めし、逃げる時間をかせぐ。

それがネギの狙い。

零距離射程で直撃させることで、どんなに強力な障壁、ＢＪも、効力は最小となる。

脱出にかかる時間は、まともに喰らった以上数十秒・・・・・いや、ゼストなら十数秒で脱出できるかもしれない。

しかし、それだけあればネギが影のゲートを開き、ここから転移するには十分だった。

「・・・・・次は逃さん」

そんな男の呟きを最後に、ネギはゲートへ潜っていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ？　終章

「つ、疲れた・・・・・」

『お疲れ様っ　今度こそ逃げ切ったの？』

何処かの街の路地裏に、ボロボロになったネギの姿はあった。

治癒魔法を駆使する余力がないため、折れたアバラや壊された左肩、切り裂かれた左の頬は未だに鈍い痛みを発している。

「多分ね。　十六ヶ所も転移したし、追っては来れない筈・・・」

『そっか～・・・』

「そうだよ・・・・・」

・・・・・

『ぷっ「ふふ、ははははははははははははっ」』

何はともあれ、ネギとフィーは逃げることが出来たのだ。
どちらからともなく、二人は腹の底から笑いあった。

「あはははは って、痛っ　イタタ・・・・・」

『ちょっ、大丈夫っ』

「ま、まあ死ぬほどじゃないよ。　早く治したいけど、魔力が回復しないとな～」

『そっか～・・・・・あ、あああああああああああっ！！！』

「な、なに？」

『リュックサック！　彼処に置きっぱなしにしてきちゃった』

「はっ、そういえば！？　・・・・・まあ、しょうがないよ。　僕達なら直ぐに稼げるって」

『うう～、せっかく貯めた五十万ミッド$が』

恐らく、リュックサックは回収されているだろうと、ネギは思った。

そうじゃなくとも、犯人は現場に戻って来るという、よく聞く話を実践しなくてもいいだろう。

確かに五十万ミッド$は惜しいが、それでおめおめと戻っていって、捕まったんじゃ洒落にもならない。

『は～　あ、ちょっとポケットの中を見てみて』

「？」

言われるがままにポケットを探ると、ガサリと数枚の紙が出てきた。

合計で百ミッド$ほど。

ちょっと高級なレストラン一食分で無くなるような金額だ。

『・・・・・』

「ぼ、僕達なら直ぐに稼げる・・・よ」

★
★
★

「ふむ、・・・してやられた・・・・・な」

転移したフィー・T・スプリングフィールド。

しかし、ゼストは戒めを脱出しても、追跡に移れなかった。

なぜなら・・・・・

「耐えられなかったか・・・・・」

手の内で、男のデバイスは粉々に砕けていたから。

『断罪の剣』で入った亀裂。

そしてトドメとなったのが、二度のフルドライブ。

支給品の耐久力では無茶があった。

ある程度の自己回復機能がついているが、ここまで粉々になってしまったら、もう使えないだろう。

「・・・む？」

と、地面に転がるリュックサックが、ゼストの視界に映った。

手掛かりになるかどうかわからないが、一応回収するか。

最後に少女が転移した場所に視線を向け、呟く。

「・・・次は逃さんぞ、フィー・T・スプリングフィールド」

そして、ゼストは部下が待つであろう地下闘技場に向けて歩き出した。

★★★

「おおっ、治ってる～」

肩を回し、具合を確かめるフィー。

『まあ、病気とかじゃない限り、あらかたの怪我は治せるよ。　それより、これからどうしよっか？』

「う～ん、お母さんは次元干渉型のロストロギア（古代遺失物）を探してると思うんだよねっ　だから・・・・・どうしよ？」

『ふふ、トレジャーハンターにでもなる？　とにかく、この次元世界から飛び出さないと話しにならな・・・・・』

きゅう～・・・・・

ネギの言葉を遮るように、フィーのお腹がせつなげに鳴った。

「あうぅ～。　お、お腹へった」

いつの間にか辺りはすでに暗くなり、街の街灯が夜の闇を照らしている。

『まあ、後のことはご飯を食べてからにしよっか。　腹が減っては戦はできぬって言うしね』

「おお～　ないすあいであ！」

ピンクのジャージを翻し、フィーは大通りに向かって走り出した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ？　終章（後書き）

八月中には次回の投稿をしたいと思います。

ご意見、ご感想等ございましたらお気軽にどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ？　序章

玄関から一歩外に踏み出すと、世界は一面の銀世界だった。

プレシア・テスタロッサは白い息を小さく吐き、心地よい冷気に少しの間、身を任せた。

厚手の防寒着の上から、ふくらみの目立ち始めたお腹をそっと撫でる。

ここ最近は仕事を休み、家から一歩も出ない日々が続いていた。

朝から晩までソファーに座り、お腹の子供に歌をうたってあげる。

予定通りなら三ヶ月後。

医者の話では女の子だそうだ。

あの人と相談して、名前は『アリシア』に決めた。

『高貴な』という意味のその名をこの子が気に入ってくれればいいのだが・・・・・

遥か彼方の空を流れ星が煌めいた。

・・・・私に母親になる資格なんてないのかもしれない、そう思う。

魔導工学の研究者として、確かな実力を持つプレシアは、日々多忙を極める。

そんな私が子育てをまともに出来るのだろうか・・・・・

不安が一瞬、頭をよぎる。

ふと、足元に温もりを感じた。

見ると、飼い猫のリニスが構ってくれと、プレシアの足首に頭を擦り付けていた。

思わず、微笑む。

「・・・ふふ、ごめんなさいね、リニス。　家に戻りましょうか」

きっと、この子はいつか辛い思いをするだろう。

辛くない人生なんて、ありはしないのだから。

それでも、私はこの子に世界を見せてあげたい。

幾つもの悲しみや絶望と、そして、無数の輝きに満ちたこの世界を・・・・・

「あ・・・」

早く外に出たいと言うように、この子が私のお腹をノックした。

プレシアの口元に、やさしい笑みが浮かぶ。

お腹の中の小さな命をいとおしむように、もう一度、そっと撫でる。

人生は選択の連続。

傷つき、倒れ、ときには絶望することもあるだろう。

「・・・・・それでも」

祈るように瞳を閉じる。

あなたの道に、どうか沢山の輝きがありますように・・・・・

第一章　前途遼遠

「お母さん・・・・・か・・・・」

フィーの唇から、そんな呟きが溢れた。

錆とホコリの臭いが漂う、機械がぎっしり詰まった闇の中。

八歳程の体を折りたたみ、胸に小型のコンピュータを抱いたまま、紅い瞳が頭上を向いていた。

ここは、とある世界にある、大渓谷に倒れ込んだ遺跡の中だった。

その内部に侵入して、ふと見上げた天井にフィーは見付けてしまったのだ。

親と子を思わせる、寄り添った大小の二つ。

お手製の暗視ゴーグルを外してもハッキリとわかる、亀裂から覗く二つの煌めき。

ここまで届く、月の光だった。

地下闘技場の街から旅立ち、早半年。

母親を探しているはずの自分が、なぜ古びた機械と油、積もりに積

もったホコリがひしめく闇の中に居るんだったか・・・・・

「って、なに考えてるんだろ、わたし。　そんなの手がかり探しに決まってるじゃん。　けっして遊びなんかじゃないんだからっ　まったくもうっ」

ゴーグルをしっかりと装着。

フィーは軽く頭を小突いた。

相変わらずのピンクジャージに下駄。

ジャージから顔を覗かせる鈍色の手甲が、月光に照らされ鈍く輝いた。

『フィー、さっきから独り言をブツブツ呟いて、どうかしたの?、』

「うひゃぁあ!?」

突然、頭に響いた相棒の言葉に驚き、フィーは危うく小型の携帯コンピュータを落とすところだった。

「も、もうネギ!　びっくりするじゃんっ」

『あ～　ごめんごめん。　っと、それよりも、その端末からなら中枢にアクセス出来るはずだよ』

「む～　りょーかい」

頬を膨らませながら、少女は胸に抱く小型コンピュータを展開。

画面が起動し、暗闇の中に光が灯った。

そして、接続用のケーブルを引き出し、脇にあった端末へと差し込んだ。

ネギによると、これが遺跡の中枢コンピュータらしい。

遥かな時の流れ。

千年以上もの間、活動を停止していたそれは、中枢コンピュータへのアクセスと共に、息を吹き返すように鳴動を再開した。

「さっすが相棒っ！　狙った通りだね！」

『ま、まあね。　僕としてはここまで狙い通りだと、逆に不気味なんだけど・・・・・』

「ふふんっ　こんなこともあるって！　さ～て、ちゃちゃっとやっちゃいますかね～」

蓄積されていたデータを解析。

幾つもの情報があふれだす。

『うん。　プログラムに問題はないね。　構造からおおよその年代を推測して、あらかじめ適合するシステムを入れておいてよかったよ』

と、画面に映し出されていくデータの一つに、フィーは目を奪われた。

「ん？　これって・・・・管理衛星への・・・コンタクト回線・・・？」

解析したデータによると、この時代の人々は世界と世界の狭間、次元空間について調査を進めていたらしい。

調査のために飛ばされた、幾万幾億幾兆もの探査機。

そして、無数のそれらの管制を一手に引き受ける人工衛星が、千年以上たった今でも、この星の周囲をさ迷っているようだ。

思わずフィーは息をのむ。

「ね、ネギ。　もしかしてこれって・・・スゴくないかな？」

『・・・今のままじゃなんとも言えないよ。　回線はまだ使えそう？』

そんな言葉に、フィーはゴーグル越しに画面を睨み付け、カタカタとキーボードをタイピングした。

「ん～と、・・・・接続は切られたままみたい。　なんとか復活させて、わたしたちの端末につなげられれば・・・」

『僕たちも利用出来るってことだね』

「うんっ」

この半年ですっかり使い慣れたキーボードの上をフィーの指が舞うように踊る。

十数分の格闘の末・・・・・

―　管理衛星『アドヴェンチャ』へのアクセス承認

―　次元探査を再開します

画面にそう表示された。

よしっ！とガッツポーズをとる。

「やった～　ついに・・・・・ついにお母さんへの道が見えてきたよっ」

『これは・・・スゴい。　スゴい発見だよ、フィー！　これを使えば理論上、次元空間を漂う探査機を通して、膨大な情報が集められるよ！』

「よ～し！　まずは手始めに、この世界の近くに何があるか調べて見よーかなっ」

調子にのったフィーは遺跡の鳴動が最初より大きくなっていることに気づかなかった。

次々と探査結果が管理衛星を通じて、小型コンピュータに送信されてくる。

―　時空管理局巡航八番艦『アースラ』

―　臨行次元船『カレドヴル』

「おお～っ　時空管理局の船だっ　お、こっちは民間船かな？　・・・・って、なんで名前まで・・・・・・」

『たぶん、ハッキングをかけて、所属や名称を割り出してるんだと思う。　流石は古代文明の遺産・・・・今の技術力じゃ考えられない、広域次元探査技術だね。　ロストロギア扱いしてもおかしくない代物だね。・・・・・どうする？』

ロストロギアは管理局に保管してもらうのが常だ。

しかし、フィーは当たり前のように言った。

「どうするもこうするも・・・・・　わたしたちが有意義に使わせてもらうよっ　べつに世界を滅ぼす超危険物～とかじゃないんだしさ」

『それもそうだね。　バレなきゃいっか』

そのとき、画面にもう一つ、次元空間を漂う移動物体の名称が加わ

った。

今度のは、管理局の船と比べ物にならないほど大きい。

少女が目を丸くする。

なぜなら、加えられた名が、見知ったものだったからだ。

「これ、スクライアの・・・・・」

言いかけたところで、フィーはようやく違和感に気づいた。

鼻をひくつかせる。

いつの間にか、辺りに焦げ臭いにおいが充満していた。

『っ！？　フィー、脱出！』

ネギの掛け声。

それよりも先にフィーは動いていた。

中枢コンピュータへ接続するためのケーブルを引っこ抜き、慌てて機械の詰まった闇の中を突き進む。

あちこちから響いてくる爆発音。

・・・・千年以上だもんね～

じゃっかん、現実逃避気味にそう思ったフィーだが、生き残るために、手足を必死に動かす。

「きゃあああああっ　しんじゃうしんじゃうしんじゃう～ーーーーっ」

『えっ　えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～っ！？』

フィーとネギ、二人の冒険はここで幕を閉じ・・・・・・

「『閉じない！！！』」

★★★

「こ、今回ばかりは本気で死ぬかと思った・・・・・・」

『危機一髪だったね・・・・・』

ピンク色のジャージをズタボロにした、赤毛の少女フィーはお手製の暗視ゴーグルを外し、シートに腰かけた。

大の大人二人が入るか入らないかのそれほど広くないスペース。

ここはフィーのシャワー、トイレ完備の住処兼移動手段、小型次元航航艇『ミラクル号（管理局へ未登録）』の船内だった。

機械やら、食べかけのお菓子やらが散乱しているのはご愛敬といったところか。

「でも、それだけの価値はあったよ」

小型コンピュータを船の端末に接続し、衛星とのコンタクトに必要な回線を送る。

これで、この『ミラクル号（未登録）』から、探査機の情報を得ることが出来る。

『時の庭園・・・・だったよね？　その、プレシアさんが住んでるって場所は』

「うん。　移動型ロストロギア一歩手前の要塞らしいよ。　でも、調べてわかったのはそこまで。　どこに行ったのかはわからなかったんだけど・・・」

『探査機で次元空間を調べれば、時間はかかるかもしれないけど、見つけられる・・・はずだね』

ネギの言葉に頷き、フィーは端末にキーワードを打ち込んだ。

これで、次元空間に無数に漂う探査機が、総出で『時の庭園』を探し始める。

あとは待つだけ、そう思いフィーは背筋を伸ばした。

『・・・・そういえば、逃げる直前何か言ってなかった？』

「ん～？　・・・・あ、そうだ。　この近くにスクライアの都市が来てるんだった！　挨拶ついでに食べ物とか買いだめしに行こうと思ってたんだっ」

次元の海を進む者や、遺跡の発掘に携わる者なら一度は耳にしたことがあるだろう、スクライア一族の移動都市。

その航路の近くにフィーとネギはたまたま居たのだ。

・・・・そういえば、あの男の子はどうしてるかな。

それに、この船を譲ってくれた親方さんも・・・

最後に会ったのは三ヶ月も前のことだ。

フィーは進路をスクライアの都市へと向けた。

★
★
★

次元の海に浮かぶ巨大な街。

それがスクライア一族が誇る移動都市である。

底の深いお椀に似たその上部には、雑多に積み重ねられた建造物。

そんな街並みを流線型のボディーをしたフィー達の『ミラクル号』が通過していく。

『相変わらずスゴい街だね』

「この街自体がまるごと遺跡なんだもんね。　・・・・・っと、港はあっちだったっけ？」

フィーは機体を港に向かわせた。

と、そんな『ミラクル号』の横を並走するように、巨大な輸送船が接近してきた。

通信が入り、モニターに灰色の髪をオールバックにした初老の男性が映し出された。

「カールおじさん！？」

彼は並走する船の船長であり、フィー達が半年前に随分お世話になった人でもあるのだ。

「お久しぶりですっ」

フィーは嬉しくなって、画面に向かってブイサインをした。

母を探しに宛もなく次元の海に飛び出そうとしたはいいものの、戸籍も何もないフィーに、次元転移の手段がある筈もなく、途方にくれていた。

そんな少女がたまたま出会ったのが、スクライア一族で輸送船を取り仕切るカール船長なのである。

と、画面の向こうでカールに声が掛けられた。

『誰と話しとるんや、カール？』

独特の訛りを有した少女の高い声。

長い黒髪に金色の瞳。

黒ずくめの少女が、通信画面の向こう側に姿を現す。

『ん？　おお、ちょっとした知り合いでな』

黒い少女に返事をし、男はフィーに向き直った。

『紹介しよう。　この子はルナ。　まあ、お前と同じようなもんだ』

フィーは目を丸くすると、意地悪そうに笑みを浮かべた。

「もう、また密航ですか～　気を付けてくださいよね。　管理局に

バレたら逮捕されちゃいますよっ」

『ははははっ　バレなきゃいいのさ、バレなきゃ。　そうだ、この後どうだ？　ルナもちゃんと紹介したいしな』

「ん～　わっかりましたっ　それじゃ、何時ものところで！」

そう約束し、フィーは別れたのだった。

★
★
★

小型の次元航行艇が入港してくる姿をスクライア一族の少年、ユーノスクライアは眺めていた。

・・・・・あの船は・・・

ユーノはその船に見覚えがあった。

三ヶ月ほど前に、この街を飛び出していった一人の少女を思い出す。

・・・・いや、一人じゃないか。

一つの体に二つの魂を持つ、ピンクジャージの少女が頭に思い浮かんだ。

「ありゃ、俺の自信作『ミラクル号』じゃねえか。　あのガキ、帰ってきたのか？」

「あ、親方さん」

腰に手をあて、船を見上げるツナギ姿の男が、ユーノの背後から歩み寄ってきた。

「おう、ユーノ。　いや、発掘隊のリーダー殿と言った方がいいか？」

「もう、からかわないでくださいよ。　僕なんてまだまだです」

意地悪そうな親方の言葉に、ユーノは苦笑で返す。

と言っても、親方の言葉に間違いはない。

つい先日、少年は発掘隊のリーダーに最年少で抜擢されたのだ。

「わるいわるい。　発掘隊の船はもうちょい調整に時間がかかるからな。　あいつに挨拶でもしてったらどうだ？」

「そうですね」

最後に見たフィーの笑顔。

そして、考古学について熱く語り合ったネギを思いだし、ユーノは無意識のうちに笑みを浮かべていた。

★★★

「あっ、ゆーのん！　久しぶり～」

そんな言葉と共に、手甲に包まれた拳がユーノの顔面に突き出された。

咄嗟に展開する障壁。

硬さに自信がある自分のシールドが軋みをあげ、ヒビが入る。

正直、肝が冷えた。

重い手応えが鈍く残った。

・・・・ああ、帰ってきたんだな～

大きなゴーグルに、後ろで縛った肩ほどまで伸びた赤毛。

気の強そうな紅の瞳と、特徴的な頭頂部から跳ねる一房のアホ毛に、

ユーノはそんなことを思った。

「って、何するんだよ、フィー!?　危うく頭がトマト的なことになるところだったよ!?　あと僕の名前は『ゆーのん』じゃなくて『ユーノ』だから!!」

そこまで一息で言い切った少年は、はっと気づいた。

どうも自分はこの少女が相手だと、ペースが狂う。

「あははっ　ごめんごめん、ゆーのん」

「・・・・・もういいよ」

ため息混じりにそう返す。

そう、フィーはずっとこんな感じだった。

・・・記憶って美化されるんだなー

ユーノとフィーの挨拶？が一通り終わると、親方が少女に話しかけた。

「相変わらずだな、おめぇは」

「あ、親方さん。　お久しぶりですっ」

と、いきなり少女の雰囲気が変わり、アホ毛が無くなった。

ペコリと頭を下げる。

「お久しぶりです、親方さん。　船の件ではお世話になりました。
つまらないものですが・・・・・」

お菓子の詰め合わせが、どこからともなく現れ、親方の目の前で浮遊する。

「おう、ネギか！　わざわざすまねえな」

「それと・・・・久しぶり、ユーノ君。　いきなり殴りかかって、ごめんね。　僕は止めたんだけど、フィーが言うことを聞かなくて」

苦笑しながら頭をかくネギに、ユーノも苦笑を返した。

「いいよいいよ。　お陰で、君達が帰ってきたんだって実感出来たから。　今回はどのくらいこの街に滞在するの？」

「そうだね・・・」

顎に手を添え、少女はしばらく考えてから言った。

「フィーの探し物がようやく見つかったんだ。　たぶん一、二週間くらいかな？」

「そっか～・・・・・」

発掘の終了は早くて二週間、遅いと一ヶ月以上にもなる可能性がある。

この不思議な友人たちとは、今回はそれほどゆっくり話す機会は無さそうだ。

「このあとすぐに、発掘隊の仕事があるんだ」

「え？　ユーノ君って、発掘隊に加わってたっけ？」

「ついこの前にね。　・・・・・その・・・・・・リーダーに」

少年の言葉に、少女は目を見開くと一人深く頷いた。

「そっか、ゆーのんの知識なら、なってもおかしくないと思ってたけど・・・・・よかったね！」

微笑む少女の唇が、やわらかく浮かび上がるのをユーノは目にした。

「あ、ありがと」

そう言い返しながらも、自分の鼓動が高鳴るのをユーノは止められなかった。

両親の顔も知らず、スクライアに拾われて幾年月。

ユーノの周りには年上しか居なかった。

そんなとき、ひょっこり顔を覗かせた少女は、少年にとってはじめての同年代の友人だったのだ。

この鼓動の高鳴りが、親愛の情から来るものなのか、それとも別のものなのか、ユーノには判断できなかった。

・・・・・ん？

少し感じる違和感。

・・・ゆーのん？

「って、フィー！？　いつのまに変わったの！？」

「あははっ　照れてるの、ゆーのん？　顔が赤いよ～」

「う、うるさいな。　からかうなよっ」

このあと、さんざん引っ掻き回されたユーノは、船の調整が完了し、発掘現場へと飛び立っていった。

肩に感じていたリーダーとしての責任が、少女との再会で少しだけ

軽くなったように感じたのは、気のせいだろうか・・・？

★★★

「ゆーのんも親方さんも、元気そうでよかった～」

『ふふ、そうだね』

相棒とそんなやりとりを交わしながら、フィーは目的地の店を目指して歩いていた。

ほどなくして、少女は『ラッキーセブン』というスクライア一族が経営する安宿に到着した。

「こんにちは～っ」

木製の扉を気軽に開き、中に入る。

ランタンに照らされた薄暗い店内に入ってすぐ横に、フロントがあった。

バーのカウンターも兼ねる場所だ。

そこに茶色の長髪をポニーテールにし、エプロンを着た女性がいた。

名前はカノン。

この店を切り盛りする女将さんだ。

「あら～、フィーちゃんじゃない。　いらっしゃ～い」

おっとりした口調の女将さんは、普段は閉じて見える細目を開き、口に手を当てて驚いた。

フィーは軽く手甲に包まれた手をあげる。

「えーと、カールおじさんは来てる？」

「カールさん？　ああ、奥のテーブルにいるわよ～　黒髪の可愛い子を連れ込んじゃって～　ふふふ～」

何を考えているのか顔を赤らめる女将さんに、フィーは苦笑して店の奥へと向かった。

「お、やっと来たな、フィー、それにネギ。　どうだ先ずは一杯」

灰色の髪をオールバックにした初老の男、カールがワインを注いだグラスをフィーに突き出した。

そんなカールに脇から突っ込みが入る。

「いや、だからダメやて！　ウチもその子も、どう見ても未成年やからね！？」

十一、二歳ほどの、フィーが画面越しに見た黒いドレスに同色の外套を羽織った少女だった。

ツインテールの黒い長髪と、金色の瞳が印象的だ。

そんな少女の突っ込みに、カールは渋々と言った感じに注いだワインを飲み干した。

「アンタがフィーに・・・・ネギやったか？　二重人格みたいなもんって、カールから聞いとるよ」

手を出し握手を求める、黒い少女。

「ウチはルナや。　よろしく！」

「フィーよっ　よろしくね！」

強く握り返し、いつの間にかフィーとルナの力競べへと握手は展開していった。

★
★
★

「そしたらな、なんとコイツ俺の目の前で持ち金をそのガキどもに分けちまったんだよ！　いい奴だろ！　思わずぐっと来ちまったよ！」

「ちょ、カール！　恥ずかしいからその話は無しやって言ったやんか」

かなり酔いが回ってきたカールはグラスにではなく直接ビンから口に酒を注いでいた。

冷たい果汁のジュースをフィーとルナは片手に、話題を出しては夕食がわりのつまみを食べる。

・・・なんかいい人っぽいな。

そんなことをフィーは思った。

「ウチん家はちっさい孤児院でな。　身寄りのない子供をぎょーさん引き取っちゃ、何時もいつもギリギリで暮らしとる」

ルナはジュースを飲み干し、瞳を閉じて何かを思い出すように言った。

「ウチも十二やし、稼いだらんとどうにもならん思ってな・・・・・」

「へぇー　どんな仕事？」

その質問にルナは瞳を開けてフィーを見た。

一瞬、瞳の奥に何かを感じた。

「・・・・・秘密や。　女は秘密を着飾って美しくなるんや！」

「女って・・・　あんた、わたしと三、四歳ぐらいしか変わらないじゃん」

そうするうちに、あっという間に時間は過ぎていった。

「っと、いけねえ。　そろそろ出発しねえと間に合わねえな」

カールが腕時計を見て、そう呟いた。

「ん、それじゃ、ウチらもお別れや」

「カールおじさんの船に乗ってくんだっけ？」

フィーの言葉に頷き、ルナは背を向けた。

「縁があればまた会うこともあるやろ。　それまで達者でな～」

「それじゃあまたな、フィー、ネギ」

そんな二人にフィーは手を振って別れた。

「・・・・・不思議な人だったね。　そういえば、なんで表に出てこなかったの、ネギ？」

『・・・いや、何でもないよ。　ただ機会を逃しちゃっただけさ』

★
★
★

コックを捻ると、ぬるい温水がシャワーから噴き出した。

普段はゴムヒモで後ろにまとめている肩ほどまで伸びた赤毛が、フィーの裸体にはりつく。

『ラッキーセブン』に用意された一室。

その小さなシャワールームで、フィーは今後のことを考えていた。

母親への道がついに開かれようとしている。

頭では理解しているのだが、心がついてこなかった。

次元探査機管理衛星『アドヴェンチャ』へのアクセスによる、超広域次元探査。

一週間から二週間、おそくとも三週間の内には、フィーが探し求める母親、プレシア・テスタロッサへの道が開かれるだろう。

俯いた紅の瞳が排水溝をぼんやりと見つめる。

・・・・・どうしよう。

頭を巡るそんな言葉。

お母さんはどうしてるのだろう・・・・・

もしかして、自分は手遅れだったりして・・・・・

実は勘違いで、本当は自分が思ってるようなことをやってないんじゃ・・・・・・

いや、そもそも・・・・・・

「・・・・・どうしよう」

そんな呟きが、フィーの唇から溢れて湯気の中に消えていく。

『やらないで後悔するより、やって後悔する』

フィーを後押しするように、ネギが言った。

「・・・ネギ？」

『それが、僕の相棒のポリシーだった筈だけど？』

顔を上げる。

シャワーでごしごしと乱暴に顔を洗う。

「よしっ！」

声を上げる。

わかりもしないことをグダグダ考えるなんて、わたしらしくない。

フィーはぱんっ、と自分の頬を強く叩き、活を入れた。

相棒への感謝は口に出さない。

と言うか、なんだか悔しかった。

どうやってお返ししてあげようかを考える。

「ふふふ・・・・・」

少女の頬に笑みが宿った。

「そう言えば、ネギ。　わたしの裸を見て何とも思わないの？」

返答に困って悶え苦しむがいい～という思いがこもった意地悪な質問。

それをネギは、

『うん？　まあ、こんな外見でも、僕はけっこう年を食ってるからね。　自分の子供と一緒にお風呂に入る気分だよ』

あっさりと打ち返した。

「・・・・・」

『・・・・・』

「・・・負けた」

『・・・十年早いよ』

「・・・・・寝よ」

『・・・・・そうだね』

そんなこんなで、激動の一日?は幕を閉じたのだった。

第二章　波瀾万丈

気を付けて行ってこいよ、という親方の言葉にフィーは元気に頷き、腕を振った。

スクライアの移動都市に来てから四週間。

予定よりも時間はかかったが、ついに探査機の一つが『時の庭園』を発見したのだ。

『ミラクル号』の操縦席に腰掛け、フィーは呟いた。

「結局、ゆーのんは帰ってこなかったなー」

最年少で発掘隊のリーダーに抜擢された少年を思い出す。

・・・・ま、予定は予定でしかないもんね～

思い直し、少女は操縦桿を握る。

次に少年と会うのは何時になるかわからない。

けれど、少女には大切な用事があるのだ。

帰ってくるのを待ってはいられない。

「さ～てと、相棒・・・」

『うん、フィー・・・』

「『行こう！』」

不安と期待を胸に抱き、フィーは船を発進させたのだった。

★
★
★

第九七管理外世界。

魔法の存在し得ない、この世界の街、海鳴市に結界が張られていた。

夜の街を包み込むそれの中に、二人の少女が佇んでいる。

「この間は自己紹介できなかったけど・・・・・　わたし、なのは。
高町なのは。　私立聖祥大付属小学校三年生」

そう言ったのは、肩まで伸びる茶色の髪を左右でまとめ、魔導師の杖『レイジングハート』を携えた、純白のバリアジャケットを纏う少女。

「・・・・・・」

そして、無言で対峙するは黒衣の少女。

金の長髪をツインテールにまとめ、紅の瞳に憂いを帯びた少女は、金色の魔力光が迸る大鎌『バルディッシュ』をまるで死神の如く構える。

白と黒、二人の少女は合図もなく唐突に動き出した。

★★★

手持ち無沙汰なフィーは、もそもそと保存用のブロック栄養食を口に運んでいた。

目的の『時の庭園』まで、既にマニュアルからオート操縦に切り替えてしまったため、とくにすることがないのだ。

精神世界で相棒のネギと鍛練するのも一つの手だが、あいにくとそんな気分じゃない。

もそもそ。

「・・・・・・」

もそもそもそもそ。

「・・・・・・」

もそもそもそもそもそもそもそもそ

「っだあああああ～ーーーっ！！！」

なんだか知らないが、いきなり叫び出した。

頭を抱え、悶えだす。

『どうしたの、フィー？　グリンピースを間違って食べちゃったような顔して』

「だって、ついに此処まで来ちゃったんだよ!?　悩んでもしょうがないのはわかるけど・・・・・ああーっ　ううー～っ」

今度は腕組みをして、貧乏ゆすりを始めた。

少女の心を表すように、頭のアホ毛もあっちへフサフサ、こっちへフワフワ、忙しなく動き回る。

思考が空回りを続ける。

どうすればいいの？

・・・・どうしようもない。

何故なら、進むためにはお母さんと会って、どんな状態かを知らないといけないから。

母との対面が間近に迫った今、曖昧だった不安が急に輪郭を整え始めたのだ。

と、その時、

「『っ！？』」

ズシンッ、と船体が大きく揺れた。

「って、ええ～！？　わたしの貧乏ゆすりに船が耐えられなかったの！？」

『そんな訳ないでしょ！　対次元震用障壁、全力展開！　急いでっ！』

「うえぇぇえ～！？」

パニクりながらも、ネギの言葉にフィーは船を守るシールドを全力展開した。

アチコチから発せられる警報。

『危険』の二文字がドアップで船の外部を映す、光学モニターに表示されている。

「なになに、なんなの！？　きゃっ！？」

『くっ、空間の歪みが来るよ！　衝撃に備えて！』

ガクン、と船が揺れたと思うと、『ミラクル号』が回転を始めた。
船内のアチコチから煙が吹き出すが、フィーにはどうしようもない。

「うっそだ～っっっ！！　なんでこんなことが～っ！？」

『あーも～なんだかなー・・・・・』

次元空間に開いた孔の先に、何処かの街の美しい夜景が顔を覗かせているが、それを眺める余裕などある筈もない。
少女を乗せた『ミラクル号』は洗濯機の中で洗われる衣類の如く、回転しながら落ちていった。

★
★
★

「フェイトちゃん、大丈夫かな・・・・・」

すっかり暗くなってしまった帰り道で、少女がそう呟いた。

肩まで届く茶色の髪を左右でまとめた九歳の少女だ。

彼女の名前は高町なのは。

平凡な小学三年生を自称する少女だが、今はフェレットであるユーノ・スクライアからすると、平凡どころかまさにその対極をいく天才・・・いや、天災だった。

魔法が漫画やアニメのなかにしか存在しないこの管理外世界で、魔法を使っている時点で十分普通じゃない。

しかも、その魔力が自分の見立てによると、管理局でも五%に満たないＡＡＡランククラスなのだから、もはや乾いた笑いしか出てこない。

「両手の怪我は大したことなさそうだったから、明日にはジュエルシードを探してる筈だよ」

ユーノがなのはに出会ってから半月以上が過ぎていた。

輸送中の事故によって、この世界にばらまかれた二十一個のロストロギア『ジュエルシード』。

責任を感じて、一人この世界へやって来たユーノだったが、予想以

上の暴走体の強さと、土地の魔力が合わなかったせいもあり、封印に失敗。

なのはが念話を聞きつけ、駆けつけてくれなかったら死んでいたかも知れない。

全くもって予想外のことが連続している。

一つ目はなのはの異常ともいえる才能。

魔法にふれて半月足らずで、砲撃魔導師としてのスタイルを確立しつつあるのは、なんの冗談だろうか？

二つ目はジュエルシードのもう一組の探索者、フェイト・テスタロッサとその使い魔、アルフ。

おそらくはトリプルＡクラスの魔力量、そして電気の魔力変換資質。

こんな管理外世界の一つの町に、二人もＡＡＡクラスの魔導師が揃うというのは千歩譲っていいとして、その顔がフィーそっくりなのはどういうことだ。

最初に遭遇したとき、変装して自分を追ってきたのかと、思わず目を擦ってしまった。

・・・・まあ、フェイトの方が少し背が高いし、髪の色も違う。

そしてなにより性格が全く違ったから、すぐに別人だと分かったけど・・・

もしかして、フィー・T・スプリングフィールドの『T』は『テスタロッサ』なのだろうか？

何れにせよ、これ以上ジュエルシードを奪われるのは不味い。

先の戦闘で起こった次元震。

まさかアレ程の力があんな小さな宝石に秘められていたなんて・・・・

予測のできない未来に、最年少で発掘隊のリーダーに抜擢されたユーノの頭脳も煙を出し始めた。

「・・・・・ふう」

なのはに気づかれないように、小さくため息を吐いた。

なのははなのはで、どうもフェイトを敵として見れないようだ。

ユーノとしても、友人と同じ紅の瞳に悲しみが宿るのは、あまりいい気分ではない。

・・・・どうにかならないかな・・・・・

天空に煌めいた一条の流星に、ユーノは願わずにいられなかった。

★★★

一方、ユーノが見上げた流星では、フィーがぐるぐると目を回していた。

「あうあうあう～！？　って、やばいーっ！！！」

『い、生きてるんだよね？』

頭を振って、操縦桿を握ったフィーは、ディスプレイに表示される警告の嵐に目を見開いた。

―　警告、外部光学センサー機能不全

―　警告、左舷推進機能停止

―　警告、右舷推進出力低下

―警告、次元航行システム機能不全

―警告、動力炉・・・

―警告、海面衝

―警告

―け、

―k

「だーっ　うっさい！　警告警告わかってるよっ　親方さんの自信作を舐めんじゃないわよっ！！！」

ガタガタと揺れる機内で、フィーは必死に機体を立て直そうとする。

ネギに変われば空を飛ぶことはできるし、フィー自身も魔法で足場を作って、脱出することは出来る。

しかし、このミラクル号はフィー唯一の移動手段兼住処。

逃げ出すなんて論外だった。

『逆噴射フルスロットル！　それに不可視モードを！！！』

「おっけーっ　いっけぇえええええっ！！！」

フィー達の眼前には月光を反射し、煌めく海面。

通常の船ならひとたまりもないだろう。

しかし、この船はスクライアが誇る整備士、親方さんが血と汗と涙を流して造り上げた最高傑作。

その名も奇跡を起こす船、ミラクル号！！！

それに不可能など・・・・・

「・・・あ、無理っぽい」

海面まで残り十数メートルで、フィーが呟く。

『大丈夫。　この機体、陸海空宙次、オールマイティーだから』

無念。

フィーとネギは暗い暗い夜の海鳴沿岸の海のなかに沈んでいきましたとさ。

おしまい。

「『いや、生きてるからね!?』」

幕間　骨肉之親

第九七管理外世界から程近い次元空間に、その城、いや要塞『時の庭園』はあった。

禍々しさと静粛さが同居したそこに、母の声が響く。

「あなたには失望したわよ、フェイト」

苛立たしげにそうこぼす母親の姿に、金髪の少女フェイトは顔を俯かせた。

・・・・また、母さんを悲しませた・・・・・

自分は大した数の古代遺物を集めてもいないのに、何を期待していたんだろう。

床には箱ごと潰されたお土産のケーキ。

「早く行きなさい。　私にはどうしてもジュエルシードが必要なの」

「母さっ！？」

炸裂音。

足元に拳大の穴が穿たれていた。

「・・・・・早く、行きなさい」

怒気を宿した最終警告に、フェイトは歯を食い縛り、ゆっくりと背を向けて、広間から歩み去った。

悔しかった。

悲しかった。

少女は自身の無力を噛み締める。

母親を笑顔にすることすら出来ない自身の無力を・・・・・

・・・・母さん・・・・・

最後にそう呟き、少女は時の庭園から去っていった。

★★★

部屋の一室で、アリシアとリニスは遊び疲れたように居眠りするような姿でいた。

先行していた医療スタッフが、携帯用の酸素マスクを手に無言で俯く。

プレシアは寮の部屋にも万が一に備えて結界を張っており、爆発や災害がアリシアやリニスに被害を及ぼさないように気遣っていた。

だが、酸素に反応する微粒子状のエネルギーはそんな結界を無視し、付近の酸素を喰らい尽くした。

さらに、肺に吸い込まれた微粒子は血中の酸素にすら反応する。

おそらくは数呼吸。

苦しいと感じる間すらなかった筈だ。

プレシアは娘と飼い猫を見下ろし、呼吸が出来なくなるような感覚に襲われた。

目の前の光景を理性は淡々と処理していくが、感情がそれを全力で拒む。

何が起こったのか、現実を受け入れることが出来なかった。

ふと、テーブルを見た。

子供用の画材が散らばるその脇に、娘のスケッチブックが落ちていた。

自分が見せてと頼んでも、恥ずかしがってアリシアはなかなか見せてくれなかったスケッチブックだった。

止まった思考のままそれを手に取り、開いた。

子供らしい、拙い絵が顔を覗かせる。

お菓子や、リニスをスケッチしたらしい絵。

だが、ページのほとんどを埋めるのは、ある女性の絵だった。

『おかあさん』と脇に書かれた、優しく微笑む自分の絵・・・・・

視界が揺らいだ。

目の奥が熱い。

プレシアは自分が涙を流していることに、ようやく気づいた。

声にならない声をあげる。

寮の一室に響くそれは、すでに声ではなく、慟哭だった。

★
★★

去っていく金髪の少女を尻目に、一人の少女が広間に足を踏み入れた。

肩にかかる程度まで伸びた白髪を揺らし、何故か着ると落ち着く男物の学生服のズボンのポケットに片手をつっこむ。

玉座の間の華奢な椅子に腰掛けるプレシアが呟いた。

「・・・・妹が欲しい・・・・・そう、言ってたわ」

白髪の少女が立ち止まる。

「・・・誰がだい？」

「その肉体のオリジナルが・・・よ。　・・・・・ああ、あなたにはアリシアの記憶が欠落していたわね」

「・・・・自分自身の記憶もだけどね。　覚えているのは、技術だけだ」

そう言って、人形のように白く透き通った肌をした自分の手のひらを白髪の少女、サーティは一瞥した。

「ふふ、・・・あなたの肉体は半分以上・・・・・人から、外れてい・・・わ。　精神と肉体の、関係性について・・・・・暇があれば、調べてみた・・・」

言葉が途切れる。

「プレシア・・・？」

どうした、と言いかけてサーティは絶句した。

突然、プレシアが体を震わせて俯いたのだ。

両手を胸に指が食い込むほどきつく押し付ける。

体をくの字に曲げて、苦しげに呼吸を繰り返す。

懐から数粒の錠剤をとりだし、飲み込んだ。

「！」

椅子から倒れそうになったプレシアの体を駆け付けたサーティが支えた。

無言で治癒魔法をかけようとするサーティをプレシアは押し留めた。

「必要・・・ない・・わ」

「しかし、」

「無駄なの・・・よ。　すぐに治まるわ」

言葉通り、彼女は十数秒足らずで回復した。

何事もなかったように、サーティの腕から立ち上がる。

・・・・今の感触は・・・・・・

プレシアの体を支えた手を見つめる。

常人には感じ取れない程の僅かな違和感をサーティは感じたのだ。

「プレシア、君は・・・・・」

「流石ね。　少し体に触れただけだと言うのに」

「・・・・・」

サーティは目の前に佇む彼女に納得がいかなかった。

「いいのかい？　彼女が君の娘の妹のようなものなら、どうしてもっと優しくしてやらない」

つい先程の一件を思い出す。

お土産として持ってきたらしいケーキを踏み潰し、足元に魔力弾を放って、ロストロギアを催促したのだ。

「あれでは・・・・君は嫌われるばかりだよ？」

「・・・・それでいいのよ」

プレシアがわずかに微笑む。

「すべてが上手く行ったとしても、最終的に私は広域指名手配の犯罪者になるわ。　・・・・あの子の人生はあの子に託す。　はじめから捨て駒だったと見なされれば、管理局でもそう悪い待遇は受けないでしょ」

「・・・・・」

・・・・・なんて不器用な・・・・・・

サーティは心の中で呟いた。

「それに、フェイトには悪いけど、アリシアの命の方が遥かに重いのよ。　それこそ、次元世界すべてを天秤にかけても・・・・・ね」

しかし、だからこそサーティは思ったのかも知れない。

「私は必ずアリシアを蘇らせてみせるわ」

彼女になら、手を貸しても構わないと。

「・・・・・交わした約束を果たすために・・・・・・」

幕間　骨肉之親（後書き）

次回の投稿は１８日の２１時です。

また、投稿が遅れているもう一作『次元世界最強の弟子』はＥｐｉｓｏｄｅ?が終わり次第、再開していきたいと考えております。

第三章　奇想天外（前書き）

少し遅れましたが更新です。

第三章　奇想天外

『・・・・・じゃあやろうか、ネギ君』

『・・・・・・』

目の前に佇む白髪の少年、フェイト。

冷静な頭脳と強大な魔力をもつ、『完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）』の幹部にして、自分の宿敵（ライバル）。

・・・・・ああ、夢か・・・・・・

繰り広げられる死闘を眺め、そう思った。

世界を救える筈だった戦い。

あと一歩で、救えなかった戦い。

・・・・・もう、過去のことか・・・・・・

苦笑する。

思えばこの戦いを境に、自分は本当の意味で世界の残酷さを思い知ったのだろう。

景色がボヤける。

もう相棒が目を覚ますようだ。

最後にふと思った。

死ぬと思った自分は、こうして存在している。

なら、あのとき消滅した彼は・・・・・

★
★
★

四月二十七日、早朝。

高町なのはが姉の美由希の練習を道場で見学している頃、ようやくフィーは海鳴の街に到着していた。

「う～　う～　喉かわいたよ～」

『がんばって、フィー。　さっき見かけた看板が正しければ、あと

少しで公園が見えてくる筈だから』

ネギの声に励まされ、ふらふらと赤毛の少女はアスファルトの道を行く。

ちらほらと出勤するスーツ姿の会社員や自転車をこぐ学生の姿がうかがえはじめる

そんななかで、ピンクジャージの少女は、下駄を履いていることを無視すれば、早朝のジョギングでヘトヘトになった小学生の女の子に見えなくも・・・・ないかもしれない。

『・・・・にしても最悪。　な～んで次元震なんか起きるわけ？　船は修理に時間かかるし・・・』

『いや、でもあの高度から海面に叩きつけられて、自己修復出来る程度で済んだこと自体が奇跡だとおもうよ。　浸水も幸い貨物室だけで済んだしね』

『だーっ！　それが大問題なんじゃんっ　食料はほとんど海の藻屑だし・・・・・』

そうこうしているうちに、フィー達は小さな公園に到着した。

鉄棒や滑り台、ブランコ等が立ち並ぶそこには、人っ子一人いない。

「！　すいどう発見！　とっつげきーっ」

★
★★

「お嬢さん、こんなオモチャのお金は使えませんよ？」そう言われて、フィーはマク〇ナルドで門前払いを受けた。

太陽が真上からさんさんと照らす商店街の道をテクテクと歩く。

きゅ～、と腹の虫の鳴き声を聞いて、少女は立ち止まった。

「う・・・うう・・・・・」

ご飯が食べたい。

でも、食べられない。

何故なら・・・・・

「お金が使えない・・・・・なんて～～～～」

『まあ、少し考えればわかることだったね』

「なんで気づかなかったの、ネギ！　目の前に食べ物があるのに我慢なんて～・・・・・」

道のど真ん中で虚空に向かって喋る少女。

空腹感に念話を使うという選択肢が思い浮かばなかったのだ。

『う～ん、なんと言うか、僕が前に居た世界とそっくりでね。　通貨のことまで考えがまわらなかったんだ』

「ふーん・・・・・」

お惣菜屋のコロッケや唐揚げに視線を釘付けにしたフィーは、頭を振るって再び歩き出す。

「もしかして、ネギの故郷がこの世界にあるの？」

『・・・・多分ないと思う。　似たような場所はあるかも知れないけど、そこは僕の故郷とは呼べないだろうね。　僕の世界はこっちで言う、質量兵器と魔導技術の戦争があったんだ。　いろいろあって、終戦したんだけど、世界中に魔法の存在が認知されたんだ。　ここまで歩いてきて、魔法の魔の字も目にしないってことは・・・・・』

「・・・・・もしかしたら、ネギは平行次元移動してきたのかも。　ま、詳しくはわからないけど」

『そうかも知れないね。　・・・ところでフィー』

「？　なによ」

『お腹空いてるところ悪いけど、少し運動しようか』

妙な言い回しのネギに首を傾げるフィーだったが、背後からかけられた声で直ぐ様理解した。

「ちょっと君、親御さんはどうしたんだい？」

ここで少し状況を整理しよう。

場所は商店街。

時刻は平日の昼頃。

フィーの容姿は八歳程の小学生の女の子。

一人、道の真ん中でブツブツ呟いているように見える。

・・・・・さて、ここから導かれる答えは？

『・・・・・おまわりさん？』

『Ｅｘａｃｔｌｙ（そのとおり）　このままじゃ補導されるね』

「え、エ～ト、オカアサンは～」

制服を着た警官の背後を指差す。

けいかんＡ　が　よそみ　を　した。

フィー　は　にげだした。

★
★
★

「・・・・・ふう」

オレンジに染まる木々。

カラスの鳴き声が頭上から木霊した。

キシキシと鎖の擦れる音をたて、少女はブランコを大きくこぐ。

勢いにのって飛び出して着地。

体操選手のようにポーズを決めたところでフィーは息を吐いた。

海鳴臨海公園の遊具広場。

森林に囲まれたこの場所には、つい先程までサッカーをしていた少年達を最後に、人影が途絶えていた。

少女の次元航行船ミラクル号は、光学迷彩の不可視モードで山間部にて現在、自己修復中。

この世界から動くに動けなかった。

せっかく母親との対面へと向かって腹を括っていたフィーとしては、どうしても気が抜けてしまう。

アホー、アホーとバカにするようなカラスをフィーが見上げたとき、訝しそうなネギの声が頭に響いた。

『・・・・・なんだか、変な魔力を感じない？』

そんな言葉にフィーは首を傾げる。

ここは管理外世界で、しかも魔法の存在が認知されていない。

そんな場所で魔力を感じるなどあり得るのかと思ったのだ。

「気のせい・・・じゃないよね」

相棒の感覚は自分より鋭い。

今までもその鋭さに幾度となく命を救われてきた。

少女は徐々に魔力を練り上げ、何が起きても対応出来るように警戒を強めた。

・・・・・ついてない・・・・・

原因不明の次元震に遭遇するは、船は故障し買いだめした保存食は海の藻屑、お腹は空くし、トドメに魔法がない筈の世界で魔力反応。母親に会いに来ただけなのに、このコンボ技はいったいなんなのだろう。

すでに魔力反応はフィーにも感じ取れるほど大きくなってきている。

嘆息がもれる。

『・・・・ネギ、この魔力って』

『うん。　人間が発する魔力じゃないね。　なんだろう・・・・・次元干渉型のロストロギア・・・？　でも、この世界に魔法文化は存在しないハズ・・・っ』

木々の根本から一条の柱が天に昇る。

青白い光の柱と共に、爆発的に高まる魔力。

・・・・青い、宝石？・・・・・

眼前の光の中に、少女が元凶を見いだすのと同時、大木の幹に宝石が埋もれ込むように消えた。

メキメキと嫌な音を立て、木が化け物と化す。

あまりの空腹感に幻覚を見ているのかと目を擦るも、巨大な木の化け物は消えてくれない。

「・・・・・なんだろう、頭が痛くなってきたんだけど」

『・・・・・僕もだよ。　おそらく、願いを叶える・・・・・とかそんな感じの効果があるロストロギアなんだと思うよ・・・・・たぶん』

あまりの常識外れな状況に、フィーはため息を飲み込み拳を構えた。

両手首にしたブレスレットに魔力を流し込みデバイスを機動。

瞬時に鈍色の手甲を装着する。

「さーてと、よくわかんないけどぶん殴って・・・・・？」

視界の端に、見覚えのあるフェレット登場。

思わず駆け出そうとした足が止まる。

・・・・・なんでこんなところに居んのよ、ゆーのん・・・・・

『あ、ユーノ君だね』

そんな相棒の声が、妙によく頭に響いた気がした。

★
★
★

「えっ？」

自分は今、ひどく間抜けな顔をしているだろう、とフェレットに変身している少年、ユーノ・スクライアは思った。

それも仕方ない。

特徴的な赤毛に、ピンクのジャージ。

数少ない同年代の友人、フィー・T・スプリングフィールドが目の前に突然現れたのだから。

少女も驚いているのか、ユーノを見つめ・・・・足元の石に躓い

て転んだ。

「へぴゅっ！！？」

気の抜けそう叫び声にユーノはこれが現実なのだと悟る。

フェレットの小さな背にフィーとは違う、少女の高い声がかけられた。

・・・・・なのは！・・・・・・

やはり、魔力を察知して駆けつけてくれたようだ。

「ユーノ君！　・・・って、フェイトちゃん！？　・・・・・じゃない。　え、えーと、どちら様？」

あ、やっぱり見間違えたか、とどうにも回転の悪い頭にそんな言葉がポツンと浮かぶ。

・・・・・フィーとフェイトって、やっぱり似てる・・・・・・

いてて、と鼻をおさえて立ち上がったフィーの顔を改めて見たユーノ。

前々から思っていた通り、二人の顔は一卵性の双子と言われれば信

じてしまうほどそっくりだった。

・・・・・って、それどころじゃなかった・・・・・

「なのは！　この子は僕の知り合いだから、とにかく今はジュエルシードをお願い！！」

「え、あ、うんっ！」

戸惑いながらも頷き、少女は木の化け物に向かっていった。

頭を振るって回転が悪い頭脳を再起動させ、ユーノはフィーに向き直った。

「フェイト・・・・・？　まさか・・・・・」

腕を組み、ブツブツと独り言をこぼす赤毛の少女に話しかける。

「フィー？」

「・・・・・」

「ど、どうしてこんな世界にいるの？　確か用事があるんじゃなかったっけ？」

「もしも～し・・・・あの、フィーさん？」

次の瞬間、前髪に隠された瞳がピカリと輝いたのをユーノは見逃さなかった。

「ゆーのんっ！！」

「ぬおぉぉおえっ！？」

全力で反らす体。

霞む速度で振るわれた拳が、体毛を数本刈り取っていった。

「ちょっ、あぶっ、危ないってば！！！」

「この、この、この、この、この～～～！　あんたね！？　なんかヘマしたんでしょ！　わたしのごはんを返してよっ　あんたを丸焼きにして喰ってやるんだからーっ」

それは小動物のなせる本能だったのだろうか。

剛速でせまる拳の雨をユーノはひらりひらりと木の葉を思わせる動きで回避していた。

何気にこの世界に来て、一番死にそうっ!?

ジュエルシードの封印に失敗した時より危ないんじゃ・・・・・・

直撃コースの拳がスローモーションで迫る。

・・・・あ、死んだ・・・・・・

全身を襲う暴風。

一センチ手前でピタリと拳が止まった。

よく見ると、フィーのアホ毛がいつの間にか無くなっていた。

「いやー、ごめんごめん。　フィーの暴走を止めるのに、手間取っちゃったよ。　ユーノ君、生きてる?」

・・・・あ、ありがとうネギ君。

出来ればもう少し早く出てきて欲しかったよ・・・・・・

★
★
★

「なるほど～、願いを叶える石、ジュエルシードねー」

「うん。　まあ、あんな風にまともに願いを叶える訳じゃないんだけどね」

ユーノに簡単に事情を説明させたフィーは頭の後ろで手を組み、眼前で繰り広げられる二人の少女と木の化け物の戦いを観戦していた。

制服を改造したような白いＢＪを纏う、現地協力者の高町なのは。

まだまだ粗さは目立つものの、その動きはつい最近まで魔法の存在を知らなかった素人にはとても見えない。

そして・・・・・

「フェイト・テスタロッサ・・・・・」

「そう。　もう一組のジュエルシードの探索者。　フィーは何か知

らない？　すごく顔が似てるから、初めて遭遇した時は見間違えちゃったよ」

「え、うーん・・・・わかんない。　次元世界には自分そっくりな人間が三人は居るって言うし」

「・・・・・そっか」

適当に誤魔化すが、付き合いのあるユーノには見透かされてそうで、フィーは冷や汗を垂らした。

だが、ユーノはアルフという狼型のフェイトの使い魔を牽制するためか、あまり突っ込んでは来なかった。

フィーの脳裏に初めて見た、母の背中の記憶がよぎる。

・・・・フェイトに探させる・・・・・・

この事件、裏には母が、プレシア・テスタロッサが必ず存在すると、少女は確信した。

思わずこぼれる笑み。

直後、

「ディバイン・・・・・」

なのはの持つデバイス『レイジングハート』の先端に展開される環状魔法陣に、まばゆく輝く光球がチャージされ、膨れ上がる。

「サンダー・・・・・」

フェイトの足元に魔法陣が展開され、放電を始める。

頭上に雷鳴が轟いた。

そんな二人を眺め、フィーは一瞬で直射砲撃と広域雷撃魔法だと看破した。

・・・・おお、これは・・・・・・

それなりに次元世界を巡ってきたフィーでもなかなかお目にかかれない魔力。

「バスターッ！」

「レイジーッ！」

白一色に染まる視界。

光の奔流に呑まれた化け物は、一溜まりもなく消滅し、宙には浮遊するジュエルシードが残された。

「なんつー魔力。　もしかして、トリプルＡクラス？」

「うん、そうみたい。　僕も信じがたいけどね」

不気味な振動を繰り返す宝石。

・・・・もしかして、封印出来てないの？・・・・・

嫌な考えが浮かぶが、すでに二人は接近し、互いの獲物を振り下ろそうとしていた。

さしものフィーでも、この距離では間に合わない。

ユーノの話が本当ならば、次元断層が発生してもおかしくないのだ。

思いっきり叫ぼうとしたところで、ネギが呟いた。

『・・・・・誰か来る』

「えっ？」

一瞬遅れてフィーも気づいた。
次元航行船などがゲートを開くとき特有の空間が揺らぐような感覚だ。
水色に発光する球体が二人の間に出現し、
「ストップだ！」
黒一色といっていい少年が飛び出してきた。
デバイスを握る二人の腕に素早くバインドをかけた技量はなかなかなのものだ。
「ここでの戦闘は危険すぎる！」
驚きに二人の動きが止まっているうちに、黒い少年はなのはとフェイトに視線を向けつつ名乗った。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。　詳しい事情を聞かせてもらおうか」
・・・・・面倒なことになってきたなー・・・・・

ため息を飲み込み、フィーは今後の行動に考えをめぐらせた。

★★★

「この、娘は・・・・・・」

サーチャーによって映し出されたモニター越しに、赤毛の少女を凝視する。

間違いなく、プロジェクトFの一体だ。

近くの小動物の言葉をひろい、名前を割り出す。

・・・・・フィー・・・・・・

すぐに脳裏をよぎったのは『フィフティス』という、魔力を持たない個体だった。

髪の色は異なるし、魔力もあるが・・・・・

「そう、・・・・・そう言うこと・・・・・」

止めに来たのだろうか？

施設に残された資料を見つけているなら、そうなのだろう。

そして現れる黒い少年。

管理局に嗅ぎ付けられるのは時間の問題だったが、いささか早すぎる。

「・・・・悪いわね、フィー。　私は止まるわけにはいかないのよ」

女性の呟きが暗い広間に溶けて消えた。

第四章　胡蝶之夢

人形の夢を見ることがある。

何処とも知れない暗闇の中を数えきれない人形と一緒に漂う夢・・・・

人形はどれも自分そっくりで、動き出さないのが不思議なくらい精巧に作り込まれている。

ただ顔だけがない。

本来、顔があるべき場所は影になっていて目も口も見えない。

人形の一つが目の前にゆらゆら近づいてくる。

胎児のように体をまるめ、一糸纏わぬ姿でフェイトに迫ってくる。

両手で押し退けようとすると、それは何の抵抗もなくバラバラに砕けた。

視界が紅く染まる。

笑い声が聞こえる。

いつの間にか人形には顔がある。

無機質な瞳が自分を見つめ、裂けるほど歪に開いた唇からは、ケタケタと笑い声がこぼれる。

驚いて、後ずさる。

すると、背中に冷たいナニか。

振り返る。

自分そっくりの顔があった。

笑い。

わらい。

ワライ。

フェイトは走った。

人形を押し退けながら、全身を紅く染めながら・・・・・

遠くに見える母の背中。

叫ぶ。

口から声が出ない。

それでも叫ぶ。

母は気づいてくれない。

こっちに見向きもせず、見つめるのは大きなガラスの筒。

その中には自分そっくりの人形・・・・・・

・・・・人形？・・・・・・

あれは人形なのだろうか？

体が突然、動かなくなった。

人形のように闇に漂う。

「・・・・・ッ」

そして気づいた。

自分も人形の一つだったことに。

『・リシア・・・私の可愛いアリシア・・・・・』

フェイトに背を向けプレシアはガラスの筒に額を押し付ける。

微かに聞き取れた言葉には、フェイトの名前は出てこなかった。

自分の体が闇に溶けていく。

そこで、目が覚めた。

★
★★

透明感あふれる通路に三人分の足音が木霊する。
壁も床も天井も、光沢のある金属でできた広い廊下。
その上を行くのは二人の少女と一匹のフェレット、そして執務官を名乗る一人の黒い少年。

少年は迷いのない足取りでフィー達がいま居る船、次元航行艦『アースラ』の内部を案内していく。

そんな中、赤毛の少女フィーは周囲に聞き取られないように小さくため息を吐いた。

・・・・捕まったらどうしよう・・・・・

そんな言葉がグルグルと頭をめぐる。

運が悪ければ半年前の件がバレて、逮捕もあり得るのだ。

ノリに身を委ねて着いてきたのが悔やまれる。

突如現れた少年、クロノ・ハラオウンによって戦闘は中断。

フェイトは使い魔アルフの援護と、なのはが庇ったことにより逃走に成功。

事情を聞きたいという少年の言葉になのはとユーノが頷き、フィーもその流れでアースラへと転移し、今に至る。

・・・・まあ、今さら後悔してもしょうがないよね・・・・・・

ゆっくりと深呼吸して心を落ち着ける。

広域指名手配されている訳ではないのだ。

それに万が一手配されていて、自分のことがバレたとしても荒療治で切り抜ければいいのだ。

フィーには無理でもネギなら不可能ではないと思う。

侵食が進むことになるが、闇の魔法(マギア・エレベア)も使えばどうとでもなるだろう。

それでも無理なら・・・・その時考えればいい。

と、フィーの視界の端に落ち着きなく周りをキョロキョロ見回すなのはの姿が映った。

そういえば、自分はまだ自己紹介もなにもしていなかったことに気づき、声をかける。

「わたし、フィー。　ヨロシクねっ」

「ふぇ？　あ、うん。　わたし、なのは。　高町なのは」

手を差し出すなのはにフィーが握りかえすと、少女は嬉しそうに微笑んだ。

「えーと、フィーちゃん。　此処っていったい何処なの？」

首を傾げるなのは。

どうやら転移してきたことが、よく理解できていないらしい。

少女の問いが耳に入ったのか、先を歩くクロノがこちらへ僅かに首を向けた。

「次元航行艦、アースラの中だよ」

そうこうする間に、いかにも重そうな金属製の自動ドアが眼前に現れる。

見かけとは裏腹に、微かな駆動音を響かせて、両脇へドアがスライドし、ゆうに四、五メートルはあるだろう広い通路が姿を現した。

そのドアを通過した直後、クロノがああ、と呟き振り返った。

「何時までもその格好というのは窮屈だろう。　バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「そっか。　それじゃあ・・・・・」

なのはの白いＢＪと杖が桃色の光を帯びる。

数秒と経たぬ間に学校の制服と赤い宝石へと変化した。

フィーも不審がられても困るため解除する。

と言ってもピンクのジャージの上に透明なＢＪを纏っているだけなため、外見に変化はない。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

少年の言葉になのはが首を傾げた。

・・・・・まさか・・・・・

そんな反応にフィーはツッコミの準備を始める。
何時いかなるときでも遊び心を忘れないのがフィーの信条だ。
フェレットの姿が緑色に発光し、元の人間の姿に変化した。
少女の瞳が見開かれる。
ユーノの元の姿を知らなかったのは明白だ。
・・・・ふふふ、ゆーのんめ～・・・・・
そんなフィーに気づいた様子もなく、少年は気楽になのはに声をかけた。
「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」
「・・・・・」
「？　なのは？　どうかしたの？」
「・・・・・ゆ」
「ゆ？」

次の瞬間、廊下にすっとんきょうな少女の叫び声が響き渡った。

「ユーノ君って!?　ふぇぇぇええ〜〜〜っ!!?」

笑いを堪えながら、フィーは汚物を見るような目でユーノを指差す。

「マ、マサカ!　自分ノコトヲ小動物ダト勘違イサセテっ!?　なのは、早くはなれてっ!　犯されるよっ（笑）」

ぐいっと少女を引っ張り背に庇う。

そんな光景にユーノは呆気にとられたようにポカンとしていた。

「え?」

「あー、・・・・・君達の間で何か見解の相違でも?」

冷静なクロノのツッコミ。

ユーノが弁解?する。

「え?　最初に倒れてたとき、僕ってこの姿だった・・・・・はずだよね?」

「違うよ!　最初からフェレットだったよーっ」

「え!?　・・・・あぁ!!?」

なのはの言葉に何かを思い出したのか、ユーノが小さく叫ぶ。

と、同時にフィーは踏み込んだ。

「ゆーのんの、エッチ、変態、痴漢、もやし、いんじゅう、女の敵、遺跡オタクーっ!!!!」

怒濤の連撃。

拳の嵐をまともに喰らうユーノ。

魔力で強化されていなくとも、腰の入ったフィーの拳はかなり強烈だ。

「ご、ごめん、なのは！　って、ちょっ！　ぶふっ　痛っ　痛いからって、遺跡オタクは関係ないだろーーーっ　あぷぽきゅぴっ」

フィーのアッパーに意識を刈り取られ、少年は沈んだ。

拳を天に突き上げ、いい笑顔で一言。

「・・・・・悪は滅んだ」

「ゆ、ユーノ君っ！？」

駆け寄るなのはに、腕を組むクロノ。

「・・・・・まあ、自業自得だな・・・・・・」

黒い少年の呟きが通路に木霊した。

★★★

案内された部屋には緑の髪をした女性が畳の上で正座していた。

視界に映る盆栽や鹿威しはスルー。

ネギはツッコミを喉の奥に呑み込み、席に着いた。

フィーが対話の中でボロを出さないうちに入れ代わってもらったのだ。

「ご足労、ありがとうございます。　艦長のリンディ・ハラオウンです」

女性、リンディにあわせてユーノやなのはが自己紹介していく。

と言うわけで、ネギはしれっと種を蒔いた。

「ユーノンの幼馴染みのフィーです」

スクライアに属するのか曖昧な言葉。

どうやら先程のフィーの打撃が効いているらしく、ユーノは反応しなかった。

ネギとしてはどうやってユーノを納得させようか考えていたため、嬉しい誤算だ。

・・・・この幸運に免じて、あの角砂糖たっぷりの抹茶は見逃そう。

うん、そうしよう・・・・・

そうこうするうちに、話しはジュエルシードの件に差し掛かった。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます」

リンディの言葉に驚いた顔をするなのは、そして顔を曇らせるユーノ。

しかし、彼女の言っていることは正論だった。

少しのミスが世界の滅びに繋がるなど、民間人に任せておける事態ではない。

正規の訓練をつんだアースラのスタッフが居るのだから、素人に任せる道理はないのだ。

「君達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りの生活に戻るんだ」

クロノがリンディの言葉に頷き、言葉を付け足す。

しかし、ネギとしてはそうされると大変困ったことになる。

このままアースラに乗っていくと、自分達のミラクル号を放置することになるうえ、本局に寄られたら、幾らなんでも正体がバレる。

自前の船があると申告し、自力で帰る展開になったとしても、この事件はフィーの母親に繋がっているらしい。

後々、動きづらくなるのは避けたい。

ネギは鹿威しの澄んだ音を聞きながら、頭の回転を早める。

・・・・ここで手を引くのは危険か・・・・・

どうやって協力関係を築こうかとネギが考えをめぐらせていると、

「まあ、急に言われても納得できないでしょう。　一度家に帰って、今晩ゆっくり三人で話し合うといいわ。　その上で改めてお話ししましょう」

と言うリンディの提案が出された。

一見、無理強いすることなく、なのは達の気持ちを配慮してくれると感じるであろう提案。

だが、ネギにはその裏が見えていた。

フェイトとその使い魔アルフ。

今わかっている敵の存在はこの二人だけ。

だが、あんな幼い少女がロストロギアを自主的に集めているとは思えないだろう。

ネギ自身、まったく事情を知らなかったとしても、指示を出している存在を疑う。

相手の正確な情報がわからない以上、切り札である黒い執務官を温存しようとするのは、戦略上、正しい。

たとえ前線に出るのが、なのはやユーノ、フィーのような十にも満たない子供だったとしても・・・・・

リンディの微笑みを見つめ、脳裏をよぎるのはクルト・ゲーデル総督の笑み。

全く似ていないが、政治に携わる者はどこか似通ってくるのだろうか？

・・・・つまり、利用する気満々ってところか・・・・・

時間的制約からもたらされる焦り。

中途半端なところで一方的に降ろされる重苦しさ。

そんな状態で出される結論など、予想がつくだろう。

そもそも手を引かせるなら、話し合うまでもなくデバイスを取り上げるなりすればそれで終わりなのだ。

だが、今のネギとフィーにとって、この提案はまさに渡りに船。

・・・・ユーノ君の話によれば、ジュエルシードは合計で二十一個。

全てを見つけるにはまだまだ時間がかかるだろう。

相手の思惑にのるのはいい気分が・・・・・

ネギは内心でそう呟いた。

★★★

鹿威しの澄んだ音が響くなか、角砂糖を大量に放り込んだ抹茶を一口啜る。

・・・・・もう少し甘くしたほうがいいかしら・・・・・

畳の上で正座するのは自分を含めて五人。

左手な実の息子でもある執務官、クロノ。

向かい合って右から、ロストロギアを発掘したスクライア一族の少年、ユーノ・スクライア。

現地協力者の高町なのは。

そして、少年を追ってきたと言う赤毛の少女、フィー・スクライア。

・・・・・さて、どんな返事が返ってくるか・・・・・

本来ならリンディとて、こんな協力を誘導するようなことはしたくない。

だが、時空管理局は次元世界一つに収まりきらない巨大組織。

保安、質量兵器の取り締まり、そしてロストロギアの規制のため巨大化した組織はどうしても動きが遅くなってしまう。

ようするに小回りが効かず、人手不足に悩まされているのだ。

スクライアで若くして発掘隊のリーダーを任されるユーノ、先の戦闘を見る限りＡＡＡランクの砲撃魔導師のなのは、そして戦闘前の魔力の高まりがＡＡクラスでかなりの実力が期待できるであろうフィー。

クロノが頼りない訳ではないが、戦力として加えたいのは事実。

三人を一旦返し今晩話し合ってもらってから、結論を聞くことになった。

別れ際、リンディは赤毛の少女に疑問に思っていたことを尋ねた。

「フィーさん。　あなた、もう一組の探索者のフェイトさんにそっくりなのだけど、なにか知らないかしら？」

少女は首をかしげ、他人のそら似じゃないかと返す。

確かに、広大な次元の海には時たま同じ血筋なんじゃないかと思うほど似た人は居る。

・・・・気のせいかしら？・・・・・

少女の顔を見つめると、目を瞬かせている。

まさかこんな歳の子が人を欺く言葉を操るとは思えないし、自分から見ても嘘をついているようには見えない。

「・・・・そう。　あんまり可愛いからつい疑っちゃったわ。
ごめんなさいね？」

そう言って、リンディはお茶を濁した。

★★★

怖い夢を見た気がした。

辺りを見回し、フェイトは自分が拠点としているビルの一室、ソファーにうつ伏せになっていることに気づいた。

寝汗をかいた額を拭い、左腕に巻かれた包帯に気がつく。

なんとなく、手のひらを見つめた。

・・・・・人形じゃない・・・・・・

「・・・・・・？」

なぜ『人形』なんて言葉が出てきたのかわからなかった。

ついさっき見た夢の内容が思い出せない。

・・・・夢なんて、そんなものだよね・・・・・・

時計の針は午後十時を少し回っていた。

どうやらかなり眠っていたらしい。

「っ！！」

そこまでボンヤリと考えて、フェイトはソファーから跳ね起きた。

頭を回るのは母親の怒気を宿した顔。

自分は一刻も早くロストロギアを集めなければならないのだ。

休んでいる暇はない。

・・・・・早く探しに・・・・・・

「っ・・・・・」

めまい。

世界が揺れ、立っていられない。

思わずフェイトはソファーに倒れる。

今までほとんど休憩を挟まずに探し続けてきた疲労が、フェイトの心身を蝕んでいた。

十代後半の女、人間形態のアルフが部屋に入ってくる。

フェイトの様子に気づき、休むように自分を諭す。

労りながらも、らしくもなく弱音を吐く。

いや、それは自分が言いたくても言えない言葉だったのかもしれない。

「もう無理だよフェイト！　時空管理局まで出てきたんじゃ、どうにもならないよ！　ザコならともかく・・・・・」

尻窄みに小さくなっていくアルフの言葉。

言葉に出されなくとも、フェイトは理解した。

フェイトと白い魔導師を止めた管理局の執務官、クロノ・ハラオウンは自分の上をいく実力者だと。

並の魔導師ならともかく、あんな実力者に捜査されたらこの拠点だって安全かどうか不安だ。

「逃げようよ、二人で」

「ダメだよ」

アルフのすがるような提案を少女は拒絶する。

「あと少し、・・・・・あともう少しなんだ」

その言葉は使い魔に言っているのか、それとも自分に言い聞かせているのかわからなかった。

「・・・・わたしはまだ母さんの願いを叶えてない。　まだ、母さんに笑顔を取り戻してない・・・・・」

疲労に蝕まれた体に鞭を入れ、立ち上がる。

フェイトの選択肢に『逃げる』というものは存在しなかった。

ふと、思う。

・・・・・自分そっくりな赤毛の女の子は、いったい誰だったのだろう・・・・・

第五章　願望考察

「へっくしッ」

昼とは一変し閑散とした夜の住宅街に、間の抜けた少女のくしゃみが響いた。

ずずっと鼻をすすったフィーは周囲に人の気配がないのを確認し、小さく息を吐いた。

こんな真夜中にフィーのような子供が出歩いているのが見つかれば、面倒なことになるからだ。

『風邪でもひいた？』

そんなネギの言葉に首を振る。

『ん～、きっと誰かがわたしのことを噂してるんだよ』

再び歩き出すフィー。

少女は海鳴の山間部、森林のなかに光学迷彩によって隠されたミラ

クル号へと向かっていた。

念話による対話で、ユーノやなのはと共に此度の事件に協力する旨を伝えたのは、つい先程のことだ。

明日の早朝には海鳴臨海公園にアースラからゲートが開かれる。

それまでに船の修復状況を確認しようと思ったのだ。

コッ、カッ、と下駄がアスファルトの地面を蹴る音が静粛のなかに浮かんでは消える。

暫しの無言の後、少女が独り言のような小さな声で呟いた。

「フェイトちゃんの理由が知りたい・・・・・か」

なのはの言葉だ。

『あの子の容姿を見るに、フィーと同じ・・・・・』

「・・・うん。　アリシアのクローン・・・・・でも、わたしと同じとは言えないよ。　多分、プロジェクトF．A．T．Eの一番目。　完成形ってやつじゃないかな？　でも、お母さんからしたら違ったんだろうね。　だって、元々アリシアには魔力なんてなかったし・・・・・　わたしにとってお姉ちゃんになるのかな？」

『・・・・そうかもしれないね』

山に入ると、フィーは木々の上に跳躍。

道なき道を船があるだろう方向へ向かって進む。

今はブレスレットと化している無名の手甲型デバイスにのみキャッチできる信号により、フィーは光学迷彩に誤魔化されることはない。

『それにしても、フェイト、か・・・・・』

なにかを懐かしむようなネギの声色に、フィーは興味をそそられた。

なぜか彼は自分の過去をあまり喋ろうとはしないのだ。

「なになに？　友達に同じ名前の人でもいたの？」

『うん？　う～ん・・・・・〈宿敵〉と書いて〈とも〉と読むなら、そうだったのかも知れないね。　もう、昔のことだよ』

その時、なぜか少女にはネギの声がとても年老いて聞こえた。

「ふーん。　男？　女？」

『男。　出会った頃は手も足も出なくてね。　彼に追いつけために、かなりの無茶をしたもんだ。　・・・・そんなアイツも・・・・・・いや、昔の話はいいか。　それよりも、今、だよ。　プレシアさんはジュエルシードで何をするつもりなのか、予想はつくかい？』

「アリシアの蘇生。　それがお母さんの最終目標に違いないんだけど・・・・・・」

フィーはあごに手を当てて考え込む。

思い出すのはプレシアを・・・・母親を見た始まりの光景。

彼女はロストロギアを、それも次元に干渉するタイプのものを集めていた。

そしてネギに出会った崖での出来事。

思い返せば、自分の強い感情に反応して指輪型のロストロギアが発動、次元に孔を開け、どんな効果か自分とネギを引き合わせたのではないだろうか。

つまり、極小規模の次元断層。

そして、次元断層の向こう側は虚数空間だ。

虚数空間にあるものと言えば・・・・・・

「・・・・・・」

・・・・・って言うか、虚数空間は魔法消去、落ちたら最後のトンデモ空間じゃないの？・・・・・・

まさか、大魔導師と称されていた母親が不完全なジュエルシードに願いを託すわけもないし、とフィーの頭ではと言うより、欠けているピースが多すぎて答えに辿り着くことは出来なかった。

『・・・・・まあ、直接会えばわかるよ』

「直接って・・・・・　はあ～、よく考えたら管理局が来てる時点で、お母さんを犯罪者にしないって目標はほとんど無理じゃん・・・・・」

ため息を吐く。

自分にはどうしようもなかったのは幼いながら少女は理解していた。

しかし、理解はしても嘆かずにいられないのが人と言うものだ。

『しょうがないよ。　それに、今のこの状況だってかなり奇跡的だ

よ？　そもそもあの遺跡で次元探査の手段が見つけられたこと自体、かなり天文学的確率だったろうし』

「そう・・・だよね」

頬を叩いて気分を入れ換える。

ポジティブ、ポジティブ・・・・と呟いている姿は、はた目から見ると奇妙にしか映らないが、ここは森のしかも枝の上である。

「よしっ！　元気いっぱい、とにかくガンバるぞーっ」

夜の山に少女の高い気合いの声が木霊した。

・・・・とにかく一言、わたしを放置したことくらい、文句言ってやらないとね・・・・・

★★★

「・・・・と言うわけで、今回協力してくれることになったスクライアのユーノさん、同じくフィーさん、そして現地協力者の高町なのはさんです」

アースラの会議室。

艦長であるリンディの言葉で、ユーノは点と点が繋がったように感じた。

もちろんフィーのことについてだ。

彼女とスクライアの都市で再会したとき、ネギは『フィーの探し物のの目処がようやくついた』と言っていた。

なのに、次元震に巻き込まれた。

つまり探し物がこの世界の付近にあった筈だと、少年は考える。

「・・・・・・」

ユーノは最初、フィーもジュエルシードを求めているのかと疑った。

しかし、ネギが見つけたと言っていたのは自分が発掘をする前、つまりロストロギアは関係ないと言っていい。

・・・・・なら、何を見つけた?・・・・・

答えはフィーの行動が示していると、ユーノは睨む。

どうも少女は『フィー・T・スプリングフィールド』という名前を管理局に知られたくないようだ。

ユーノが知らない場所で犯罪を犯している可能性もなくはないが・・・・

「T・・・・テスタロッサ・・・か」

「こちらが結界魔導師である、ユーノさんです」

リンディの声に気づかず、ユーノは考察に没頭する。

前にも少年は『T』をテスタロッサの略ではないかと考えていた。

かなり仮定の部分が多いが、そこは遺跡発掘と同じ、推理・推察を重ねて真理へ近づくのだ。

・・・・あと、幾つのピースが足りない・・・・・

「・・・ノさん。　ユーノさん?」

「あっ　は、はい!?　ユーノ・スクライアです!　よろしくお願

いします！」

自分へ集まる視線。

どうも考え事をすると、周りが見えなくなるようだ。

恥ずかしさから顔が赤くなるのを感じるが、そこはスルーして少年はミーティングへ戻っていった。

★★★

高町なのはは天賦の才を持ち合わせた魔導師だった。

本来なら魔力資質を持たず、魔法の存在そのものを知らないはずの世界の中にあって、極稀な資質に恵まれた少女だ。

学校帰り、仲良しの友達と一緒に通った帰り道で、なのはは傷付いたフェレットを助ける。

その夜、なのはは自分を呼ぶ声を聞き・・・・魔法に目覚めた。

そして今、少女は次元を渡る船にいる。

フェイト・テスタロッサ。

哀しげな瞳をした金髪の少女と話をするために・・・・・

「おばちゃんっ　焼肉定食おかわりっ」

「はいよ、ちょっと待ってな」

話をするため・・・に？

なのはの目の前には、茶碗いっぱいの白米を掻き込む赤毛の少女と、それをいさめるユーノ。

・・・・ぜんぜんフェイトちゃんとちがうの・・・・・

フェイトそっくりの顔にご飯粒をくっつけたフィーは、なのはのイメージを崩すのに十分な威力だった。

「ちょっと、フィー。　少しは遠慮しなよ」

「んぐっ、んむっ、んん？　遠慮ってなに～？　それっておいしいの～　ただ飯ほどおいしいものはないよっ」

「・・・・はあ、もう良いよ。　なのはは何か食べないの？」

淡い栗色の髪をした少年が、少女の手元を見てそう言った。

置かれたザルソバは、食べ始めからその量を減らしているように見えない。

アースラの食堂になんでソバやウドンが！？と驚いたなのはだったが、特に変な味がするでもなく、普通のソバだった。

「あ、あはは、フィーちゃんの食べっぷりに驚いちゃって・・・・・」

ジュエルシードの捜索はアースラが請け負うと言われたなのはは、緊張しつつも船内で待機していた。

そんな少女をユーノとフィーが食事に誘ったのだ。

「・・・・・ふう」

息を吐く。

フェイトと話をするためとはいえ、馴れない環境に少女は気疲れを隠せなかった。

そんななのはに赤毛の少女が言った。

「休める時は休んでおいた方がいいよ、なのは」

「え？」

メンツユにソバを浸していたなのはが顔を上げると、フィーは食後のミルクティーに口をつけていた。

「そんなに思い詰めなくてもいいじゃんってこと。　休む時は休んで、戦う時はきっちり戦う。　そんで食べられる時はしっかり食べる。　おばちゃん、紅茶おかわりっ　それが人生を楽しむコツってね～」

よくわからなかったが、どうやら自分を励ましてくれているようだと、なのはは気づいた。

「ありがと、フィーちゃん」

「ん？　ん～、どういたしまして？　あ、そうだ！　後で親睦を兼ねてアースラを探検しよっか」

そんな言葉に苦笑する。

少しだけ緊張が解れた気がした。

一時間後、ジュエルシードが発見されるまで、なのはとユーノはフィーに連れられて、アースラの内部を歩き回ったのだった。

★★★

「・・・・・何処にも居ないね」

夕暮れ方の商店街になのはの呟きが小さく響く。

ジュエルシードが発動したと報告を受けたフィー達三人は、さっそく現地へやって来たのだが、そこには暴走体の姿は何処にも見当たらなかった。

「本当に居ないね。　いったいどうしたんだろ？　アースラの人たちが発動を誤認するとは思えないし・・・・・」

眉をひそめたまま、ユーノが歩き出そうとした矢先、隣のなのはが不意に路地裏へ顔を向けた。

「どうかしたの、なのは？」

「・・・ユーノ君。　今、猫の鳴き声が聞こえなかった？」

「猫？」

「うん。　にゃー、って可愛い鳴き声」

そんななのはの言葉に、フィーは薄暗い路地裏に注目した。

『ネギ』

『・・・うん。　かなり微弱だけど魔力を感じる』

・・・・・ゆーのんが結界を張ってるんだから、普通の猫がここに居るはずない・・・・・

警戒を強め、魔力を感じようとするフィー。

相棒の感覚が自分以上に鋭いことは、数々の危険を掻い潜ってきた少女にはわかりきっていた。

何も感じ取れないが、確実に何かが居るのだ。

集中していくうちに、その路地裏に続く横のお店が文無しのフィーがヨダレを飲み込んだお惣菜屋だったことに気づく。

・・・・何となく、ごめんなさい・・・・・

もしかしたら、戦闘でお店が倒壊するかもしれない。

結界内での出来事は、外と隔絶されているため現実のお惣菜屋には被害は起こり得ないのだが、それでもフィーは心の中で謝った。

その時、少女の視界に黒い影が入った。

「うーん、結界の中に猫が取り残されるはずはないんだけど・・・・・」

「でも、猫みたいな声が聞こえた・・・気がしたんだけど・・・気のせいだったのかな?」

「なのはが言ってたのはアレのこと?」

警戒を弛めぬまま、フィーの指先が路地裏の一点をさした。

小さな黒い影。

細い四つ足に、丸みを帯びた長い尻尾。

金色に輝く細長い瞳孔が姿を現す。

『にゃーお』

何処にでも居るような黒猫だった。

それがすぐ目の前の木の影からにまでやって来る。

「あ、本当だ。　おかしいな、魔力を持たない生物は対象から外してた筈なのに・・・・・」

「でも、よかった。　暴走体に酷いことされなくて」

その姿に表情を弛めるなのはとユーノ。

しかし、フィーは黒猫を見開いた目で睨み付けていた。

・・・・・どうやってこんな距離まで近づいてきたの？・・・・・

薄暗いとはいえ、自分が見逃すはずがない。
まるで影から影へ移動してきたような動き。

『にゃー』

「かわいそう。　お腹が空いてるの？」

なのはの足下へ黒猫が近づき、

「どいてっ」

「フィーちゃんっ！！？」

『にゃっ！？』

なのはを突き飛ばしたフィーの下駄が、黒猫にめり込んだ。

グギッ、と異音を放ち吹き飛ぶ猫。

ユーノとなのはが批難の声をあげるも、それを遮りフィーは猫を指差した。

「あんたたち、アレが猫に見えるんだったら目のお医者さんに行った方がいいよっ」

少女の蹴りで首があらぬ方向へ折れ曲がっていた黒猫・・・いや、ナニかは何事もなかったように立ち上がる。

メキメキ、と嫌な音を立てて首がもとに戻った。

金色だった瞳孔が血を連想させる紅に染まる。

気づけば、猫と言うより豹と呼ぶのが相応しい姿へと変貌していた。

「え？　え？　えぇぇー？　ね、猫さんがっ？」

驚きの声を上げるなのはと、呆然と黒豹と化した暴走体を見つめるユーノ。

フィーは声をかけつつ突進した。

「なのは、封印。　ゆーのんはわたしのサポート、よろしくねっ」

ここに、暴走体との戦いの火蓋が切って落とされた。

★★★

「すごい・・・・・」

それは命の掛かった戦いだと言うことを忘れさせるほどの舞踏だった。

音楽の代わりに響くのは拳が大気を引き裂く破裂音、相手をつとめるのは黒豹の暴走体だ。

覆い被さるような体勢でフィーへ飛び掛かる黒豹。

紅く輝く瞳が軌跡となって空間に刻まれる。

疾風を思わせるそれに、赤毛の少女は下駄を履いた足で迎え撃つ。

地面がクレーター状にひび割れるも、力負けした暴走体がフィーの頭上へ蹴り上げられた。

そこからの動きはユーノの目には追えなかった。

空中に展開した魔方陣を足場に、ピンクのジャージが空を駆ける。

十数秒の拳の連撃の後、アスファルトの道路を陥没させて、ボロ雑巾となった暴走体が落下してきた。

ユーノは冷や汗が全身から出るのを感じた。

今まで挨拶がわりに飛んできたフィーの拳があんなに協力だったなら、自分は今ここに立っていないだろうなと思ったのだ。

黒っぽいナニかに変わった暴走体。

「なのは、封印おねがいっ」

「う、うん。ジュエルシード、シリアル?、封印!!!」

なのはの持つ自立思考型デバイス(インテリジェント)のレイジングハートから、桜色の光が伸びる。

力強く、そして温かなそれが暴走体に突き刺さり・・・・・

「あ、あれ?」

すっとんきょうな声を少女が上げた。

直後、少年の耳元に響く猫の鳴き声。

『にゃーお』

ぞくり、とユーノの背筋に悪寒が走る。

とっさに振り返った先には巨大な黒い影。

反射的にシールドを張るのと、暴走体が体当たりしてくるのはほとんど同時。

「ユーノ君っ!?」

「ゆーのん!!?」

衝撃が体を突き抜ける。

ユーノの耳に入ったなのはとフィーの声に返事は出来なかった。

「がっ」

宙を舞う感覚。

ユーノは自分がシールドごと吹き飛ばされたことに気づき、その勢いのまま飛行魔法で空へと退避した。

・・・・・フィーに感謝？しないといけないかも・・・・・

唐突な黒豹の攻撃に耐えられたのは、挨拶がわりに飛んでくる少女の拳でなれていたからかも知れないと、ユーノは内心で苦笑する。

・・・・・おかしい。

なんでなのはの封印が効かないんだ？・・・・・

考える。

そもそも今までの封印は暴走体に効果があったのだ。

・・・・・なら、なんで？

耐えられた？　違う。

耐えたにしたら、無傷なのはおかしい。

おまけに、フィーにボロボロにされたのも治ってるし・・・・・

なのはが空中から誘導弾や魔力砲でフィーを援護するが、避けられてしまう。

「はあああああっ」

フィーの拳が黒豹を宙へ吹き飛ばし、

「ディバインッバスターッ！」

なのはの砲撃が呑み込む。

跡形もなく消し飛んだと思うと、次の瞬間にはフィーの正面にその姿を現し、鋭く伸びた爪で切り裂こうと一閃する。

・・・・おかしい。

僕の時は背後からだったのに・・・・・

さらに、ユーノはフィーの拳は避けようとしないのに、なのはの砲撃は嫌がるように避けようとすることに気づいた。

魔力砲の直撃を受けても平気で現れるにも関わらず、回避行動をとるのは何か理由があるはず、と夕日に照され踊るフィーと暴走体をユーノは凝視した。

フィーの動きに合わせて、動き回る少女の影。

そして気づく。

・・・・影が伸びてない！・・・・・・

頭に稲妻が走った。

「フィー、暴走体の本体は影のなかだ！」

★★★

殴っても殴ってもすぐさま回復する黒豹に、フィーは眉をよせる。消し飛んで一秒もしないで回復など、幾らなんでも生物としておかしい。

単調な相手の攻撃を回避するのにも飽きてきた矢先、ネギが言った。

『影だね』

「・・・・・影？」

見ると、自分の影は夕日に照され長く伸びているのに対し、黒豹の影はその足下に止まっていた。

「フィー、暴走体の本体は影のなかだ！」

頭上からのユーノの声。

・・・・・なるほど、影と殴りっこしてたわけ・・・・・

「だっ！」

黒豹の顔を蹴り飛ばし、コンクリートの壁にめり込ませる。

握り込む右の拳。

環状の魔法陣が腕に展開され、フィーの魔力光である淡い黄色が拳へ集束する。

そして、

「フィーッデラックスウルトラスペシャルミラクルバーニングパーンチッ！！！！！」

奇妙な掛け声と共に影へと振り下ろした。

拳の直撃と同時に解放される短距離砲撃。

足場作成など、フィーが使える数少ない魔法の一つだ。
大砲が着弾したような大音響と淡い黄色の閃光。
少女の放ったそれは、直撃していないにも関わらず、黒豹を砂塵のように消滅させた。
影から小さな黒猫が姿を現す。
「なのはっ」
「ジュエルシード、シリアル？！　今度こそ封印！！！」
強烈な桜色の光が視界を染める。
光が収まると、残ったのは青い宝石、そして痩せ細った黒猫の亡骸だった。
なのはがレイジングハートをかざすと、宝石は小さな光となってデバイスの中枢部分へと吸い込まれていった。
この猫が死に際に何を思ったのかはわからない。
だが、その思いの強さが今回の暴走体の手強さの源だったのかもしれない・・・・・
近くにあった公園の隅に墓を作り、三人はアースラへと帰って行っ

たのだった。

第六章　桑田滄海

フィーがアースラにやって来てから、十日が過ぎた。

食堂のテーブル席。

目の前で湯気を上げるラーメンを啜りながら、赤毛の少女はすっかり見慣れたツインテールが視界の端で揺れるのを認めた。

「フェイトちゃん、現れないね・・・・・」

ストローがささったオレンジジュースのコップを両手で包み、なのはが俯く。

フェイトと対話するために協力を申し出たといっても過言じゃないなのはにとって、あまりいい状況ではないだろう。

そしてそれは自分にも言えた。

・・・・フェイトが出てこないと、状況が進まない・・・・・

ずずーっ、と三人の他に誰もいない食堂に麺を啜る音とが響く。

「こっちとは別にジュエルシードを集めてるみたいだけど・・・・・

」

ユーノの言葉。

金髪の少女は活動を止めた訳ではない。

残りのジュエルシードは六つ。

近いうちに鉢合わせするだろうとフィーは考える。

「まあ、焦らなくても大丈夫だよ。　お互いにジュエルシードを集めてるんだから、最後には取り合いになる。　気長に待とうよ」

「・・・・・そう、だよね。　うん！」

少年の励ましに、なのはは何度も頷いた。

その言葉が希望的観測だとフィーにはわかっていたし、ユーノも理解しているだろう。

だが、悲しげな瞳をした少女を放っておけないと言う、優しいなのはがこれ以上俯くのは楽しいものではない。

「おーい、そこの三人組～っ」

陽気な声が後ろから聞こえてきた。
振り向くと、片手をあげて駆け寄ってくる十代後半の女性。

「あ、エイミィさん？」

なのはの口からこぼれた呟きに、フィーは思い出した。
・・・・たしか、クロノの隣にいたオペレーターの人？・・・・・・

「エイミィさんもお昼ですか？」

「うん。　一人で食べるのも寂しいし、一緒に食べない？」

サンドイッチが詰まった容器をテーブルに置き、エイミィが席に着く。

ユーノやなのはが話している間に、フィーは二杯目。

今度はミソアジだ。

「それにしても、フィーちゃんって、いっつもジャージなんだね～」

「うむ？」

口の中に広がる濃厚な味噌のかおり。

前々から思ってたけど、ここの料理長はなかなかできる、と一人感動しているフィーにエイミィが尋ねてきた。

「やっぱり、『赤毛の小悪魔』をイメージしてるの？」

「ぶふっ！！？」

「にゃっ！？」

「ちょっ　フィー、汚いよ！！」

「だ、大丈夫フィーちゃん？」

思いもよらない一言に少女がむせた。

「けほっ　けほっ　だ、大丈夫。　と、ところでエイミィさん。『赤毛の小悪魔』って？」

「え、知らないの？　管理局じゃ結構有名だったんだけどな～　と言っても、私も聞いた話なんだけどね」

サンドイッチをかじり、続ける。

「半年ぐらい前にね、地上本部の英雄、ゼスト・グランガイツって人と戦って逃げ切った拳闘士の通り名だよ。　赤毛にピンクのジャージを着てたんだってさ。　確か本名は・・・・・」

アゴに手を添えて考え込むエイミィ。

冷や汗が額から垂れるのをフィーは感じた。

十中八九その『赤毛の小悪魔』とやら自分のことだろう。

「ん～、・・・・なんだっけ？　ちょっと聞いただけだから、忘れちゃったよ。　たしか、なんちゃらフィールドって名前だったかな？」

「へー、そんな人がいるんですか」

「・・・・・」

おそらく、よくわかっていないだろうなのはが相づちを打ち、ユーノが無言で自分を見つめる。

・・・・あ、やば。

ゆーのんにバレたかも・・・・・・

と、フィーは警戒していたのだが、意外にもその場は何事もなく過ぎ去った。

★★★

アースラブリッジに設置されている巨大モニターに、稲妻を纏った幾つもの竜巻の姿が映し出されていた。

「なんて無茶を・・・」

艦長であるリンディ・ハラオウンは嫌な汗が額ににじむのを感じた。

「・・・・あれは明らかに個人が出せる魔力の限界を超えています」

息子、クロノの声。

冷静になろうと感情を圧し殺しているのが母であるリンディにはわかった。

だが、アースラ艦長、提督としての責任が、部下をあの場へ送り込むことを戒めている。

放っておけば確実に自滅する犯罪者をリスクを犯してまで助けるわけにはいかないのだ。

そう考えていた矢先、軽い駆動音を立ててスライドドアが開いた。

「フェイトちゃん！　あの、わたし急いで現場に・・・・・」

息を荒げて入ってきたのは、現地協力者のなのはさんだった。

「その必要はないよ。　放っておけばあの子達は自滅する」

自分達は正義の味方ではなく、法、秩序の味方なのだ。

「私達は常に最善の選択をしなければいけないわ。　残酷に見えるかもしれないけれど、これが現実」

こんな幼い少女にこんなことしか言えない自分がリンディは口惜しかった。

モニターの向こうで、金髪の少女が竜巻に弾かれ苦悶の表情を浮かべる。

「君たちは！」

クロノのあげた声で、リンディはなのはが転移装置の中に立っていることに気づいた。

そして立ち塞がるユーノ・スクライア。

「・・・・・っ」

「ごめんなさい。　高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります！」

・・・・・しょうがないわね・・・・・

すとんと心に落ちたそんな言葉。

自分達のしがらみをあの子達に押し付ける必要はない。

転移の強制停止はいつでも出来たはずなのに、リンディはそんな指示を出せない・・・いや、出さなかった。

「結界内へ転送！」

・・・・後でしっかり怒らなくちゃいけないわね・・・・・

命令違反をしてお咎めなしだと流石に不味い。

でも・・・

彼女は小声で呟いた。

「行くならしっかりね、なのはさん」

・・・・無茶をさせて、夫の二の舞にはさせたくないから・・・・

・

★
★★

「おーっ　すっごいことになってる」

巨大モニターに映る、ジュエルシード六つＶＳ三人と一匹の戦いを眺め、フィーは間の抜けた声をあげた。

そんな少女にクロノが意外そうに言った。

「君はいかないのか？」

「冗談。　トリプルＡが二人も居るしサポートも二人、十分でしょ。それに怒られたくないしね～」

ある細工に時間が掛かったため出遅れたフィーだったが、そんなことはおくびにも出さない。

モニターの向こうでは、淡い紅色をしたなのはの魔力光と、鮮やかな金色をしたフェイトの魔力光がまざりあい、凄まじいことになっている。

「艦長、僕もそろそろ」

そんなクロノの言葉にリンディが頷く。

不思議に思ったフィーが首を傾げた。

「？　どうかしたの？」

「封印を終えた後、またそれを奪い合うことになるだろ。　今のうちに準備しておくんだ」

「天下の執務官様も、二人の邪魔はしたくないってことかな？」

「・・・・・ふん」

フィーの言葉に頬を赤く染め、クロノはモニターへ向き直った。

にししっ、と笑い少女も観戦に戻る。

なのはの放つディバインバスターが大気を揺るがし、フェイトのサンダーレイジが天に轟く。

「ジュエルシード六個すべての封印を確認しました！」

「なんて出鱈目な・・・・・・」

「でも凄いわ」

ブリッジに驚きの声があがる。

モニターでは封印されたジュエルシードを挟んで、なのはがフェイトに何かを告げていた。

・・・・友達になりたいんだ、かな？・・・・・・

唇の動きを読み、フィーが微笑む。

その瞬間、

『フィー、何か来るっ！』

ネギの叫びが頭に響き、赤いサイレンがアースラに鳴り響いた。

「ッ！　本艦および戦闘区域に次元干渉！？　あと六秒で魔力攻撃来ます！」

「なにっ！？」

紫電がアースラを直撃した。

・・・・・お母さん！？・・・・・・

そんな雷にフィーは母の、プレシアの面影を幻視した。

★
★
★

サーチャー越しに、管理局の次元航行船、そしてフェイトとアルフに次元跳躍魔法が直撃したのを確認した。

心が痛む。

・・・・・私はまだ人間ね・・・・・・

痛む心があったことに驚きながらも、プレシア・テスタロッサは自分の脇にたたずむ白髪の少女に呟いた。

「・・・・・頼むわ」

「・・・・・もう、後戻りは出来ないよ。　本当に良いんだね？」

自分を見つめ返す灰色の瞳。

記憶を失い、それでも目的に協力してくれる少女は、自分のことを心配してくれているのだろうか。

その事を嬉しく思いながらも、プレシアは首を縦に振る。

「ええ。　私は、・・・娘を喪ったあの日から、立ち止まることを忘れてしまったのよ」

「・・・・・わかった」

そう言って、白髪の少女サーティは玉座の間から消えた。

残るのは小さな水溜まり。

・・・・見事なものね・・・・・

全盛期から程遠いとは言え、大魔導師と呼ばれた自分が見てすら高い完成度を誇る転移魔法。

次元跳躍魔法によって歪みが生じた管理局の船になら、侵入も可能だろう。

プレシアはゆっくりと華奢な椅子から立ち上がった。

★★★

「っ！？」

体を苛む鈍い痛みで、フェイトは覚醒した。

思い出すのは白い魔導師と協力して六つのジュエルシードを封印したこと。

そして・・・体を貫く紫の稲妻。

・・・・母さん・・・・・

自分は見捨てられたのだろうか。

横にはアルフの姿も見える。
まだ意識を失っているようだ。

「目が覚めたみたいだねっ」

目の前には自分にそっくりの顔をした、赤い髪の女の子。
カチッ、と手元から何かがぶつかる音がした。
見ると、枷が両手首にはまり、フェイトを拘束している。
・・・・わたし、捕まったんだ・・・・・
よく見れば、黒衣の執務官や白い魔導師の子もいる。

「・・・・・っ」

「動かない方がいい。　非殺傷とは言え、Ｓクラスの雷撃を受けたんだ」

少年が歩みより、心配そうに声をかける。

「貴女がフェイトさんね」

歩み寄ってくる女性。

「初めまして。　私はリンディ・ハラオウン。　この船の艦長です。
お話は後にしましょう」

「あっ・・・・・・」

「クロノ、医務室に案内して」

自分はどうなるのだろう、とフェイトは思う。

母親の笑顔を取り戻すことはできない。

もう自分にできることは何もない。

白い魔導師の女の子に手を貸してもらい、なんとか立ち上がったその時、

『武装局員待機室に侵入者！　現在応戦するも・・・・・ぐあああっ！？』

甲高い警告音と共に、天井のスピーカーが叫ぶ。

巨大なモニターに、母さんの姿が映し出された。

★
★★

ぞくっ

背筋を走る寒気。

・・・・この感覚は、・・・そうだ、忘れるわけがない・・・・・・

そう思った途端、ネギは叫んでいた。

「フィー、代わって！」

『えっ！？　あ、うん？』

なかば強引に体の主導権を引き受け、その場から思いっきり飛び退いた。

間髪を入れず、閃光が走る。

ネギが立っていた場所が一瞬で石と化した。

『えっ!?　なんなの!?』

『石化の邪眼（カコン・オンマ・ペトローセオース）だよ。当たった対象を石化させる光線だ』

「いったいなにが・・・・・」

クロノの呟き。

リンディが局員に持ち場を離れないよう声をあげる。

コツ、コツ、と背後から何かが歩み寄る音がした。

見覚えのありすぎる制服姿に白髪。

「僕の存在に気づくとは・・・・・　君、何者だい?」

しかし、心の中でネギは頭を振った。

・・・・そんなはずない。

アイツは消滅したはず・・・・・・

外見は多少異なるが、しかし、自分の感覚はあの時消滅した『彼』だと告げていた。

「そんな・・・アースラのフィールドを突破された・・・・・・？」

掠れたエイミィの呟きが、甲高い警告音に掻き消される。

なのははフェイトを庇い、クロノやリンディ、ユーノは臨戦態勢をとっている。

一挙手一投足を見逃さぬよう、眼前にたたずむ白髪の少女に集中するが、

「戦うのかい？　止めはしないけど・・・・・・」

それでも他人を庇う程の余裕はなかった。

『入り』や『抜き』を全く感じさせない超高速の瞬動（クイック・ムーブ）。

初見でこれに対応するのは至難の技だ。

「ッ！？」

クロノの声にならない苦悶の叫び。

拳が黒衣の鳩尾に埋まっていた。

崩れ落ちる少年。

「クロノッ！？」

「クロノ君！」

リンディとエイミィの声がブリッジに響くが、ネギは微動だに出来ない。

以前の肉体なら兎も角、術式兵装も纏っていないこの体では、勝負にならないと冷静な頭脳が告げていた。

白髪の少女の周囲に浮遊する六個のジュエルシード。

クロノのデバイスから掠め取ったようだ。

・・・・これが狙い！？・・・・・

見覚えがある姿に騙されていたが、その容姿はフェイトや自分・・・

フィーに酷似していた。

つまり、アリシアクローン。

・・・・落ち着け・・・・・

ネギは自分に言い聞かせる。

感覚が正しければ、ここで全滅もあり得るのだ。

気を引きしめなおしたネギが目にしたのは、ブリッジの大型モニターいっぱいに映し出された女性、

『お・・母・・・さん?』

プレシア・テスタロッサの姿だった。

第七章　庭園決戦

「お・・母・・・さん？」

純白の精神世界に一人たたずむ少女の唇から、そんな言葉がこぼれる。

ネギの視界を介して映る外の光景、そのさらにモニターの奥。

黒いローブを纏った母の姿。

しかし、その顔は無表情のように見えて、どこか後悔しているようにフィーは感じた。

それは記憶転写の結果とは言え、アリシアとしてプレシアと過ごした経験があったからこそだったのかも知れない。

★★★

『もう十分よ、サーティ。　ジュエルシードを持って戻ってちょうだい』

「・・・了解した」

頷いた白髪の少女はわずかな水溜まりを残して、この場から消えた。

リンディは空回りしそうになる頭を振って、エイミィに指示を出す。

「転移先の座標を割り出して！」

「今、解析中です！　・・・・・座標、出ました。　この映像の発信源と同じです」

そんな回答に、苦虫を噛み潰したような表情をする。

・・・・・完全に隙を突かれた・・・・・

スピーカーの音声での判断だが、おそらく武装局員は当分の間、動かせない。

こうも容易くアースラへの侵入を許すとは、自分達は結界に頼りす

ぎていたのだろうか。

静まり返るブリッジに女性の声が響く。

『はじめまして、と言うべきかしら？　そこにいる人形の製作者、プレシア・テスタロッサよ』

・・・・聞いたことがある名前ね・・・・・

プレシア・テスタロッサ。

かつてミッドチルダで名を馳せた大魔導師と同じ名前だ。

『人形』と言う言葉を聞いて、金髪の少女が視界の端で体を震わせた。

モニターに向き直ったリンディはプレシアを見つめる。

「私は時空管理局、巡航Ｌ級八番艦アースラ艦長、リンディ・ハラオウンです。　プレシア・テスタロッサ、貴女がどんな目的でこんなことをしでかしたのかは知りませんが、こちらの用件は一つです。　貴女の持つジュエルシードをこちらに明け渡し、投降してください。　そうすれば情状酌量の余地ありと・・・・・」

『寝言は寝ているときに言うものよ、艦長さん？』

リンディの申し出を遮り、プレシアが口元を歪める。

『私の用があるのは、そこにいるフェイトだけよ』

「え・・・」

俯いていたフェイトがプレシアの言葉に顔をあげる。

絶望の中に一筋の希望を見つけたように・・・

『貴女には失望したわよ、フェイト』

しかし、その希望は、

『貴女はやっぱりアリシアの偽物。　せっかくあげた記憶も貴女じゃダメだった』

更なる絶望に砕かれる。

「母・・・さん？」

『アリシアを蘇らせるまでの間、私が慰みに使うだけのお人形。
だから・・・・・貴女はもう要らないわ』

フェイトの瞳から感情の色が抜け落ちた。

これ以上は危険だ、とリンディは判断しエイミィに回線の切断を指示するが、

「ダメです！　切断を妨害されました！」

そして、プレシアの言葉がフェイトの心を深く抉った。

何処へなりとも消えなさい

「フェイトちゃん！？」

ブリッジに響くなのはの声。

見ると、フェイトは焦点のあわない瞳で脱力し、なのはがそれを支えていた。

・・・・・なんて無様な・・・・・

侵入を許すばかりでなく、あんな幼い少女の心を守ることさえ出来ない自分に、リンディは強く拳を握りしめる。

『それではごきげんよう』

・・・・・いけない、もっと情報を集めないと・・・・・

転んでもただでは起きないのが自分だ。

後のことを考えれば、情報はあるにこしたことはない。

「待ちなさい！」

その言葉に、モニターの向こうで踵を返したプレシアが立ち止まり呟いた。

『ああ、それから・・・・・私の邪魔をすれば叩き潰すから、そのつもりで』

回線は一方的に切断された。

★
★
★

騒然としたアースラブリッジに冷静なリンディ・ハラオウンの声が響いた。

「被害の確認を急いでください！　エイミィ、プレシア・テスタロッサについて出来るだけの情報を」

「「「「了解！」」」」

流石は艦長を任される女性。

リンディの指示に、動きを止めていたスタッフ達が一斉に動き始めた。

そんななか、淡い金髪をした少年、ユーノ・スクライアは自分でも

驚くほど冷静に情報を整理していた。

プレシア・テスタロッサの言動。

フェイトの正体。

白髪の少女、サーティ。

そして、フィーの表情とネギの動き。

・・・・ああ、なんだ・・・・・

なぜ冷静なのかに思い当たり、苦笑する。

そう、自分はこんな緊急事態にみかかわらず、赤毛の少女が、・・・・フィーが敵ではないと確信できて嬉しかったのだ。

ただただ嬉しかったのだ。

これで自分はフィーの抱える厄介事を全力で応援できる。

自分程度の力で何が出来るかなんてわからない。

それでも・・・

ユーノはフィーを見つめた。

難しい顔をして何かを考え込む少女は、それでもユーノの視線に気づく。

「？　どうかしたの、ゆーのん」

そんな言葉にユーノは何でもないよ、と返す。

少年は未だにその心の動きが何であるかに気づかない。

★
★
★

事件の原因究明に管理局は立ち入りことはなかった。

安全基準の設定ミスは主任であるプレシアにかけられ、それを断固抗議したプレシアは会社に告訴し、事件については裁判で争われた。

しかし、裁判でプレシアに勝ち目はなかった。

社は告訴を取り下げればプレシアの刑事責任を訴えることはせず、不幸な被害にあったアリシアについての賠償金を支払うとの意思を示した。

プレシアはそれを受け入れ、ミッドチルダ中央付近から姿を消す。

事件については、プレシアが違法な手段で違法なエネルギーを用いて行ったものであり、安全確認よりもプロジェクトの達成を優先した、と言う形で記録に残ることとなった。

その後、プレシアは地方で魔導研究に従事することとなる。

人が変わったように研究にのめり込むプレシアに、新しい職場の同僚は恐怖すら覚えるようになり、気味悪がり始めた。

そんなこと、どうでもよかった。

私が求めるのは娘を救う方法だ。

貪欲に知識を喰らった。

前に進む。

自分が正気なのか、それとも狂気に囚われているのかわからなかった。

どうでもいい。

狂っていようがいまいが、どうでもよかった。

数年間のうちに幾つかのプロジェクトを成功させ、プレシアは作業成果と特許料によって大きな富を得、表舞台から姿を消した。

アリシアの賠償金と自ら得た富により、プレシアは時の庭園を購入。

遺跡級の年代物だったが、動きさえすれば問題ない。

アリシアとリニスの遺体は、保存液で満たしたポッドに厳重に納めた。

より永時性の高い方法もあったが、アリシアを遺体扱いする気はなかった。

ただ、眠っているだけなのだ。

『生命蘇生』は魔法における最大の不可侵領域である。

不可能領域と言ってもよい。

魔法は自然摂理や物理法則をプログラム化し、それを任意に書き換え、書き加えたり、消去することで作用に変える技法である。

生命を稼働中のプログラムとするなら、死はそれを完全に消去してしまう作業である。

数行壊した程度ならば修復も可能だが、膨大なソースをすべて消してしまった状態から、復帰させることは出来ない。

そして、プログラムが消えた瞬間に、プログラムを走らせていた入れ物も壊れる。

壊れた入れ物にはどんなプログラムを入力しても無意味だ。

それが、魔法という技法からみた『死』の概念である。

そこでプレシアは先ず、新たな入れ物としての人工生命の開発と人工生命への記憶転写を思い付く。

人造生命研究の職についていた頃、開発チームはこの研究を『プロジェクトF．A．T．E』と名付けていた。

プレシアは開発チームが難航していた人造生命をわずか数年で完成させる。

ポッドで眠るアリシアと寸分変わらぬ姿。

プレシアは悲願の達成を心から喜び、アリシアが全ての記憶を取り戻し、これまでのように微笑み始めるより先に、リニスの蘇生を行うことにした。

同様の方法で蘇生を行ってもよかったが、猫の寿命はさほど長くない。

リニスの死にアリシアが悲しむのは見たくなかった。

だから、主が生きている間は完全破壊されるか契約破棄をしない限り命を続ける使い魔にすることにした。

やっと戻ったかと思われた親子の関係。

それに翳りが落ちるのは早かった。

喋り方、利き手、性格。

数日過ぎた時点で違和感は確信へ変わった。

アリシアが受け継ぐことのなかった魔力資質をその少女は正しく受け継いでいたのである。

違う。

この子はアリシアではない。

プレシアは一度少女を眠らせ、自分がアリシアと呼ばれていた記憶を削除した。

なにかのきっかけで思い出すことはあるかもしれないが、せいぜい夢に見る程度だろう。

魔力資質のせいかと、個体の調整につぐ調整。

五十番目の個体を越えた辺りで、この方法ではアリシアの蘇生は不可能だと思い知った。

運命は簡単には捻り曲がらない。

どうする。

どうすればいい。

どうすればアリシアを・・・・・

三日三晩考え抜いても答えは出なかった。

遥か太古に栄えたと言う『アルハザード』に望みを託す・・・・・

そんなことを考えた頃もあったが、そんな運任せな方法はごめんだった。

ある日アリシアのポッドの前でたたずんでいると、急に発作が襲ってきた。

レベル？の死の病だ。

詰まる呼吸。

息が出来ない。

死ぬのかと、朦朧とした意識の中、使い魔のリニスに抱き起こされた。

そこで頭に稲妻が落ちた。

遥かな太古から存在するにもかかわらず、現在までブラックボックスとなっている『使い魔の契約』。

そこからの私はさらに研究にのめり込んだ。

動物の遺骸を基とし、成される使い魔の製造。

それを辿ればアリシアの蘇生も可能なのではないかと、研究に没頭する。

『使い魔の契約』の秘密を解き明かそうと、狂ったように没頭した。

違法犯罪者のドクター。

無限書庫に封印紛いに仕舞いこまれていた古文書。

利用できるものは何でも使った。

輪廻を切り裂き、摂理を歪め、この世のありとあらゆる法則に真っ向から挑むのが研究者だと嘯く。

だが、無理だ。

いくら必死になろうとも、いくら『あの日』、娘が産まれる前に誓った約束を守るのだと叫んでも、運命は捻り曲がらない。

不可能。

魔法は万能ではない。

必ず限界が存在する。

出来ないものは出来ないと、普通世の中は決まっているのだから。

・・・・・だが、私は普通じゃなかった。

周囲の人間に私のことを『大魔導師』、『天災』と呼ぶ者は居たが、その時までそれを自覚したことはなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私は、天才だったのだ。

残念なことに私は天災だったのだ。

だから、触れることなど不可能な筈の『運命』にすら、その手を届かせるようになってしまった。

その成果が、『サーティ』だ。

『使い魔の契約』は『人』が触れてはいけない真理への入口になっていた。

この世には変えてはいけない、強靭に定められた運命の輪がある。

歴史上、『ソレ』の存在に至った者は果たしていたのだろうか？

わからない。

わからないが、おそらく『ソレ』に触れた者は正気ではいられないに違いない。

だが私はとっくの昔、娘のスケッチブックを読んだあの日から正気など失っていたようだ。

だから、私は『ソレ』に触れる。

運命の輪が壊れてしまう？

だからどうした。

滅ぶ筈ではなかった世界が、滅ぶかもしれない。

死ぬ筈でなかった人が、死ぬかもしれない。

起こる筈のなかった大惨事が、起こるかもしれない。

それがどうした？

自分の体が限界を迎えた。

最早、生身とは言えない肉体。

それが？

そんなことはどうでもいい。

私が興味あるのは、娘を蘇らせる方法だ。

世界のことなどどうでもいい。

くだらない真理など、どうでもいい。

私が守りたいものは・・・・・

「さあ・・・・・」

言葉を発する。

ただそれだけの事にすら伴う苦痛。

宙に漂う十二の宝石。

不完全な古代遺物の願望器。

「・・・・・始めましょう」

★
★
★

「時間もありませんし、早速始めましょう」

アースラのミーティングルームにて、艦長であるリンディの声が響いた。

白髪の少女の乱入により奪われた六つのジュエルシード。

これにより向こうの持つジュエルシードは十二個。

一斉解放すれば、大規模次元断層すら起こし得る、危険な状況だ。

席に着いたフィー達三人組、クロノ執務官、管制を担当するエイミィは皆それぞれ顔を引き締める。

「クロノ、フェイトさんの容態は？」

「はい。　心身喪失状態が続いています。　今は使い魔のアルフがついています」

クロノの報告にリンディが顔を曇らせる。

プレシアが口にした言葉は完全な否定。

親子の関係を破棄する言葉だった。

母親だけが唯一の支えだったフェイトにとって、それは身を引き裂かれたのと同義だ。

そして、フィーもまた・・・・・

・・・・あれって、わたしにも言ってたんだろうな・・・・・

心に暗鬱な雲が立ち込める。

状況から見て、プレシアに捨てられたといっていい少女は当然その程度のことは予想していたし、フェイトのように心身喪失するようなことはない。

だが、僅かなりとも希望を持っていたのだ。

『・・・・・フィー』

心配そうなネギの声。

自分も知り合いかもしれない白髪の少女のことを考えこみたい筈なのに、それでも彼は少女のことを気にかけてくれるのだ。

『大丈夫』

暗鬱な雲を払い散らす。

そうこうするうちに、ミーティングは進んでいった。

「エイミィ」

「はいはーい」

こんな時でも陽気な声で、エイミィが長方形のテーブルの中心、赤い大きな球体から立体映像を浮かびあげる。

映し出されたのは一人の女性。

・・・・・お母さん・・・・・・

ズキン、と痛む胸を抑えながらその映像を見つめる。

「ミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスタロッサ。　専門は次元航行エネルギーの開発、研究。　偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故が原因で中央から放逐された人物です」

言葉を続けるうちに、どんどんエイミィの声から陽気な調子が消えていった。

「放逐後の足取りや家族関係は？」

「はい。　データがきれいに消されていましたが、本局に問い合わせた結果、ある程度は補完できました。　二十六年前、次元航行エネルギー駆動炉、ヒュウドラの暴走事故を起こし、地方で魔導研究に従事、後に消息をたっています。　家族関係ですが、事故で娘のアリシアを亡くして以来、独り身のようで・・・・・」

瞬間、

『時の庭園より魔力反応多数出現！　五十、百・・・二百五十、三百・・・同時に次元震発生！　このままのペースだと、あと一時間で大規模次元断層がっ！！！』

唐突に本日三度目のけたたましい警告音が鳴り響き、監視の任についていた局員の焦った報告がながれてきた。

そんな報告を聞き、リンディ提督がフィー達に向き直る。

「なのはさん、ユーノさん、フィーさん。　事態は一刻を争います。
我々、時空管理局はこれより時の庭園へ侵入し、プレシア・テスタロッサを逮捕します。　おそらく、これまで以上に危険でしょう。
・・・・・あなた達はどうしますか？」

真剣な声が告げていた。

これより先は、暴走体との戦闘とは比べ物にならない程危険だ、と。

・・・・・上等じゃん・・・・・・

フィーは頷く。

暗い培養槽から始まった旅が今、終わりに近づいているのを少女は感じた。

・・・・・その前に・・・・・・

『ネギ、夢の中に入れる魔法ってある？』

★
★
★

先の見通せぬ闇の中、フェイトは力なく脱力しゆらゆらと漂っていた。

・・・・・まるで人形・・・・・・

人形、人形、人形、人形、人形、人形、人形、人形、人形、人形、人形、人・・・

そう、自分は人形だったのだ。

しかも今は捨てられた人形だ。

偽物の体に偽物の記憶。

偽物、偽物、偽物・・・・・偽物。

なんだ、自分は全部偽物だ。

本物なんて何一つないじゃないか。

ズキン、と胸が痛む。

傷なんてない。

母さんの雷は非殺傷だったから、傷なんて何処にもない。

・・・・・なんで・・・・・・

何故、胸が痛むのか少女にはわからなかった。

・・・・・もう、どうでもいい・・・・・

暗い闇に身を任せる。

このまま溶けて消えてしまえばいいんだと、フェイトは思った。

そんな矢先、ぼんやりと白く光る少女が現れた。

フェイトのような長髪ではなく、肩ほどまで伸びた髪を頭の後ろでゴムでまとめている。

しかし、その顔立ちはフェイトと見間違うほどよく似ていた。

ちょん、と飛び出たアホ毛を揺らし、少女が片手を軽くあげて挨拶した。

『うぃっす！　おはよう、こんにちは、こんばんは？』

しかし、フェイトには反応する気力さえなかった。
なにもしたくないし、なにも聞きなくない。

「・・・・・」

『ねえ、何かしらリアクションをとってくれないと、こっちとしてもどう反応すればいいか困っちゃうんだけど』

「ふひゃっ」

あろうことか、白く光る少女はフェイト頬っぺたを左右に引っ張りだした。

流石に無視できず、振り払う。

ジンジンと頬っぺたが痛み、枯れたと思っていた涙が瞳ににじむ。

「うう〜・・・　あ、あなたはいったい誰?」

『ふ〜　やっと反応してくれた。　まったく、わたしのお姉ちゃんはのんびり屋さんだねっ』

「？　お姉ちゃん？」

意味がわからず首を傾げるフェイトに少女は続ける。

『こうやって話すのは、はじめてだよねっ　はじめまして。アリシア五十番目のクローン、フィフティスことフィー・T・スプリングフィールドです！　よろしくっ』

「よ、よろしくお願いします？　って、え？　ええ？」

クローン、五十番目、フィー・・・・・・

いきなりのことに目を白黒させるフェイトだったが、よく見れば眼前の少女は白い魔導師の仲間、自分そっくりの女の子だと言うことに気づく。

髪の色がわからないとここまで自分そっくり・・・・・いや、アリシアそっくりなフィーに、フェイトが自分の境遇を思い出す。

「・・・・・あなたも、・・・・そうなの？」

だとしたら、どうしてこの子は笑っていられるのだろう、と不思議に思う。

『まあ、そうだよ。　捨てられたわたしはお母さんを追って、遠路はるばるこんな辺境世界までやって来た訳だよ』

捨てられた、と言う言葉に母の言葉を思いだし、ズキンと胸の奥がまた痛んだ。

『ねえ・・・・・そのままでいいの？』

目の前の子はそんなことを言ってくる。

フェイトが今感じている絶望感を多少なりとも理解しているはずなのに、そんなことを言ってくる。

「・・・・・」

無言で背を向ける。

拒絶の意思で強固な殻を作り上げ、自分を覆う。

けれど、そんな心の壁を、

『・・・・・もう、お母さんに会えなくなるかも知れないのに』

フィーは簡単に砕いた。

思わず振り返ったフェイトが見たのは、先程とは打って変わって俯く少女だった。

『今、現実のわたしの体は相棒に任せてるんだけどね。　ネギによれば、あと一時間弱で大規模次元断層が起きるんだってさ』

「!?　な、なんで」

『お母さんだよ。　どうやらアリシアを生き返らせるって言ってたのは本気みたい。　死者の蘇生なんてどうやって成し遂げるのかはわからないけど、お母さんならやるよ。　・・・・どんな犠牲をはらっても』

思い出すのは、自分のことを『アリシア』と呼ぶ母さんとの記憶。

フェイトの過去は記憶転写による偽りのものだが、プレシアが娘を愛していたことは間違いない。

なぜなら記憶の中の母親はいつも優しく笑っていたから・・・・・

「・・・・それで、お母さんがアリシアと笑い合えるなら」

わたしは構わない、とフェイトは小さく呟く。

ズキン、と胸の奥が鈍く痛んだ。

『本当に？　そのせいでお母さんが広域指名手配の犯罪者になったとしても？　大規模次元断層がアリシアの蘇生にどう影響するのかは知らないけど、周りの世界に住む何十何百億の、ううん、もっと多くの命が犠牲になるんだよ？』

「・・・・・っ」

『わたしはお母さんにそんな罪を背負って欲しく・・・・・』

そこで一旦言葉を切った少女はフェイトに背を向けた。

その体が足下から溶けるような消えていく。

『もう時間だってさ。　だから最後に聞くね』

「・・・・・」

『フェイトはさ、自分のことをどう思ってるの？　アリシアの偽物のだって思ってる？　お母さんの操り人形だって思ってる？』

そんな言葉にフェイトは無意識のうちに胸を抑えた。

痛いのだ。

どうしようもなく胸の奥が抱い。

偽物のはずの自分がなんで。

人形のはずの自分が、これじゃあ心が痛いみたいじゃないか、とフェイトは思う。

「わたし・・・・・は・・・・・・」

『本当に人形だったら、痛くなる心なんてないよ。　もし痛くなる心があるんだったら、それは人形って呼べないんじゃないの？』

「・・・・・」

『つまりさ・・・・ああもう、小難しいことを言うのはネギの仕事なのにっ　つまり、わたし達の体がアリシアのコピーだったとしても、心は本物なんじゃないのってこと！　もう、お姉ちゃんなんだから、もっとこうどっしり構えてよねっ　じゃあね。　わたしはいくよっ』

「あ・・・・・」

フィーは闇に溶けるように消えた。

そして再びフェイトは何も見通せぬ暗闇のなかを漂う。

・・・・お姉ちゃん、か・・・・・

確かに自分が一番目で、フィーが五十番目なら、自分のほうがはやく生まれたことになるが、とフェイトはため息を吐く。

言いたい放題言って去っていった妹（フィー）の姿を思い出しながら瞳を閉じる。

しばらく闇のなかを漂い、フェイトは瞳を開けた。

「・・・・・よし」

・・・・今は目を覚まそう。

わたしの心が本物とか偽物とかは一先ずおいておいて、今は・・・・

落ち込むことは後でいくらでも出来る。

でも、母さんを止めるのは今しか出来ない。

ピキリ、と硬質な音を立てて世界に罅が入った。

・・・・・母さん・・・・・・

最後にそう呟き、フェイトの視界は白く塗りつぶされた。

★
★★
★

アースラの転移ゲートを抜けて辿り着いた時の庭園。

見渡す限りのそこはファンタジーゲームに出てくる魔王の居城と化していた。

禍々しくたたずむ城。

重低音の地鳴りが震動と共に鳴り響く。

フィーは両手を気合いを入れるように握りしめた。

「私はここでディストーション・シールドを張って、次元震を抑え

ます。　その間になんとか時の庭園の魔力炉、そしてプレシア・テスタロッサを確保してください」

そう言ったリンディの背中に光の翼が出現する。

『ディストーション・シールド』とは空間の狭間に特殊な歪みを生じさせ、範囲内の空間干渉や攻撃を低減、無効化する結界魔法だ。

この庭園を覆うほどの空間歪曲は個人の魔力では不可能。

おそらくはアースラから魔力供給を受けるのだろうと、フィーは思った。

光の翼は体内に収まりきらないアースラからの魔力を蓄積し、運用するための物なのだ。

「来たぞ」

そうこうするうちに、クロノが何時になく鋭さをおびた口調で視線をエントランスホールへの門へ向けた。

なのはやユーノが呻くように息を飲む音が耳に入る。

巨大な剣や槍、砲身。

重厚感溢れる分厚い鎧。

何百という駆動音が一つに重なりあうのをフィーは聞いた。

一体一体が二メートル以上の図体、少なくともAランクの魔力を有する機械兵が視界を埋め尽くさんがばかりに前進する。

流石のフィーも固唾を飲んだ。

完璧な五列縦隊をなした乱れぬ駆動音が、時の庭園に響き渡る。

その数、実に五百。

内部の兵も合わせればさらに数倍に膨れ上がるだろう。

こちらの戦力はフィー、なのは、ユーノ、クロノ、リンディ。

リンディは次元震を抑えるために戦闘に加われず、四人。

機械兵達が各々の武装を構えて、動きを止めた。

クロノが念話で全員へ確認する。

『僕とフィーがプレシアの居る城の中枢へ。　なのはとユーノは上部へ、動力炉を封印したのち合流。　いいね　母さ・・・艦長、次元震をお願いします』

無言で頷く。

そして、合図もなく唐突にそれは始まった。

クロノの精確極まる高速誘導弾。
なのはの大威力砲撃。
ユーノの強固なバインド。
そして、フィーの強烈な拳。
四　対　数百数千
苛烈極まる戦闘が開始された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4575v/

リリネギカルま！

2011年10月12日15時52分発行